趙公明がアンニュイな訳がない

シアス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がつくと目の前に趙公明が。

色々と誘導された気もするが、原作開始２０００年前から妖怪ライフをスタートさせる。

楽しいはずの妖怪ライフ。

期待に胸おどる仙人界での宝貝作り。

だが本人は知らない。

人間界の歴史を大きく乱すことが滅亡フラグであることを。

この作品は捏造や妄想・作者の思い込みで書いています。

設定無視や矛盾・勉強不足などがありますが、お手柔らかにお願いします。

あと初執筆で、読みにくい駄文です。その辺も、お手柔らかにお願いします。

目　次

原作開始２０００年前
この男がアンニュイ？そんな訳がない　1
むしろアンニュイなのは俺だ！　5
趙公明の妹達がこんなに美人な訳がない　14
御姉様達マジ良い人（比較対象趙公明）　21
さらば美味しそうな料理を眺める日々よ。そして時の流れは残酷　27
閑話　信じて貰えないかもしれないけど、本当にアンニュイなのさ　34
七怪を攻略せよ！
大組織の偉い人に合うのって緊張するよね。趙公明？はっ、あれは自称だろ。　38
せめて有用な情報が欲しい。趙公明は味方だよね？　43
これが平穏なのか！　48
鬼ごっこは楽しいな。自分の命が賭かってなければだが！　54
真の七怪があらわれた　60
後始末の後は祝勝会。あの惨状には目をつぶって欲しい　65
閑話　このアンニュイ！君に届け！　71
閑話　うちのナンバーツーがどうやらアンニュイらしい　77
原作開始１９５０年前ぐらい　仙人界での生活が始まる
仙人界，は，平和だ　83
宝貝が欲しい！　89
術は要らない子だなんて言ってないよ　95
趙公明と行く十天君勧誘の旅「その壱」

重大な事を気付いてしまった ―――― 100
御代はいかほど？ ―――― 107
これは天罰だと思います ―――― 112
目に見える落とし穴にはまるヤツってどう思う？ ―――― 118
はたしてこれは収穫と言えるのだろうか？ ―――― 123
閑話　出番が有ってもアンニュイ ―――― 127
原作開始１９００年前くらい　そろそろ一人前だと思いたい
妖怪はじめました ―――― 139
Ｑ．これは宝貝（ぱおぺえ）ですか？　Ａ．宝具（のうぶるふぁんたずむ）では無い事は確かです ―――― 144
もっと光を ―――― 149
俺がトドメを刺したと思いたくない ―――― 154
金鰲島七不思議 ―――― 158
閑話　アンニュイは終わらない ―――― 167
星に願いを
それは星に願ったらアカンやつ ―――― 171
お遣いを頼む感じに言われても困る ―――― 176
兄様なにか道具を出してよ「まったく正大は、しょうがないな」
181
たまには活躍したいと願うのは間違っていますか？ ―――― 185
晴ときどき隕石。ところによっては、虹や雷やブラックホールや蠢く闇が見れるでしょう ―――― 190
これで今夜から安眠出来る……訳がない ―――― 201
アンニュイ不足だからアンニュイ ―――― 210
原作開始１８００年前くらい　タダ働きしない為にタダ働きする

休みの為ならサビ残早勤ドンと来い

無ければ作れば良いと気がついた

原作開始２０００年前
この男がアンニュイ？そんな訳がない

「僕の名は趙公明。バラの定めに導かれ華麗に生まれた気高きプリンス。特に理由は無いけれど君が古代人・宇宙人・異世界人なら、さあ戦おうじゃないか」

まだ寝足りないような気怠い感覚にとらわれながらも、なんとなく空を見上げていた。

青く晴れわたり良い天気だと思える空が広がっている。

そんな空を眺めていると、空から異様にキラキラとしたオーラを放つ何かが落ちてきて自己紹介を決めた。

まだ寝ぼけているのか思考が上手く働かないし、頭はスッキリせずぼやけたままだが分かる。

コイツは関わるとヤバいと。

「おや？反応がかんばしくないね。演出にこだわった登場だったから驚くのは無理もないけれど、いささかノーリアクションにも程があるんじゃないかい？」

高笑いをしながら空に浮いている謎の男だが、よくよく見るとワイヤーにつられている。

ここは外で天井はない。

目の前の余りにもぶっとんだ存在から現実逃避をした結果さらに現実逃避をすることになりそうだ。

「やはり肉体を失い魂魄体のままだと挨拶もリアクションも戦闘も出来ないのか困った。あ、ちょっと下して貰えるかな？オーライオーライ」

困ったそぶりを見せたと思ったら上に声をかけて、男が地面に降り立つ。

何か物騒なことが聞こえた気がするが、サラッとはなった衝撃的な言葉が頭を占める。

え？肉体を失っている？誰が？

言われて気付いた事がある。
それで体が思うように動かない訳か。
傍から見たら自分はフヨフヨと浮いている人魂なのだろう。
冷静に考察したのは、ほんの数秒ほどで後は数々の疑問や死んだかもしれない現実にパニックに陥る。
え？何？俺死んでるの？
「そこの君い。何かお困りかい？僕は、こう見えて偉い仙人なんだ。きっと君の悩みを解決できると思うよ」
なんとなくフランスとかの貴族や軍人を思わせるような出で立ちで、どこから取り出したのかワイングラスを片手に優雅なポーズを決めた男が話かけてきた。
今こいつ自分を仙人とか言ったか？
頭大丈夫なのかな？
ちょっと今忙しいからあっちに行っててくれないかな？
この男にドン引きしたが、おかげで幾分か冷静さが戻ってきた。
自分の名前と死因などは思い出せないが、ある程度の知識はあるようだ。
おそらく断片的な知識で、これが使い物になるかどうかは疑問だが無いよりはマシだろう。
それと魂魄体と言うか幽霊になってしまったからには、もう慌てても仕方がない。
次に今の自分に何が出来る？
どう行動に移すかが大事ではないだろうか？
とりあえず、思考を前向きに切り替えべき。
そう結論を付けて、これからの未来に頭を悩ませていると声が掛かった。
「ノンノーン。無視とは酷いじゃないか。僕は君が欲しがる情報を持っているというのに」
ほう。そこまで言うのなら聞いてみようじゃないか。
どうせ大した情報じゃないんだろう？
「やっと聞く気になってくれたようだね。仙人・道士・妖怪は魂が生き

ていれば再生できるんだ。君は見るから生きがいいようだから、もしかしたら肉体を得られるかもしれない」
な、なんだって！
とても重要な話じゃないですか。
偉い仙人様、その話をもっと詳しくお願いします。
「やっとリアクションが返ってきたと思ったら、すがすがしいまでの掌返し。嫌いじゃない。まあ、簡単なのだと3通りくらい方法とだけ言っておこう」
けっこう少ない？いや、方法が有るってだけでも凄いのか。
「まずは1つ目だけど、前の肉体の情報があればそれを元に新しく肉体を作ってそれに魂魄を詰めるのだけど、残念ながら君の情報は無い。なので前の肉体の事は諦めてくれたまえ」
さっそくですか。
まあ、無理に作って変な物に魂を突っ込まれても困るからね。
むしろ嬉々として変な肉体を作りそうで怖い。
とりあえず、次お願いします。
「2つ目は憑依に近いかな。生まれたてで魂魄が弱い人間か、死にたてで魂魄が抜けた人間の肉体を奪う感じだね。条件によって問答無用で奪える存在もいるけど、これは稀な存在だね」
これは、ちょっと無理かな。
他人の肉体を奪うとかハッキリと言われたら抵抗があります。
「ちなみに仙人を除く、今の人間たちは大きな川の近くで原始的な生活を営んでいるのだが、君にそれが耐えられるかい？」
なんとなく都会っ子な気がする俺に原始的な生活とか無理そうです。
下手したら、復活そうそうに死ぬか苦痛の未来しか見えない。
これも無し無しって、これが無理ならどの道復活できてもダメじゃん。詰んだ。
「最後になるけど、僕としてはこれをオススメしたい。妖怪になってみないかい？ここに妖怪になった前例がいくつかある植物の種があるのだけど。これに君が宿れば妖怪になれると思うんだ。これなら

別の生命から肉体を奪う訳でもないのだから抵抗も少ないだろう。
それに妖怪なら常人にはない力があるから楽しいと思うよ？」
そう言って男が懐から何かの種を取り出して見せる。
なんの変哲もない普通の種だ。
これが妖怪になる種にはとても見えない。
「疑っているのかい？まあ、見て貰えば分かるさ」
そう言って種を地面に埋める。
すると、あっという間に芽が出て花のツボミをつけた。
恐ろしく成長が早い植物だ。
これが妖怪の元だというと少し弱い気もするけど、ちょっとだけ信じてみようかと思える出来事だった。
でも、仮に妖怪になれたとしても、どの道原始的な生活をするのなら意味ないんじゃないか？
特別な力を持った妖怪ライフってのも少し憧れはするが、血で血を洗うサバイバル生活とかで苦労するくらいならこのまま魂魄で気ままに彷徨うのも有りな気がしてきた。
「確かに大変かもしれない。そうだ、しばらくの間は、僕の妹達に面倒を見るように頼んでみるよ。どうかな？」
え？妹？美人？
「もちろん自慢の妹達さ。期待してくれたまえ」
その話乗った！
そして俺は目の前にあるツボミに突撃した。
これから始まる美人の御姉様と送る素敵な妖怪ライフに希望を膨らませながら。
「これで晴れて君は僕の弟になるね」
最後に不吉な台詞が聞こえたが気のせいで有って欲しい。

むしろアンニュイなのは俺だ！

今日から俺も妖怪の仲間入り。
そう思っていた時期がありました。
今の俺は植木鉢に入った状態で趙公明に抱えられている。
うん。まだ一輪の花のままなんだ。
どっからどう見ても植物。
妖怪要素ゼロです。
だ　ま　さ　れ　た！
「待ちたまえ正大。そんな人聞きが悪い事は言わないでくれたまえ。言い忘れてたけれど、普通妖怪になるには千年以上もの間月日を浴びて下級な存在とも言える妖精になり、力を蓄えて人型に変化できるようになると妖ゲツに格上げし、完全に人型を保てるようになって妖怪となるって訳さ」
ちょっと待て。
そんな時間かかるなんて聞いてない。
それに正大ってなんだ？
「まあまあ、過ぎた事で慌てもしょうがない。ここは前向きにいこうじゃないか。あと、正大は名前だよ。ほら、植物って名前を付けると成長が早くなるって言うだろ？それにいつまでも、君と呼んでは家族って感じがしないじゃないか？だから勝手に趙正大って付けさせて貰ったよ」
前向きにって誰のせいで慌ててると思ってるんだよ。
ちなみに名前に関して拒否権は？
「パルドゥン。それは出来ない相談さ」
うーん。まあ、いつまでも名無しってのは気分悪いから、それで良いけどさ。
植物の妖怪に家族って、まさか？
趙公明は、とっても寂しい人？
「ノーン。分かってないね。この僕も妖怪さ」
なん……だと？

通りで妖怪をプッシュする訳だ。
もしや、妖怪になった前例と言うのは？
「もちろん。それは僕のことだね。あと妹達は、まだ妖ゲツだけどそろそろ立派な妖怪になるから数に入れても良いと思うんだ」
やたら弟と呼んだから上下関係とかの弟分的な事だと思っていたら、実際に弟になっていたなんて。
偉い仙人なら一時的に庇護下に入るのも有りかなーって思ってたけど、こいつと一生の縁が出来てしまったのは、なんだか憂鬱。
「それは正大の杞憂に終わるよ。ちゃんと立派な紳士に育てるので安心してくれたまえ。それに、この僕に抜かりは無い。なるべく早く妖怪にする為に実験……じゃなくて、計画も立ててある。これはもう豪華客船に乗ったも同然だね」
いやいやいや、そう言われても気分は晴れないのだけど。
あと、紳士への教育とかお断りします。
それなりに自分って物が出来上がってるので今更変わるのは苦痛です。
それと実験って不穏な単語が聞こえたのだけど、その豪華客船って氷山にぶつかって沈没したりしないよね？
「さてと、そろそろ目的地に着く頃だね」
趙公明は、いつもの高笑いを上げて話題をそらした。
視線を前に向けると、いかにもって感じに妖気を放つ山が見える。
普通なら近寄りたくない雰囲気を放つあの山に何か用があるのだろうか？
俺はこの辺りで留守番を希望したい。
そんな俺の内心を気にすることもなく趙公明の気球（大量のバルーンで浮いてる）は前の山に進んでいる。
乗り始めた時は、そんな物で思った通りに空の旅ができるのか疑問だったが、間違いなく山に向かっている。
現実逃避したい。
確実に厄介な事になる気がする。
「さて、そろそろ降りるとするか」

ちょっと待て飛び降りるのは勘弁してください。
ドッコイショと足を上げて軽く、柵をまたぐ気配を見せたので、慌てて懇願する。
「ほんの冗談さ。これを本気にするだなんて。心にゆとりが無さすぎるよ。紳士たるものいかなる時も慌てないものさ」
いやいや、紳士だって慌てても良いじゃない。
それ以前に紳士じゃないし。
そもそも、お前って本当に紳士？似非とかじゃなくて？
あとファーストコンタクトで空から落ちてきたよね？
もう、お前なら何をやらかしてもおかしく無いと思うのは俺だけなのか？
「さてと、そろそろ高度を下げるとするかな。この辺りからは奴らの縄張りみたいなもんだし」
はい。軽くスルーされました。
そして、何やらシリアスムードを作ろうとしてますが事情が分からない俺としては、色々と説明して欲しい所です。
あの山にいったい何の用があるのです？
「あそこには龍脈の穴があるのさ。僕達の所属する金鰲島としてはエネルギーの確保は重要な課題だからね。通天教主様に制圧・掌握を命じられているんだ。だからせっかくだし、そこのエネルギーを無断転用すれば早く妖怪になれるんじゃないかと実験……じゃなくて兄として一肌脱ごうとってわけだよ」
興味本位で龍脈を試したいだけってのが伝わってきました。ありがとうございます。
あと、おそらくトップの通天教主様は人選ミスとかじゃないですか？
こいつ任務の対象を無断で着服するつもりですよ。
むしろ着服するのは俺だから、ばれたらヤバくない？
「通天教主様もそこまで狭量ではないさ。でも、目標は複数か所あるから、これから掌握する場所は最後にしたって事にすれば、おそらく問題はあるまい」

あれ？実は許可貰ってるパターンじゃなくて、本当に無断でやるパターンですか？
それで隠しきれると思っているのか、これから着服させられる身としては遺憾の意を表するよ。
「限りなく黒に近いグレーだけど、僕の立場を考えると黙認して貰えるさ」
うーん。まあ、こっちとしては、千年植物してるよりは早く妖怪になりたからね。
他に手段が有るのかも分からないから、ここは頼るべきか？
趙公明の権力的なものに賭けてみようかな？
本当に期待してるからね？
フリじゃないくて、その件は本気で頼むよ？
まあ、でもこの件は、もういいんだ。
遠い未来の話より、今の周りの刺すような視線が気になるのですが？
「実は、妖怪も仙人も一枚岩じゃなくて、それぞれいくつかの勢力があるんだ。龍脈の穴は、それらの存在にとって力を得る意味でも、住みやすさの意味でも大事な場所になる」
えーと、つまりここは敵地で、俺たちは招かれざる客ってことかな？
「ブラボー。その通りさ」
ちょっと俺は帰るよ。
お願い俺を元居た場所に帰して！
身動きもできないのに戦闘に巻き込まれたら堪ったもんじゃない。
騙されて植物になった挙句そうそうに死ぬとかあり得ないからね。
「ちょっと遅かったみたいだね。ここのボスのおでましさ」
そう言って視線を向けた先には、筋肉が膨れ上がった巨大な猿みたいな化物と、それに従うかのように手下達が待ち受けていた。
そして、視線だけを向けていた監視も姿を現し俺たちは敵に囲まれた。
「この地に単独で侵入者が来たからどんな強者かと思えば、吹けば飛

びそうなただの優男ではないか。この付近を支配する猿魔王が長子」
「単刀直入に言わせて貰おう。ここの龍脈を使いたいから君たちは出ていってくれないかな？僕は平和主義者だから、この条件を飲んでくれるなら君たちを害することは無いよ」
趙公明は、相手の名乗りを途中で遮るように、挑発的な要求を突きつけた。
もちろん相手は少し呆けたあとに、何を言われたのか理解し怒髪天。
マジで帰りたい。
「貴様！生かしては返さんぞ！」
怒りに任せてボス猿が突っ込んでくる。
まるで巨大な壁が迫ってくるような迫力に走馬燈がよぎるのか、世界がもの凄くゆっくりに感じる。
あんなのに轢かれたら、雑草が刈り取られるように俺の人生……いや、植物生が終わってしまう。
マジ趙公明。お前の罪を数えろ！
「おおう。これだから力任せになんでも解決する存在は困る。君たちとの戦闘を楽しみたいのだが、僕は何かと忙しい身でね。悪いけど手早く済まさせてもらうよ」
そう言って、俺を傍らに置き。
もう何度目になるか分からないが、どこからか巨大な鋏を取り出し天に掲げた。
絶対に悪いとは一欠けらも思ってないと確信できる。
「あ、僕の、あ、僕のスーパー宝貝。金蛟剪レインボードラゴン」
虹色の光が出たかと思えば、それが別れて七匹の龍が現れた。
その内の一匹がボス猿に向かうと、ボス猿は回避する暇もなく龍に飲み込まれた。
そして、残りの龍がボスも手下も変わらないとばかりに、残った猿達を蹂躙していく。
この圧倒的な光景に俺は思った。
趙公明に、いや、兄様に舐めた口をきくのは止そうと。

「これも仕事でね。悪く思わないでくれたまえ」
お兄様は涙を流しているが、おそらくフリだろう。
それで、この虐殺っぷりと自然破壊を誤魔化せると思っているのだろうか？
「正大。何か言いたいことでも？」
いえ、なんでもありません。
「そうかい？では、ちょうど開けた場所があるから、そこに植え替えてみよう」
開けたと言うか、開いたと言える場所に、俺を植え替える。
とりあえず、地に根をはるように意識してみたが、エネルギーが流れ込んでくるとか、力が湧いてくるとか、そんな物はない。何も感じない。
あえて違いがあるとしたら、兄様が縮んだ？
「お？さっそく効果が有ったみたいだね。思ったより成長が早い。このペースなら十年も掛からずに人型になれるかもしれないね」
あ、俺が成長してたのね。
さすが妖怪の元。
普通じゃあり得ない成長だ。
しかし、これでも十年か。
ちょっと長いな。
「まだ龍脈のエネルギーを上手く吸えてないみたいだけど頑張ってくれたまえ」
あー、やっぱり上手く吸えてない感じか。
まだ植物に馴染んでないから仕方ないよね。
しかし、効率良く吸えるようになれば成長も早まるのかな？
「早まるかもしれないけど、容量以上に吸い過ぎると破裂しそうなイメージがあるよね」
やっぱり、頑張らないでゆっくりします。
なあに、元々千年かかる所が十年で済むなら儲けものさ。
破裂なんてしたら洒落にならない。
安全に行きましょう。

「さてと、龍脈にそこそこ成長効果がある事が確認できたし、僕はそろそろ御暇させて貰おう。僕も立場ある仙人だから色々と仕事があるんだ。妹達には早めにここに来るように伝えておくよ」
え？ここに置いてく感じですか？
今一人になるとか心細さマックスなのですよ。
何よりさっきの虐殺のせいで周囲に怨念が渦巻いてると言うか夜が怖いと言うか。
「なぁに。心配はいらないよ。正大ならすぐに妖精になれるだろうし、もう立派に不気味な植物さ。うかつに近寄るヤツなんていないよ」
いや、不気味とか言われても、いったい誰のせいでこうなったのやら。
あ、待って、話の途中で帰らないで。
「では、生きてまた会おう」
ちょっと盛大なフラグを立てて行かないで！
あれでしょ？帰ったフリして、影から見守るってことですよね？マジで放置？
身動きが取れないだけに、そんな事されると身の危険を感じずにはいられない。

あれから数時間後。
陽が落ち、空には月が怪しく輝いている。
お兄様の攻撃で木々が倒れ、あたり一面開けたおかげで存分に月光を浴びることができる。
微かだが、力が入ってくる。
おそらく龍脈との相乗効果もあるのだろう。
普通は、これ以下なのだから妖怪になるまでに千年かかるのは本当かもしれない。
仕方なく、一人思考にふけっていると何者かが近づく気配がした。
あ、心配になって様子を見に来たのかな？
なんだかんだ言って兄貴してるね。

もしくは、噂のお姉様でしょうか？
しかし、その気配は離れた場所で止まり。
近づいて来ない。
そして、二人組なのか会話が聞こえてきた。
「おお、酷いありさまだぜ」
「昼間に凄い音がしたと思ったらこの辺りの猿どもは全滅だな」
「しかし、あのヤバいヤツが帰ったから、少しでも龍脈にありつけるかと思ったが不気味な花が咲いてやがる」
「たぶん、あの野郎が植えて行ったんじゃないか？この辺りでは見かけない花だし」
「だよな。こんなデカい花は見かけない。なんか近づいたら喰われそうだ」
いや、食べないよ。
失礼な奴らだな。
まあ、警戒して近寄ってこないのは助かる。
しかし、兄様本当に帰ったのね。
「君子危うきに近寄らずだな。今日くらいは、存分に力が吸えると思ったが、あのヤバそうな花があるんじゃ、早めに別の場所に行った方がよさそうだな」
「まったくだ。それにここを支配してたヤツは猿魔王の息子だろ？こんな所にいたら、息子の死を知り報復に来た猿魔王に何されるか分かったもんじゃねぇしな」
「ああ、おそらくここに居るだけで有罪。報復対象だろうな」
「それを考えると肝が冷える。さっさと行こうぜ」
え？さっきのボス猿の親父が報復に来るって？
それって、このまま一人だとめちゃめちゃ危険じゃん。
おーい。俺も連れてってくれ！
必死に叫んだが、あの二人組は何も聞こえてないかのように立ち去って行った。
残された俺は、すぐに報復に来ないことを祈りながら憂鬱で長い夜

を過ごすのであった。

趙公明の妹達がこんなに美人な訳がない

眠れない夜から、さらに一日過ぎました。
あれから、まだ誰も来ません。
そう。兄様も、まだ見ぬ御姉様も、復讐のお猿さん達はおろか、ある程度の知恵のある者や、果ては野生の獣も含めて誰も来ません。
平和だなー。
って、な訳あるかー！
絶対に嵐の前の静けさってヤツですよ。
フラグが立ちそうだったから、一日は我慢してたけどもう無理。
こんな生殺しみたいな放置プレイ耐えられません。
誰か来てー。
やっぱり誰も来ない。
フラグなんて無かったんだ。
一通り慌てて叫んだ後に現実逃避して落ち着こうとしたが、結局また叫んだ。
肉体的には疲れては無いけど、精神的に疲れてきたのか逆に落ち着いてきた。
ここは冷静に今の俺に何が出来るかを考えよう。
まずは、この危険地帯からの移動。
無理です。しっかり大地に根をはっている。
植物だし、仕方ないね。
いざという時に戦う。
また無理です。たぶん俺まだ妖精ですらなく、ただの大きいだけの花かも。
だって、自分の意思で何かを動かせる気が全然しないからね。
光に反応して光合成して、根が地から何かを吸い上げてる感じはあるけど、これは呼吸するみたいな反応な気がするし。
妖怪ライフどころか植物ライフです。
やっぱり騙された？
ふっ、これはもう諦めて不貞寝案件ですよ。

もうなるようになれの精神で果報は寝て待てだね。
はい。これまた無理です。全然眠れない。草木が眠ると言われる丑三つ時ですら眠れません。
植物のせいなのか、この花の特徴なのか意識が保たれたままです。
睡眠って動物の特権だったのね。
もし、次があるなら眠れる存在になりたい。
おっと、思考しかする事がないからと現実逃避してる場合じゃないな。
何かが近づいてくる気配を感じる。
とりあえず、お猿さんだとヤバいので黙って普通の植物のフリをせねば。
兄様かな？
まだ見ぬ御姉様かな？
お猿さん以外ならなんでも良いです。
えーと、一、二、三、四、五。
うん。五匹のお猿さんでした。
軽く言いましたが、黒々とした毛玉におおわれてゴリラってくらいの筋肉ダルマです。
どっからどう見ても化物ですね。ありがとうございました。
やっぱりフラグってあるのね。
しかし、不用意にこちらに近寄らず、茂みからこちらを伺ってるね。
やっぱり警戒してるのかな？
「隊長。やはり噂通り若の群れは全滅みたいですね」
「そのようだな。この荒れ果てた惨状を見るにとんでもない化物の可能性がある。ボスが情報を持ち帰ることを優先させる訳だ。無暗に突っ込めば若の二の舞もありうる」
あら？ボス猿の親父さんは意外と冷静で賢い？
「しかし誰もいませんね。この地の龍脈を狙った者なら、何者かが陣取っている可能性が高いので隠密で来ましたが、ここまで誰もいないとなると肩透かしですよ」
「ああ、敵の情報を知る為に来たのだが敵の狙いは龍脈でなく、ただの

殺戮の可能性も出てきたな。この分だと敵の正体がつかめぬわ」
いえ、めちゃめちゃ、ここの龍脈狙いです。
そして正体は、おそらく植物系の妖怪で、宝貝とか言うとんでも兵器を持っている自称偉い仙人だよ。
「ひとまず、お前は先に帰って、この惨状をボスに伝えてこい。残りは、儂と一緒にあの不気味な花に危険が無いか調べた後に持ち帰るぞ。おそらく敵が残して行った物だろう。ボスに見せれば何か分かるかもしれん」
「あの花はうかつに近寄ったら食べられそうなくらい不気味で巨大ですからね。我々より背が高い花なんて初めて見ましたよ。では、私はお言葉に甘えて先に行かせてもらいます。御武運を」
「おいおい。嫌なことを言うでない。他の者達が怖気づいてしまうわ。しかし、この惨状をあの花が引き起こした可能性もある訳か。よしお前、あの花を引き抜いてこい」
「え～、俺っすか？」
犯人は俺じゃねーよ！
嫌、やめてー。
来ないで、引っこ抜かないで！
指名された猿が渋々こちらに向かって来る。
ヤバい。なんでも良いから助けて！
そんな俺の心の叫びに反応してか、地が割れ伸びてきた根が接近してきた猿を絡めとり地中に引きずり込んだ。
なんか疲れたけど助かった。
俺の眠っていた力が奇跡を呼んだのか？
まあ、本気で消耗したので、もう一回同じことしろって言われても無理な気がします。
連続で来られたら詰む！
「た、隊長。助けてください。まだ死にたくないっす」
「何？あの巨大な花を警戒させて下からだと？全員で向かわなくて助かったわ。貴様がもたらした情報無駄にはしない。仇は取ってやるから安心しろ」

「まだ死んでないっすよー。あ、でも息が苦しくなってきたかも」
地中から部下猿の悲痛な抗議が響くが、隊長はそれを無視して近くの木に駆け寄りそれを引き抜いた。
「近寄るのが危険なら遠距離からへし折るのみ。こいつを喰らえ！」
え？ちょっとタイム。
そんなのぶつけられたらマジで折れる。
総員退避って無理だ。
うん。一回落ち着こう。
そして話し合おう。
話せば分かるって、だからその投げようとしてる物を一旦おろそうか？
俺の叫びを無視して、隊長が木を振りかぶろうとした、まさにその時。
「ちょっとお待ちなさって」
凛とした声が静止を呼び掛ける。
その声の力強さからか、隊長の動きが止まる。
この介入者が何者かを判断する為か、それとも介入者の姿に戸惑ったのかは俺には判断できなかった。
「私は長女雲霄！」
髪型は、前髪のサイドをお嬢様ドリルしに、後ろは腰まで届く美しい長髪が風になびく。
容姿は、まさに清楚でありその整った顔立ちが見る者を魅了する。
なおスタイルは慎ましい。
「私は次女瓊霄！」
髪型は、大きなリボンで束ねたポニーテール。
身長が先ほど雲霄と名乗る女性の腰ぐらいまでしかなく、愛らしい笑顔はまさに美少女。
「そしてこの娘が三女碧霄ですわ」
無表情の三女に代わり、雲霄と名乗る女性が名前を紹介する。
髪型は、前髪を切りそろえ後ろは肩まで届くミディアムで、その終わりの両側に軽くパーマを当てたのかウェイブがかかっている。

しかし、特筆すべき所は、雲霄をはるかに上回る身長とダイナマイトなボディにあると言える。
「三人揃ってセクシータレント集団・雲霄三姉妹！」
服装は花や植物の蔦を使い、知識の中にあるアルラウネやドリアードを想像させるその半妖態の容姿で植物系だと分かる。
おそらく、趙公明の妹達。俺の御姉様達。
うん。正直、趙公明の話に乗って騙されたとか千年植物とか無いわーって思ってたけど、御姉様達は期待以上の美人だった。
思わずヨッシャー！と叫んだ俺は悪くない。
残された猿達もその色香に戸惑っているのか、呆けているので同類であると判断する。
「さあ、仙人界のプリンセス雲霄三姉妹がお相手よ」
それぞれが、それぞれのセクシーポーズを披露すれば、隊長を除く二人が頭に血が上り過ぎたのかダウンする。
「あら？セクシーポーズだけでダメージを？」
「私たちって罪な女よねぇ」
しかし、なんとか正気を保った隊長が問いかける。
「貴様達が、若の群れを壊滅においやったのか？」
「私達は、先ほどここに着いたばかりですわ。そんな事身に覚えがありません」
「なら我々が戦う理由はあるまい。儂らは、ここにいた若の群れを壊滅させた存在を調べにきただけなのだからね」
「理由ならありますわ。アナタは、そこにいる私達の新しい弟に危害を加えようとしていではありませんか」
隊長は、やはりこいつが犯人かといった視線で俺を睨んだ。
だから、犯人は俺じゃない。俺は無罪だ。冤罪だ。
「大人しく帰りなさい。私たちは心優しき乙女！そうすれば許してさしあげてもよろしくてよ」
「ふっ、儂も舐められたものだな。この惨状を引き起こした化物ならいざ知らず貴様らには儂のちか」
「雲霄ビーム！」

隊長の頬を熱線がかすり、その背後が爆散した。
そこには大きなクレーターが出来上がり、今の熱線が直撃していたらどうなっていたかを物語っている。
雲霄御姉様こわい。
「らを……引き上げさせて頂きますです」
隊長もその威力に驚異を感じたのか、大人しく帰るむねを伝え倒れている同胞を抱え逃げ出した。
うん。賢明だと思う。
「たいちょー、おいてかないでー」
あ、足元から声が聞こえる。
これどうやって解放しようか悩んでいると雲霄御姉様が地面に拳をめり込ませ、埋まっていた猿を引き上げた。
うん。雲霄御姉様こわい。
「さあ、あなたもお帰り」
優しく声をかけたのだが、状況が状況なので、猿はヒェーと声を上げながら逃げ出した。
うん。気持ちは分かる。
でも、これにこりたらボス猿の親父に、ここは危険だから来ないように伝えて欲しい。
主に俺の安全の為に。
「さてと、正大。助けるのが遅くなってゴメンなさいね。お兄様が少しばかりピンチになるまで様子を見るようにとおっしゃっていたの。そうすれば、生存本能だとかで動けるようになるだろうって」
タイミングよく助けが来たと思ったらそういう訳ですか。
趙公明の野郎覚えてろよ。
だが、その思惑通り少し体の動かし方が分かった気がする。
だけど、これはちょっと消耗が激しいような？
おそらく龍脈で貯めた力を使って動かしているのかもしれない。
消耗した分を地面から吸い上げているのが分かる。
あれ？もしかして、消耗したら妖怪になるのが遅れる？
これはピンチの時以外は使えないな。

しかし、御姉様助かりました。
ありがとうございます。
「あら？お兄様には、おしゃべりで愉快な方だと聞いていたのですが、とても静かな方ですわね。もしかして照れてますの？」
あれ？伝わってない？
そういえば、あの夜の来訪者の時も、さっきの猿達も俺の呼びかけを無視していると思っていたのだけど、もしかして聞こえてない？
そして俺の声は御姉様達にも聞こえていない？
それが事実であるかのように、御姉様達に何度呼びかけても反応が返ってくる事はなかった。
おそらく人型になれるまで、この美しい御姉様達とコミュニケーションを取ることが出来ないと悟った俺は、静かに絶望したのだった。

御姉様達マジ良い人（比較対象趙公明）

御姉様達マジ良い人。
コミュニケーションを取れなくても、毎朝挨拶してくれるし（碧霄御姉様は無言だが）、偵察に来るお猿さん達も撃退してくれるし、さっきも遠路遥々汲んできただろう霊峰の水をくれた。
水って産地によって美味しさが違うと実感したね。
それと、この辺りは俺が吸い上げているせいかちょっと乾燥気味だから、まさに体に水が行きわたるのを実感できる。
いつも近くの川から汲んで来てくれている事にも感謝だけど、特別な場所から苦労して持ってきて貰った物は格別です。
ただ、水道も無いこの時代の水汲みって重労働なんだよね。
雲霄御姉様も、もっと簡単に組み上げる道具はないかと言っていた。
本当に苦労かけます。
言葉が伝わらないから毎日感謝の念を送るだけの愚弟ではありますが、改めて言葉が出てくる。
ありがとうございます。

そんな日々が過ぎゆく中、久しぶりに趙公明がやってきた。
なぜ敬称略かと言うと、俺に対するこの仕打ちと、喉元過ぎれば恐怖も忘れるって言葉があるように、一緒に敬意も忘れたからである。
「正大。久しぶりだと言うのに、ずいぶんな物言いだね。せっかくお土産を持ってきたと言うのに」
お兄様、いつも尊敬しております。
お土産は何ですか？
趙公明の後ろにある布に包まれた巨大な物体に興味が移る。
「相変わらずの熱い掌返し。嫌いじゃないよ。今回ばかりは少し苦労したからね。反応が楽しみだね。さあ、さっそく披露目といこうじゃないか！」
お兄様が勢いよく布をはぎ取ると、そこには巨大な竜が横たわって

いた。
もう一度言おう。
巨大な竜が横たわっている。
え？これがお土産？どちら様？え？それ竜の死体？
「ここから東に行った所にある海に住んでいる海竜王だよ。龍脈から力が得られるのなら、竜を素材に使えばまた力が得られるんじゃないかと予想を立てた僕は素材を分けて貰えないか交渉に行ったのさ。そして結果はご覧の通り」
物言わぬ竜を指し示す兄様は少し自慢げだった。
いやいや、これ交渉で分けて貰ったじゃなくて、ちょっと一狩りして来ましたって状況ですよね？
絶対に交渉なんてしてないと確信しています。
「失礼な。ちゃんと交渉はしたさ。弟の為に君達の素材が欲しい、君達の牙や爪や鱗や血液を少し分けてくれないかな？と言ったら激高して襲ってきたんだよ」
それ交渉じゃなくて挑発だから！
もしそれで相手が譲ってくれたとしても、交渉じゃなくて脅迫だから！
それとサラッと使用理由に俺のこと出してるけど、下手したら恨まれるの俺だからね。
それと達って言ってたけど複数いたの？
でも、ここにいるのは一匹だけ？
「ああ、二匹居たんだけど、一匹には逃げられてしまってね。まあ、元々は少量分けて貰えないか交渉に行っただけだから素材は一匹いれば十分以上の量だし追いかけなかっただけなんだけど。あと、逃げた方は仇はいずれと叫んでたね」
はい。恨まれているのが確定しました。
俺は自由に動けるようになっても海には絶対行かない。
マジで勘弁してください。
このままだと妖怪になって自由な旅計画の地図がハザードマップになってしまう。

「素材をダメにしかねないから金蛟剪は使わなかったし、慣れない海上での戦いだったから、もう少し労って欲しいんだけどな～。肝心の弟は嘆くばかり喜んでくれないし」
口では、困った風に言っているがいつの間にかイスに座って、御姉様が淹れたロイヤルミルクティーを嗜んでいる。
そして、どことなく俺の反応を楽しんでるように見えるのは、俺の心がすさんでいるからだろうか？
「まあ、いいや。とりあえず雲霄あれを捌いて料理してくれないかな？」
「分かりましたわ。お兄様、腕によりをおかけいたしますの」
「一応、血抜きは済ませあるからすぐに料理できると思うよ」
雲霄御姉様マジ良い人。
突然あんな物料理しろって言われても二つ返事で引き受けたよ。
どこかの誰かと違って人間ができてるね。
とりあえず、普通に持ち運べないだろってツッコミを入れたくなる大きくて固そうなまな板もしくはまな鉄と、刃渡りが大きくて何か呪文のようなものが書かれた布でグルグル巻きにされて封印されてる気配のある包丁なんて俺には見えない。
見えないったら見えない。
「あと瓊霄、これがその竜血だ。正大にかけてきてくれ」
「任せるだわさ」
そう言って瓊霄御姉様が真っ赤な液体が詰まったビンを抱えて駆けてきた。
普段ならほっこりするその姿も、得体のしれない液体をかけられると思うと少しばかり恐怖を覚える。
ちょっとはためらっても良いんですよ？
そうこう思っていると、近くまで来た瓊霄御姉様は根元に赤い液体をこぼした。
盛大にかけてきてくれとも聞こえるので、思いっきり花にかけられないか心配していたが、杞憂だったようだ。
瓊霄御姉様も良い人。

碧霄御姉様は、料理中の雲霄御姉様に熱い視線を送っている。
相変わらず腹ペコのようだ。
たまに、こちらに食べられるかどうか判断するような視線を送ってくるが、実行してないので良い人なのだろう。
そう思ってないと怖い。
お兄様と同類だった場合は心労二倍である。
うん。怖いことは考えないでおこう。
「そういえば、お兄様は正大と会話ができるのですね。私達には声が聞こえないのですけど」
料理中の雲霄御姉様は兄様にそんな質問を投げかけた。
それは俺も気になる。
「それは僕みたいなトレビアーンな男には、画面に映るモノローグを見ることも、ページに書かれた吹き出しを読むことも朝飯前だからさ」
なんかメタいこと言ってる。
そして、なんか痛いこと言ってる。
辺りに寒々とした空気が流れる。
それを察したのか兄様は、いつもの高笑いをして言った。
「ほんのジョークさ。本気にしないでくれたまえ。実は、ある宝貝を預かっていてね。これのおかげかもしれない」
兄様は、懐から小型の何かを取り出した。
待って、それ見覚えがある。
なんか過去の記憶によるとペットの話が分かるとか言う玩具だ。
「これで声無き声を受信できると言っていたが本当だったみたいだね」
なんと宝貝とは、兵器だけじゃなくてそんな物まであるのか！
どういう仕組みなのだろうか？
俺が気になっているのを察したのか、兄様は近づいてその宝貝を見せてくれた。
「そこの画面に受信した言葉がうつるそうだよ」
その画面を見ると文字が流れていくのが見えた。

『筋肉筋肉筋肉筋肉』
『ねるねねねるね練る練るね　ヒッヒッヒー』
『ごはんごはんごはんごはん』
『さあ戦おうじゃないか』
うん。俺の話が分かる原因は絶対にこの宝貝じゃない！
さっきから俺の声には反応しないし、なんか関係ない電波拾ってるよね！
御姉様達は宝貝の効果と聞いて納得してたけど、これあらかじめ準備していた言い訳だよね？
「そういえば正大。けっこう大きく育ってきたね。竜血の効果が出たのなら苦労したかいが有ったと言うものさ」
いきなり話題をそらしてきたよ。
え？でも、確かに大きくなっているかも。
さっきまで視線は兄様より少し高いかなってぐらいだったのに、今ではだいぶ見下ろしている感じがする。
「ふむ。霊格が高い存在を使えば、成長がもっと早まるかもしれないね。この調子でいくつか試してみよう」
やめてー。
その顔は、次は何を狩って来るか考えるハンターの顔ですよ。
これ以上、恨みを集めるのはやめてー。
「もしくは、徳の高い人間を食べれば力を得られると妖怪の中で噂になっていたな。とりあえず西の地に人類を救済する英知があると流布して、そこに向かう者に試練を課して徳を積ませ、目的地に着いたら料理する方向でいけば、いつか当たりが出るかもしれない」
発想が怖すぎるよ！
それはマジでやめてー。
希望の旅が絶望の終着駅で終わるとか悪夢過ぎる。
しかも、それが俺のせいってなると罪悪感半端ないから。
これはフリじゃないよ。マジでやめてー。
俺は声高に叫び続けるが、聞こえていない御姉様達は当然ながら、兄様もスルーするのだった。

「安心しなよ。正大。崑崙と暗黙の約束もあるから人間の方はジョークさ」

しばらくして、そんな言葉が聞こえてきたが、もう一方の事も有って安心なんてできない。

俺は、さらに恨みを買うのが確定したことに目眩を覚えたが、自己防衛の為に現実逃避をする事にした。

無駄に考えるよりも美人な御姉様達でも眺めていようと。

さらば美味しそうな料理を眺める日々よ。そして時の流れは残酷

もうダメだぁ。
おしまいだ。
え？色々なヤツから恨みを買い過ぎて精神的に参ってしまったかだって？
そんな事はどうでもいい。
やっぱり趙公明に騙されていて妖怪になれなかったかだって？
無事に半妖態にはなれたさ。
俺は、人間で有ったなら訪れる当たり前の事を失念していた。
妖怪には、それが無縁だと思い込んでいた。
そして、俺はもう二度と戻ることの無いあの日々を思いおこす。

「できましたわよ。ドラゴンステーキですわ」
鉄板の上に分厚いステーキから肉とソースの焼ける芳ばしい香りが辺りに広がる。
そのステーキは竜の鱗を見立てた格子状の切れ目が入っており、なるほど見た目がドラゴンを思わせる出来栄えになっていた。
いや、実際に竜の肉だからドラゴンステーキなのだが、そこに雲霄御姉様のこだわりを感じる。
うん。食べたい！
あ、趙公明の野郎普通に食べてやがる。ちょっとそこ代わって！
いえ、代わってください兄様！
俺は、あの時なぜ罪悪感を感じて人間もしくは物が食べられる存在になろうとしなかったのだろうか？
いや、あの時は妖怪になればある程度は人間と同じく自由にできると思い込んでいた節がある。
睡眠の件も含めて最大の失態だ。
そうこう思考しているうちにドラゴンステーキは無くなってし

まった。
主に碧霄御姉様の胃袋の中に。
まあ、いつでも腹ペコでしたから、これくらいはすぐに無くなるよねと自分に言い聞かせた。
「次は、竜肉の赤ワイン煮込みですわ。思った以上に柔らかく上品な仕上がりになったと思いますの」
皿の上に盛り付けられた龍肉にナイフを当てると簡単に切り分けられた。
俺は味わえなかったが、趙公明によると口に入れると肉の柔らかさとさっぱりとしたワインの風味が合わさり実にトレビアーンだそうです。
これはなんて地獄？
ちなみに、碧霄御姉様は皿からではなく鍋からむさぼるように食べ尽してらっしゃる。
まあ、いつもの食べっぷりを見ているとこれくらいは軽い軽いと自分に言い聞かせた。
「さらにバリエーションを付けて、ビーフシチューも仕上げてありますわ」
こちらも趙公明によると、濃厚な味が肉の旨みと絡みあい実にブラボーだそうです。
もう……俺の見えない所で食事して貰えません？
今なら視線で人が殺せる気がする。
やっぱり、碧霄御姉様は鍋からいっていた。それはもう食べると言うよりは飲み込む勢いで。
さすがに、こっちの方は見ていて胸やけがしてきた。
「今度は、竜肉をひき肉にしてタマネギと炒めた後に、調味料を入れ煮込んだトマトを加えたミートソースになりますわ。パスタは私の好みアルデンテに仕上げてますの」
マジで勘弁して！
この後も、さらに続々と料理が出た。
どれもこれも食べたかったよ！

雲霄御姉様はあれだけの肉を料理できるだけでも凄いのに、単一の品で終わらせるだけでなく色々な品を作っていたのは凄いどころじゃない気がする。
でも、あの量の料理をだいたい食べていたのは碧霄御姉様だった。
その消費量にはまさに脱帽である。
「いやー、雲霄また料理の腕を上げたね。これはもう君のハートを射止める男が羨ましい限りだよ」
「いやですわお兄様。恥ずかしい」
御姉様は、謙遜しているけど本当にかなりの腕前だと思うよ。
いつか現れるであろう義兄には、御姉様が欲しかったら俺を倒してからにしろを実行しようかと思う。
まあ、兄様は規格外だとしても、御姉様達もかなりの強さだし、あれ……もしかしなくても俺が最弱な可能性が？
うん。妖怪になれたら修行頑張るかな。
ちなみに、今回お土産と言われた竜の俺の取り分は、骨や頭に付いている料理されなかった肉を乾燥させた物。
鱗や骨や牙などを砕いて砂状にした物。
そして、最初に貰った竜血である。
見事に肥料ですね。
食べられる物がよかったよ。
しかも、余った大部分の素材は趙公明の懐に入るのを俺は見た。
お土産じゃなかったのかよ！
しかしならが、またまた御姉様達には、苦労をかけさせてしまった。
骨や鱗のすり潰しやら、肥料をまく為に穴掘りやら、色々とおそらく料理以上に手間をかけている気がする。
あ、兄様？料理を食べたら帰ったよ！

それから、またしばらくして兄様が来た。
「やあ、正大。今回もお土産を持ってきたよ」
デジャヴ？嫌な予感しかしません。
しかし、今回は両手で持ち上げられそうな大きさだね。

そんなに大きくないし大丈夫かな？
いや、ちょっとした大岩くらいはあるから十分に大きいよね。
ちょっと感覚がマヒしてました。
で、今回は何です？
「今回は通天教主様と一緒に太上老君の所に行ったのだけど、暇だったから近くの池で釣をした戦果さ」
そう言ってお馴染になったのか布をはぎ取ると、そこにはマンボウがいた。
なぜにマンボウ？
そもそも太上老君って誰？
「さあ？なぜマンボウなのかは、この僕にも分からないね。あと太上老君は三大仙人と言われており、僕の上司でもあり金鰲島のトップ通天教主様と崑崙山のトップである元始天尊くんと並ぶお方さ」
へー、とりあえず偉い人なのね。
もしくは強い人なのね。
その人がいる近くの池でね。
俺の記憶がたしかならば、マンボウって海にいる魚だよね？
それが近くの池にいたって事は飼われてたってことじゃない？
俺の気のせいだと良いのだけど。
「ちなみに、釣りあげたら、ワテにこんな事してタダで済むと思ってるのかボケって、泡を飛ばして攻撃してきたから、撃退しても別に文句は言われないよね？」
俺は何も聞かなかった。
あー、あー、聞こえない！
その後、御姉様達の手で料理され残った材料は肥料になる。
料理は量が少なかったので碧霄御姉様は物足りなさそうにしていた。その後肥料を見つめていたので心配になったが。
ちなみに俺はなんか凄そうな仙人に恨まれたのではないかと思うと気が重い。

それから、またまた兄様はお土産を持ってきた。

今度のはタカとダチョウかな？
これタカにしては丸っこい感じがするし、あのダチョウっぽいのは某ＲＰＧで似たようなのを見た気が？
いや、これ以上はいけない。
どうせ兄様の事だから、何かしら恨みを集める原因になるだろ。
詳しく聞いたら胃が持ちそうにない。
まあ、胃はないんだけどね。
今回の料理はから揚げに始まり、親子丼、チキンカツ丼、焼き鳥、天ぷら、照り焼きと次々と出てくる料理を目が有ったなら血の涙が流れるんじゃないかと思える気持ちで消えていくのを見送った。
碧霄御姉様は、やっぱり物足りなさそうにしていた。質より量なのだろう。

それからも、おそらく恨みを買うだろうお土産を兄様が持ってくる日々が続く。
それらが料理されるのを見て食べられない事を嘆きながらも、与えられた肥料の効果により俺は植物的にグングンと成長していた。
そんな中、妖ゲツだった御姉様達が人化を完璧にされて、晴れて妖怪に格上げされた。
喜ばしいことだ。
うん。喜ばしいことなんだけど……。
「私は、長女ビーナス！」
「私は、次女クイーン！」
「そしてこの娘が三女マドンナ！」
「「三人揃って、セクシータレント集団雲霄三姉妹」」
まさに爆撃を受けたような衝撃が走る。
清楚系美人だった雲霄御姉様は、体全体が筋肉質になりこんがりと焼いたかのような褐色の肌になった。
極めつけは、整っていた顔立ちが今では堀が深くなり、控えめに言ってゴリラ・悪く言えばオッサンに。
幼い可愛い系だった瓊霄御姉様は、シワがより鼻はトンガリまるで

おとぎ話に出てくる悪い魔女を思わせる風貌に変わり果てた。
ダイナマイトボディな碧霄御姉様は、その体型を崩しすっかりトドのような体型に。
どこもかしこも脂肪でパンパンになり、首のまわりも脂肪で段差ができるくらいにたるんでいる。
そして、最近ハマったのか常にお菓子を食べ続け、人化したというのに前より理性がなくなり、より食欲を満たす権化となった。

全俺が泣いた。
これは泣いて良いと思う。
声まで変わってるし。

変わってしまった御姉様達は、変わらず良い人である。
挨拶も、水やりも、たまに兄様が持ってくるお土産を料理するのも肥料にするのも、前と変わらなかった。
その事実が俺をさらに悲しみで胸を痛めつける。
せめて、コミュニケーションをもっと早く取れるようになれば、このような事態は防げたのではないかと日々嘆く。
そうだ、しゃべれるようになったら説得しよう！
そんな微かな希望を支えに、俺はついに半妖態になれるまでに成長した。
兄様や御姉様達が心から祝ってくれて嬉しかった。
それでも、俺はさっそく説得を始める。
やんわりとそれとなく伝えてみた。
御姉様達が良い人過ぎて、さすがに化物だから以前のような姿が良いとは言えなかった。
「まあ、正大。乙女にスッピン（半妖体）をさらせだなんて、立派な紳士が言うことではありませんわよ。それにそんな恥ずかしいことできませんわ。あまりにも姉達が美し過ぎて遠くに行ってしまうとお思いで？大丈夫。安心なさい。私達がどんなに美しくなっても、貴方が弟である事には変わりませんわ。今まで通りですの」

ここまで言われてしまえば、俺は説得を諦めざるおえない。
そして事の始まりに戻る。
さてと、ある程度嘆いたら踏ん切りがついたよ。
さよなら、雲霄御姉様、瓊霄御姉様、碧霄御姉様。
そして、これからもよろしく、ビーナス姉様、クイーン姉様、マドンナ姉様。
そんな感傷にひたる俺をよそに兄様は言った。
「正大。済まないが、通天教主様に龍脈の無断使用の事を咎められてしまってね。罰しない代わりに、君に指令があるそうだ。どうやら意図的に作られた半妖体の力に興味があるようだね」
実にアンニュイだと呟く兄様だが、それは俺のセリフだ。
そして新たな厄介事の予感に目眩や頭痛が抑えられなかった。

閑話　信じて貰えないかもしれないけど、本当にアンニュイなのさ

ｓｉｄｅ趙公明

ああ、実にアンニュイだ。

アニメでは二作品とも出番が無かったし、午前の会議では金鰲島に劇場やカラオケ施設を建てる案は却下されるは、あげくのハテに連載をもくろむマンガのネームは通天教主様にダメ出しされてしまった。

まったく、このネームの良さが分からないだなんて、実にアンニュイだ。

こうも気だるげだと午後は仕事を休んでアフタヌーンティーとしゃれこみたくなる。

え？そもそもオマエ仕事してるのか？だって？

バカを言っちゃいけないな。

この僕ほど働いている仙人は数えるくらいしかいないよ。

まずは、金鰲島に所属する妖怪の指導や修行のカリキュラムの作成だ。

歌って踊れて作曲もこなせる仙人を育成するカリキュラムは却下されてしまったので、仕方なく個々に合わせて作り直す作業を延々としている。

やはり妖怪だからなのか自身の高い能力に頼った力任せな脳筋が多いので、宝貝や術が使えない者が多く、そのため瞑想や自身のエネルギーをコントロールする修行をあてがう者達が多い。

ひと昔前なら、そんな修行もしなくても良かったのだが、仙人の力を増幅させ奇跡を起こす宝貝が主流となりつつある今、これらの者達は一握りの強者以外は廃れた存在となっていくだろう。

次に、金鰲島の方針を決める会議である。

妖怪をなるべく一つの勢力にまとめ上げる為にどこを攻略・説得するのか、どこと敵対してどこと友好を量るのかと。

それとエネルギーや資源や食料をどう集めるか。

あとは、島内のインフラや施設の建設などが話し合われる。
まあ、僕としては思う存分に戦えるように誘導しているのだけれどもね。
最後に仕事の割り振りだね。
おそらくこれが重要なのだろう。
その者の実力を見極めて、どのような仕事を与えるかは実に難しい。
僕自身が出向けばある程度は解決できるのだが、それにかかりっきりになると他の業務に支障が出る。
なので、支障が出ないようにあらかじめ仕事や、僕が出来ない時の代役を割り振っているのさ。
ぶっちゃけると大変なのは嫌だから他の者達に押し付けられるこの仕事はぶっちぎりで重要なのである。
他にも宝貝の開発やら、作詞作曲、ネームや原作のネタを温めたり、舞踏会を開いたりと大忙しなのさ。
分かってもらえたかな？
「そこの侵入者くん」
その問いかけに、少しの静寂の後、無機質な声が返ってきた。
『さすがだ。この私の存在に気付くとは』
「それは僕のセリフさ。ここは金鰲の中枢とも言えるが、こうもたやすく侵入できるとは」
『それは重要な事ではない。今日は趙公明に頼みがあってきた』
「光栄に思うのだが、なぜ僕なのか聞いても良いかな？」
『そなたが始祖の存在を知っており、なおかつそのもくろみに無関心だからだ』
「驚いた。始祖はそのような事まで知っているのか？」
『私は、ゆえ有ってこの世界を観測している。だから知り得たのだ』
始祖の存在は、ちょっとした切っかけで知る事ができたのだが、まさか向こうから接触があるとは。
本当にちょっとした切っかけである。
妖怪の中には、服飾や建築や料理、果ては宝貝の作成など、天才な

どの言葉で片付けて良い訳がない知識を持った者が複数あらわれた。
　そして、自分達でも簡単に作る事ができない宝貝を発掘した時に、僕は、これらが何者かに与えられたのだと確信した。
　その後、複数の聞き取り調査や脳の一部を支配する宝貝の開発により、太古の時代天より降り立った者達の知識や記憶が表に出た者がそれを才能だと思っている事を知ったのだ。
『単刀直入に言おう。世界を何度も滅亡させている要因の一つが目覚めた。それを金鰲に引き入れて監視して欲しい』
「それほどの存在を監視？」
『彼自身の力は大した事はない。ただし、人間界に関わると世界を滅亡させる要因となる。だが、今までの観測によると仙人界にいる間は影響が少なかった』
「だから金鰲なのか。だが、そんな回りくどい事などしないで、その彼を始末するなり封印するなりすれば問題ないのでは？」
『彼は一度目覚めると、世界が滅亡するまで何度でも蘇る。封印しようともまたすぐに現世に戻ってくる。ちなみに魂魄を破壊されても復活できるようだ』
「それはまた厄介な」
『今は、まだ魂魄体のままだが放っておくと人間に憑依する傾向にあるようだ。彼を追う為にこれを渡そう』
　そう言って侵入者は、何かの画面が付いた玩具のような物を投げてよこした。
『それが有れば彼の居場所を知る事も対話することもできるだろう。有効に活用して欲しい』
「まだ引き受けるとは言ってないのだが。僕としては引き受ける理由がない」
『やはり、こちらのもくろみに無関心か。だからこそ、そなたを選んだのだが。ならば報酬として、この映像宝貝の設計図と、新藤崎　竜先生への紹介状でどうだろうか』
「喜んで引き受けさせて貰おうか」
『……。まあ、いい。最低でも千年は人間界に接触させないで欲しい』

「任せてくれたまえ。報酬の分は頑張らせてもらうよ」
そして侵入者は、設計図と紹介状を渡すと消えた。
これは予想だが空間を移動したのだろう。
恐ろしい使い手だが、機会があれば戦ってみたいものだ。
おっと、今は設計図と紹介状と世界を滅ぼす要因が先だな。
まずは設計図に目を通す。
ふむ。必要な知識や材料を集めて組み立てるのに千年はかかりそうだ。
今は忙しいから、もっとかかるかもしれない。
まあ、これは地道に取り掛からせて貰おう。
次に紹介状だ。
何々、最低でも千年立たないと使えないようにしてあるだって？
これは困った。
これさえ有ればすぐにでも、僕は少年雑誌の連載マンガ家になれると思ったのに。
それに、これが千年後に使える証拠もない。
あ、追伸が有った。
何々、その紹介状が使える証拠として、この紙にイラストのリクエストを書くと新藤崎竜先生がその絵を描いてくれるだって？
それが本当なら少しは信じて良いのかもしれない。
しかし、何をリクエストするか、それが問題だ。
これも後でゆっくり考えよう。
最後に、世界を滅ぼす要因だが、どうやって金鰲に引き入れようか。
うーん。良い案が思い浮かばない。
報酬も中途半端だし、なんだかアンニュイになってきた。
こんな時は妹達とアフタヌーンティーでも……。
妹達？
侵入者くんは、今彼は魂魄体だと言っていた。
それなら彼を弟にできるかもしれない。
そして、僕は新しく増えるであろう弟と、どうやって遊ぼうか考えると自然と笑みがこぼれた。

七怪を攻略せよ！
大組織の偉い人に合うのって緊張するよね。趙公明？はっ、あれは自称だろ。

薄暗い通路もしくは洞窟を俺達は進んでいる。
そう目的地は、この金鰲島のトップである通天教主様がいる部屋だ。
空に浮かんでいる巨大な島を見た時はテンション上がったが、今は一歩踏みしめる度に胃痛が襲ってくる。
あれ？なんか半妖態になってから、植物の時よりも不都合を感じるのは気のせいだろうか？
胃とは別に頭も痛いし、目眩も動悸も息切れもする。
あれ？本気で植物のまま御姉様達にお世話して貰っていた頃の方が幸せだったんじゃないかと思えてきた。
これも気のせいなのだろうか？
「さあ、この部屋で通天教主様がお待ちだ。くれぐれも失礼の無いようにね」
おっと、せっかく現実逃避していたのに引き戻されてしまった。
しかし失礼とかお前に言われたくないと視線を送ったが、余裕のある微笑みを返される。
「その様子だと大丈夫なようだね。では行こうか」
兄様がその重厚感のある扉を軽々と開き、挨拶を言いながらひざまずく。
「通天教主様。趙公明とその他大勢。ただいま参りました」
ちゃんと上司には礼を尽くす事ができるのだなと、少し意外に思いながら俺も続いてひざまずいた。
しかし、自分の妹と弟にたいして、その他大勢って別の言い方は無かったのかと抗議したい。
「趙公明よ。御苦労で有った。皆の者面をあげよ」
その言葉に視線を上げて通天教主を見るが、立派な髭と長く尖った

襟に視線が行ってしまった。
髭は普通に立派だなと思っただけなのだが、襟長すぎだしそれが凄く立っているのが気になった俺は悪くないと思う。
服装やマントの雰囲気から、ちょっと吸血鬼っぽいと思ったのも仕方ないって事にして欲しい。
そして、こんな事を考えているのが相手にバレたらと思うと、また胃がキュッと締め付けられるように痛くなってきた。
そんな俺を通天教主様が見たかと思うと、次に御姉様達に視線を移してこう言った。
「趙公明よ。増えたのは弟だと聞いていたのだが妹も増えたのか？」
「いえ、増えたのは弟だけです」
それを聞いて、また御姉様達に視線を向けると首を少しかしげた。
「では後ろの女性達は何者だ？」
「妹達ですが？」
「やっぱり増えているではないか」
「いえ、増えたのは弟だけです。さあ、カワイイ妹弟達。通天教主様にご挨拶を」
え？この流れでこっちにパスしてくるの、でも初対面の挨拶は大事なので頑張らねば。
「はじめまして。通天教主様。自分は趙公明の弟趙正大と申します」
「私はビーナスですわ。通天教主様ごきげんよう」
「私はクイーンよ。通天教主様ごきげんよう」
「そしてこの娘はマドンナですわ。口数の少ない娘で申し訳ありません」
その自己紹介の後、通天教主様は考え込むと、また言った。
「趙公明よ。やっぱり増えているではないか」
「いえ、増えたのは弟だけです。僕の妹達である雲霄三姉妹をお忘れですか？確か、面識が有ったと記憶しておりますが」
「あの雲霄三姉妹？」
「はい。このたび人化を完成させて、妖ゲツから妖怪へと格が上がりました。これから立派な仙女になるのが楽しみなカワイイ妹達です」

「そ、そうか。少し見た目が変わっていたので勘違いをしていたようだ。雲霄三姉妹よ。これからも励むがよい」
兄様は御姉様達の見た目が変わっても、まったく態度に変化がないし、妖怪になって最初に合った時も疑いはしなかった。
そもそも、見てすぐに妹達だと分かっていたようだ。
この点に関しては、本当に紳士だと思うし感心もする。
そして、あの変わりようを少し見た目が変わったとだけ言ってすり抜けるとは、さすが組織のトップなだけはある。
しかし、あの変わりようは誰だってそう思うし、俺だってそう思うので仕方ないし、責めてはいけないと思う。
「では、改めて本題に移ろう。そなたが趙正大だな。我は通天教主である」
「はい。自分が趙正大です。通天教主様以後お見知りおきを」
うん。気まずい空気になったら話題を変えるのが一番だよね。
さすが分かってらっしゃる。
でも、面と向かって話合うとなるとやっぱり緊張してきた。
金鰲島トップに相応しい威厳とも威圧とも感じられるオーラが伝わってくる。
まあ、威圧感に関しては、龍脈の不正利用による後ろめたさからなのだが。
「そう固くならなくてもよい。今回の件に関して、おぬしは趙公明の被害者だと我は思っておる」
あれ？これって兄様が咎めらたから、実験結果として俺を売ったパターンでしょうか？
御姉様達との扱いの差に遺憾の意を表明したいです。
弟と妹でこんなにも差があるなんて。
「しかし、龍脈を不正使用したからには、何も成果が無かったでは、他の者達も納得はしないだろう。おぬしには済まないと思うが、実力を示す為にここは一つ試練を受けては貰えぬか？」
「かしこまりました」
さすがに、お咎めなしにはならないよね。

でも、これって兄様には何の被害も無いよね？
マジ許せん！だけど、宝貝が怖いので直接抗議はしません。
しかし、試練ってなんだろう？
実力を示すって言うけど、体力測定的なものだと助かります。
むしろ、その程度で有ってください！
神に祈りながら、試練の発表を緊張した表情で待つ俺。
一秒がとても長く感じる。
「今回の試練は、おぬしが使っていた龍脈の近くを縄張りとする七怪を金鰲の傘下に加えることだ。もしくは最低でも全員を撃破せよ。このような武勇伝があれば、他の者達もうかつに文句は言えぬだろう」
え？仙人界で修行する前にバトルパートですか？普通逆じゃありません？それに難易度高くありません？
七怪って言うぐらいだから七人いるんですよね？
それを傘下もしくは撃破とか、やっと動けるようになった俺としては無理なような気がするんですが。
あまりの試練の内容に俺がフリーズしていると、通天教主様が補足説明をしてくれた。
「ほら、なんと言うか、趙公明は色々とやっているから、それを快く思ってない連中が多いのだ。しかし、趙公明自身も妹である雲霄三姉妹も規格外の力を持っており、うかつに手が出せぬ。そこに、実力不明もしくは実力不足な弟が出てきたらどうなるだろうか？」
理解しました。
『このままだと、おまえ金鰲島でいじめられるから、先輩達に舐められない為にちょっくら武勇伝を作ってきてくれない？』って事ですね。
うん。ちょっとお遣いに行ってきてーのノリで言われても困ります。
なんかヤンキーの入団試験を受けている気分なのですが。
嫌に実力主義な所とか、武勇伝を評価する辺りが、まんまヤンキーな気がしてならないのですが。
あれー。おかしいな。

俺が思っていた妖怪ライフは、朝は寝床・夜は適度に運動会で、楽しい楽しいと歌って病気も悩みも無い生活だったんだけどなー。

でも、現実は、すぐにでも他の妖怪の所にカチコミに行かされる空気なのですが？

兄様助けてーと視線を送ると、彼は親指を立てて言った。

「正大。大丈夫さ。もし失敗しても、またゼロ（植物）からやり直せば良いんだから。そう思えば気楽だろ？」

うん。まずは玉砕覚悟で貴様に特攻するか真剣に検討してしまったね。

せめて有用な情報が欲しい。趙公明は味方だよね？

ここは金鰲島のとある一室。

今、この室内にいるのは、兄様と御姉様達と俺である。

すぐにでも攻略に向かって欲しそうな空気が流れていたが、俺の命がかかっている訳だし作戦タイムをお願いすると拍子抜けするほどアッサリと認められた。

通天教主様は仕事があると席をはずし、俺達は近くの応接室へと移動した訳だ。

しかし、たぶんここは趙公明の私室な気がする。

壁にかけられた装飾や、床に敷かれた絨毯、机や椅子が先ほどの通天教主様と謁見した場所に比べると豪華なのである。

さらに、隣に給湯室があり戸棚にティーポットやカップが並べられていて好きにお茶が淹れられるようになっているのだ。

トドメに部屋の隅に、天蓋付きのベットが見える。

ここは、兄様の仮眠室&休憩室で確定だね。

うん。さらに睡眠中・休憩中・外出してます・掃除しといてくださいと書かれた札も見つけた。

さてと、いつまでも現実逃避して居たいが、そういう訳にもいかないので兄様から情報を聞き出すとするかな。

少しでも有用な情報があれば良いのだけれども。

「まず、七怪って何ですか？」

「正大が前にいた場所には、複数の龍脈の穴が有ってね。それを巡って群雄割拠の戦国時代が有ったのさ。複数の勢力が淘汰されて、今残った七つの勢力が均衡を保っている。その総省を梅山の七怪と呼んでるんだ。確か、猿・ムカデ・蛇・豚・牛・犬・羊だったかな？」

あれ？ムカデ以外は趙公明のお土産にいた気がします。

そして、猿以外にも複数偵察に来てると思ったら、勢力争いをしてたのか。

「その七怪ってどれくらい強いか分かります？」

紅茶を飲みながら休憩モードに入ったお兄様が軽く答える。

「束でかかってきても、僕の敵じゃないね」
　それは知ってます。
　聞きたいのは、そういう事じゃなくて。
「私達でも余裕だと思いますわ」
　それも知ってます。
　御姉様達の存在を知ってから向こうは軽く偵察するだけで逃げて行ったし、完璧な人型になってからは偵察すらも来なくなったからね。
「いえ、兄様達を指標にされても判断がつかないですよ。金鰲ではどれくらいの強さになるのですか？」
「うーん。たぶん上位の仙人なら勝てるかもしれない。だけど、さすがに勢力が相手だからね。それ以外の者達だと単独では無理な気がするな。僕は」
　ちょっと待って、それだとその試練って無理っぽくないですか？
　あ、でも金鰲内でも上位の力を示せって試練だから内容としては問題ないのか。
　問題があるとすれば、俺にその実力があるかどうかだな。
「えーと、俺にその試練が達成できると思いますか？」
「まあ、やってみないと分からないんじゃないかな？もし塵も残さず消滅しても魂魄だけは拾ってあげるから、安心して挑んできたまえ」
「え？もう負けフラグが立ってるんですか？そんな事を言われても安心できる人なんていないからね！って言うか、俺は来世も兄様のお世話になるのが確定している？」
「それは死んでからのお楽しみって事で」
「俺は楽しめないし、死んだら普通終わりだからね！」
　ああ、この話題は不毛だ。
　さっさと次に行こう。
「じゃあ、協力してください」
「それはできない。これは正大が立派な仙人になる為の試練なんだ。悲しいが僕達には見守る事しかできない。妹達も、そういう訳だから手出しは無用さ。彼が一人前の仙人になるには必要な事なんだ。こ

こは涙を呑んで見送って欲しい」
「お兄様。そうですわね。正大、立派になって帰ってくるのよ」
「ビーナス姉様、簡単に丸めこまれないでください。兄様本音は？」
「いや、実際に力を貸すのは不味いと思っている。正大の実力を示す必要があるのに、僕達が力を貸しては正大の実力が永遠に不審に思われる可能性があるからね。あとは、ほんの少しばかり獅子千尋をしてみたいって気持ちもある」
「前半は説得力が有ったのに、後半で台無しだよ！」
力は貸して貰えないみたいだ。
たぶん、ほんの少しと言ってるが、ほとんど獅子千尋がしたいだけなんですよね？
分かります。
この方面で説得は無理か。
あとは……。
「じゃあ、何か武器をください」
「ヒノキの棒で良いかい？」
「どっからどう見ても、すりこぎ棒ですよね。武器ですらないじゃないですか！」
「武器は慣れない人が使うと怪我の元なんだよ。ましてや宝貝は素人には扱えないし、発動するにはエネルギーが必要なんだ。下手したら発動もしないのに消耗するだけって事もありえるからね」
うーん。武器も無理か。
本当に役に立たないな。
いったい誰のせいで、こんな事になっていると言うのか。
もう、こんな試練はボイコットして地上で静かに暮らしてみる？
いや、たぶん無理だ。
この姿になってから、お腹もすくし眠気もある。
あれ程に望んだことなのに、いざ叶ってみると邪魔でしかない。
うん。一人で生活できる気がまったくしません。
それに、兄様のせいで無駄に恨みを買ってるので素性がばれると後ろ盾が無いって怖すぎる。

色々と詰んでるけど、試練を達成すれば金鰲島に居場所ができるし、後ろ盾にもなってくれるだろう。
これはもう全力で試練を突破するしか活路が無いね。
負けるな俺。
挫けるな俺。
希望を捨てるんじゃない俺。
最後にダメ押しで聞いてみるか。
「何か良い作戦とかは？」
「ここはシンプルに力対力の真っ向勝負だ。各勢力のボスをぶちのめせば、自然に従えられるんじゃないかな？」
「貴方に聞いた俺が馬鹿でした」
マジで役に立たない！
こいつら規格外過ぎて、参考になる・ならない以前の問題だよ。
もっとまともなヤツとかいないの？
うーん。これは賭けになるんだけど、他の人紹介して貰えないかな？
「えーと、金鰲にいる他の人と話してみたいんですけど、誰か良い人いません？」
「僕達に何か不満でも？」
「いえ、そういう訳じゃないんですが、なんと言うか」
「なに。ほんの冗談さ。そんなに焦らないでくれたまえ。今の時間なら談話室に彼がいるかもしれないな。今から地図を描くから、行ってみると良い」
「案内はしてくれないんですか？」
「友達が欲しいんだろ？僕が行くと皆して身構えてしまうからね。まったく偉い立場ってのも困りものだね。ああ、これで正大もボッチ卒業だね！」
何か酷く不名誉な勘違いをされているが、役立たずだと思ってるのがバレてないようで一安心だ。
あと、皆が身構えるのは、きっと貴方が面倒な事をしたのでしょう？

地雷臭がするのであえて触れませんが。
ここは地図は受け取って、大人しく移動するのが吉と見た。
どうか向かう先にいる人物がまともでありますように。
切に願います。

これが平穏なのか！

地図の通りに進むと迷うことなく談話室と書かれた扉の前についた。

兄様の地図は普段の滅茶苦茶さからは想像できないほど分かりやすく、別の人物が描いた物じゃないかと、実際に描いている所を見ていなかったら疑っていただろう。

本当に想像できないが、この地図を見て分かる通り仕事は丁寧なのかもしれない。

だからこそ重宝されてるし、多少の勝手は多めにみられてるのかと想像してしまう。

もちろん、単純に力で黙らせている可能性もあるが。

うん。扉の前でこんな思考を繰り返しているのは緊張しているからだ。

談話室って言うくらいだから複数人いるだろうし、もちろんグループも形成しているだろう。

そんな中に割って入るとか難易度高すぎですよ。

とりあえず、ソロの人がいる事を願おう。

意を決して扉を開けるが思いのほか静かだ。

あれ？もしかして誰もいない？

俺の緊張と決意を返して。

「おや？この時間に人が来るのは珍しい。もしや新顔かね？」

い、いきなり話しかけられてしまった。

緊張の糸が緩んだせいで、会話の準備ができていなかった俺は焦る。

と、兎に角なにか答えなければ。

「ふむ。緊張しているようだね。金鰲島へようこそ。私は張紹。よろしく頼むよ」

そう言って自己紹介をしてきた人物はとても特徴的だった。

まず、キツネのような能面の被り物をしており、その後頭部からは

トカゲの尻尾のようなものが後ろ髪のごとく垂れ下がっている。
そして、なにより足よりも長い手で立っていた。
もう一度言うと、とても長い手で体をささえている。
姿勢はなぜか体育座りだ。
もちろん地面には接していない。
第一印象はとても疲れそうな体勢だと思った。
これはきっと何かの修行なんだろう。
触れないことにした。
「ああ、はじめまして。たぶん金鰲に所属する事になる趙正大です」
うん。無難に挨拶できたと思う。
「ほう。噂に聞く趙公明様の弟だね？」
あ、しまった。
素直に名乗ったのは失敗だったかも。
俺はいじめられるかもしれないから、武勇伝を作る必要が有った訳で、それを作る前に趙公明の弟と知られるのは不味いかもしれない。
「そう心配しなくてもいい。確かに妖怪は残酷かもしれないが、私は仲間には寛容だ（何事にも限度はあるがね）」
笑いながら張紹は、自分のスタンスを教えてくれた。
最後に小声で言った事から、誰かさんは限度を超えていることが察せるが、聞こえないし想像もできなかった事にして欲しい。
「ありがとう。とても助かるよ。それにしても、ここは談話室だと聞いたのだけど、今は人がいないのはどうしてかな？」
とりあえず適当に会話をしながら、色々と教えて貰うことにしよう。
「それはだね。今の金鰲の体制に関係がある」
そう言って張紹は軽く説明してくれた。
簡単にまとめると、今の金鰲島は、トップの社長（通天教主）と副社長（趙公明）が主体となっていて、その下に基礎部門・宝貝部門・術部門の三つに分かれており、彼の担当する術部門は宝貝の出現により廃れて人気がないらしく、今は宝貝部門の時間だから人がいないそうだ。

「何より宝貝部門の担当は美人だからね」
「なるほど。それは人がいない訳だ」
「正直なものだね。まあ、一人の時間は嫌いじゃないから構わないが」
「おっと、それじゃあ、邪魔しちゃったかな？」
「気にすることはない。私はおしゃべりも好きなのだよ」
話した感じ、とてもまともに感じる。
見た感じ妖怪だけど、とても話しやすい。
今まで話した中でダントツに。
よし、とりあえず、この人に相談してみよう。
「七怪って知ってる？」
「ああ、噂程度でなら。確か、最大勢力である猿が一部龍脈を奪われた事で均衡が破れ戦乱になる恐れがあると聞いているね。また別の噂だが龍脈を奪った存在が強大な為、一致団結をしてその脅威を取り除こうという動きもあるとかも」
あ、自分が知らない内に臨界状態でした。
とりあえず、後者だと困ったことになるが、前者なら各個撃破の目が出てきたな。
どうか前者でありますように。
しかし、兄様より詳しい情報ありがとうございます。
おしゃべりが好きなのは本当かもしれない。
「ちょっと訳あって、単独で七怪を攻略しなくちゃならなくなったんだけど、張紹さんなら出来そう？」
「呼び捨てで構わないね。こちらも趙正大と呼ばせて貰う。しかし、単独の攻略とはまた面倒な。なりふり構わなければ可能そうだが、土地や龍脈を破壊してしまいそうだ。それと出し惜しみも出来ないから終わったとしても消耗しきっているはず。そのため迎えに来る仲間の存在が必要になるだろうね」
張紹さんは普通に金鰲の上位陣だったよ。
うん。とりあえず、心の中では張紹さんと呼ぶことにしよう。
さすが術部門を任されている人だ。
となると、他の部門も上位陣が担当しているのか。

あと、最低でも二人いるって事だよね？
しかし、龍脈を破壊か。
思い返してみると、兄様はしっかり力を制御していた事が分かった。
あの惨状でも地形の表面が削れてるだけだったから、龍脈に影響が出ないようにしてたのね。
意外と仕事は細やかな可能性が出てきて驚く限りです。
しかし、術か。
まあ無理かもしれないけど聞いてみよう。
「あー、その攻略には術を使ってるんだよね？俺にも使えそうかな？」
「術を使うには才能と努力が必要になるから、なんとも言えないね。むしろ適性が無いと使えない者の方が多いくらいだ」
「やっぱりか」
思った通りの答えが返ってきたが、少し期待してたのかガッカリしている自分がいる。
そんな俺を見て、何を思ったのか張紹さんは言った。
「ふむ。使えるようになるかは分からないが少しだけ講義をしよう」
「ぜひお願いします」
藁をも掴む勢いでお願いした。
「まず始めに、私の得意とする術を見せよう」
すると張紹さんの懐から砂がこぼれてきたかと思うと、それが人型となり動きだした。
「何かを操作する術だ。おそらく術使いのほとんどがこれであろう。他にもエネルギーを放出するもの、炎や氷をさらには物質を作り出すもの、水を酒や酸に変化させるもの、自身を強化したり他者の傷をなおすものと様々である」
その間にも、砂は色々と形作り崩れては風に舞い、渦を作ったり砂の波をおこしたりと見ていて楽しかった。
「まあ、私は相性の関係もあって砂を操作する術しか使えないが、他の術も一応知っているので発現させる手助けはできる。しかし、適正が有っても、ほとんどのものが実用レベルに到らないことが多い。それ

が廃れる原因なのだろう」
そう言った張紹さんは少し悲し気だった。
「少し悲観的だったね。気を取り直して次に行こう。趙正大は見るからに植物系だから、植物を操作できるかもしれない。何か身に覚えはないか？」
そういえば、植物時代に自分の根っことは言え動かした事があった気がする。
あれ、凄く疲れたのだけど、術の一端だったのかな？
「その様子だと、身に覚えがあるようだね。それなら可能性はあるだろう。何か植物は持ってないかね？」
そういえば一応くれるって言っていたから貰った、すりこぎ棒が有ったな。
懐から、一回頑丈な妖怪を殴ったら壊れてしまいそうな、すりこぎ棒を取り出す。
「それにエネルギーを送り込み支配するイメージをしてみろ。そして、曲がれと念じてみるのだ」
まっがれー。
曲がった！
でも、たったこれだけでかなり疲れたよ。
そりゃあ、こんなに消耗して結果がこれだけなら人気はないよね。
「ふむ。無事に支配できたようだね。才能はあるようだ。この調子で操作して、伸ばしたり縮めたり固くしたりと普通ではあり得ない現象を引き起こせるようになれば術としては完成だね。あと、たぶん他の植物が動かせるなら、自分自身はもっと簡単に動かせることだろう。この事は覚えておいた方が良い」
「ありがとう。自分に出来る事が知れてとても助かった。本当に何も手札が無かったから」
「ちなみに、私なら七怪を攻略するに当たって自分が支配する砂で陣地を形成するね。大々的に砂が準備できるなら津波のように飲み込むのが楽だろうが現実的ではないし。まあ、出来る事を可能な限り準備するのだよ」

術について教えてくれただけでなく、的確なアドバイスまでくれるなんて張紹さんマジ良い人。
あんな役に立たない兄様に振り回されて鳴り物入りで金鰲に来るよりは、一般から入って地道に張紹さんとかに指導して貰った方が楽しかったのではないかと想像してしまった。
ちょっと涙が出たのは触れないで欲しい。
「本当に助かったよ。無事に試練を突破できたら、一杯やりましょう。兄様に良い酒を用意させるので」
「それは楽しみにしているよ。無事を祈ろう」
うん。それに張紹さんは、その体勢でどうやって酒を飲むのか気になりますし、こちらとしても楽しみであります。
「ちなみに、私はおしゃべりなので、この場で知り得た事は他でしゃべっている可能があると思って欲しい。酒盛りをするなら、あらかじめ注意しておこう」
あ、この人に何でもかんでも話すのは危険かもしれない。
忠告はしっかりと覚えておこう。
それと、その口ぶりだと酒盛りに他の人が来るかもしれない。
とりあえず、兄様にたくさん酒をたかろうと、少し頭痛を感じながら決意した。

鬼ごっこは楽しいな。自分の命が賭かってなければだが！

俺は、うっそうとした森林を全力で駆け抜けている。
かすり傷や、ちょっとの打撲も気にする暇もない。
追いつかれたらヤバいと確信しているからだ。
これは俺が悪い。
ちょっと調子に乗ってました。

張紹さんの講義が終わった後に、彼は何か思い出したかのように言った。
「趙公明様は、水晶を使った遠見の術が使えたはず。それで色々と見せて貰えば何か役に立つのではないかね？」
その時思った。
有用な情報をありがとうございます。
でも、やっぱり張紹さんに内緒話をするのは危険だし、奥の手とか知られたらきっと話のタネとして使われるのだろうと。
さっそく兄様の所に帰り、俺が居た龍脈周辺の情報を見せて貰った。
うん。なんか周辺に、猿やら犬やら豚やら七つの勢力が部隊を展開して、俺の居た場所を制圧しようとしているね。
よくよく考えたら、あんなに目立つ花が無くなったら何か有ったのが分かるし、奪還のチャンスと考えてもおかしくない。
それに危険な御姉様達も居ない事は、偵察でも送ればすぐに分かる事だし。
「おっと、これはウッカリだ。せっかく制圧した龍脈に守りを配置するのを忘れていたよ。まあ、でも奪われたとしても、すぐに正大が七怪を攻略すれば問題ないよね。では、さっそく行って来てもらおうじゃないか」
兄様はそう言うと、俺をすぐさま地上に送り出した。

え？もう少し準備する時間をくれても良いんじゃないのと思っていたが、心の準備をするまでもなく目的地の近くに降ろされる。
「じゃあ、たまに水晶で様子を見るから終わったら迎えに来るよ。祝勝会や酒の準備は、安心して任せてくれたまえ」
帰って行く兄様を見て思う。
本気でバックレたい。
でも、それは無理な相談なので、色々と準備をして休憩したら、俺がいた龍脈の所にでも向かうとするか。
さてと、作戦は至ってシンプルである。
各個撃破しかないよね。
そして無理そうなら逃げると。
でも、逃げるって言っても安全な場所はどこ？
ある意味、兄様や御姉様達の居る場所が安全だけど、空の上にある金鰲島に自力で行けるだろうか？
いや、行ける訳がない。
ここは自分の謎のスペックや潜在能力に期待するしかない。
隠密行動を取りながら敵を探していると、おあつらえ向きに単独行動をしている敵を発見。
向こうは、こちらに気付いてないな。
ここは、慎重に近づくべきか、相手が近づいてくるのを待つか、一気に奇襲をかけるか迷う所です。
俺としては、待つのを選択したいけど、こちらに気付いて仲間を呼ばれる可能性もあるし、近寄ってこない可能性も高そうなので却下である。
慎重に近づいたとしても同じく、途中で気付かれたら意味が無いので、ここは一気に奇襲をすることに決定。
相手が単独なら自分のスペックを確認するのに、うってつけだし悪くない選択だと思う。
俺は、一気に距離を詰めると一撃をお見舞いした。
相手は沈黙。
あれ？俺ってもしかして強い？

いやいや、これは不意打ちだったから上手くいっただけで有って、油断は禁物だ。
そうして再び、隠密行動に入ると今度は二人組を見つけた。
今度も、先手必勝で、まずは一人を倒して、返す刀で二人目もやっちゃえば良いよね？
今度も成功するかな？
ちょっと緊張してきたよ。
うん。余裕でした。
やっぱり俺って強い？
いやいや、勝って兜の緒を締めよって言うじゃないか。
慢心ダメ絶対。
その後も、三人組そして四人組を次々に撃破して、さらに増え続ける敵を順調に倒せるようになった頃には隠密行動をやめて無双していた。
フハハ。
俺って強すぎ。
あの兄様や御姉様達の弟である俺が弱いはずが無かったんだ。
そうだよ。
普通に考えれば分かることじゃないか。
調子に乗っている俺の耳に木々をなぎ倒す音と、地を震わせる感覚が伝わってきた。
「貴様が、俺の息子の仇かぁあ？」
大音量の怒声で鼓膜が破れそうです。
その声の先を見ると、どうして気付かなかったのか森の木々よりも大きな猿がいた。
「猿魔王様。きっとアイツです。このタイミングで暴れてますし、七怪であんなヤツ見かけたこと無いですよ」
いつか見たような気がする猿の隊長が、そう声をかける。
あ、やめろ。
その台詞で完全に俺をロックオンしたじゃないか。
ちょっと、俺の調子が音を立ててしぼんでしまった気がする。

いや、待て。
物語で、無駄に巨体は見掛け倒しって相場が決まっているんだ。
勇気を見せろ俺。
俺は、精いっぱいの虚勢を声に出す。
「あんなヤツ大したことなかったね。一瞬だったよ」
それを言ったとたんに、もの凄い衝撃を感じて、後ろにはじき飛ばされた。
とても痛い張り手だったよ。
そして、俺がやったとは言ってない！
最後まで聞こうぜと言い訳をしたい気持ちでいっぱいです。
でも、ダメージも思ったより無く、体も問題無く動かせそうだ。
今のは不意打ちだったから避ける事が出来なかったが、対応できないスピードでもなかった。
俺は、一対一なら倒せなくもないと判断して起き上がった。
「この程度で、今や無敵の俺をたお……」
俺は、台詞の途中で絶句し、本能からか即座に逃亡に切り替えた。
なぜなら、巨大な敵が七体もいたのだから。
猿をセンターに、右からムカデ・蛇・豚・牛・犬・羊と勢揃いです。
きっと、あいつ等が七怪のボスなんだ。
最初に予定していた各個撃破はどこに行った？
兎に角、今はどうでも良いから逃げよう。
後ろからは、大量に木々を倒して近づいてくる音がする。
この勝負は、引き分けって事にしてお終いにしてくれないかな？
あ、やっぱり無理ですよね。
「お前らは、回り込め」
「こいつを囲い込むぞ」
「おい。下っ端どもは、足止めに専念しろ」
あ、このままだと囲まれる。
所々に出てくる雑魚は、問題にもならないが確実に距離が迫ってきているし、このままだとあの巨大生物達に包囲されるのは時間の問題です。

しかし、全力で逃げる俺の視界を巨大な壁が遮った。
いや、巨大な犬が回り込んで来たのだ。
俺は、急いでブレーキを踏むと周囲を確認した。
巨大生物が七体に、その手下達が後ろに続いているのが見える。
完全に取り囲まれてます。
「小僧。鬼ごっこは、もう終わりか？散々と暴れたんだ覚悟はできてるんだろうな？」
「覚悟？そんな物は必要ない」
「今更強がりか？笑えてくるぜ」
「笑えてくるのは俺の方だよ。一回しか使えない保険で、すべて上手く行きそうなのだから」
「は？いったい何を寝言を」
俺を取り囲んで余裕があるのか、おしゃべりをしていた猿の言葉を最後まで聞かずに俺は術を発動さる。
全部を出し切るつもりで力を使った。
足りない分は、足から根をはり龍脈から吸い上げる。
何故ならこの辺り一帯の森はすでに俺の支配下にあるのだから。
そう、ここは俺が最初に来て、休憩しながら出来る範囲で色々と試したのだ。
エネルギーを送った上で、俺の一部を植え付けると、近くにいる間は触らなくても色々と動かせる事が分かった。
地が裂け、何かが生えたと思うと近くの生物を絡めとり地中へと引きずり込んだ。
「猿魔王様。これは、あの時の植物の攻撃です。部下が地中に引きずり込まれたヤツ」
「慌てるな、たかが木如き引き千切ってくれるわ」
俺は、さらに力を込めて木々を強化した。
「何？たかが木が引き千切れないだと？」
「張紹さんが言っていた事は本当に参考になったよ。試したら色々とできたし、陣地を構築するってのも大正解。一勢力を無力化できれば良い方だと思っていたけど、まさか一網打尽にできるとは思ってもな

かったね」
「ちくしょう」
完全に身動きの取れなくなった敵達が地面から頭だけをはやしている。
もはや、俺に命を握られた状態って訳だ。
これで試練は完了かな？
俺は息を吐いて、へたり込んでしまう。
思ったより消耗したけど、何とかなって良かったよ。

「まったく。親父達はふがいなさすぎだ。あの状況から簡単に逆転されたのだから」
どこからか声がすると、俺の支配する森の外から白い何かが近づいてきた。
「袁洪よ。面目ない」
「あ、ボス。助けてください」
猿魔王と隊長がそう言った。
え？あの巨大生物達がボスじゃなかったの？
「その様子だと、もう大技は使えないみたいだが念の為だ」
その言葉と同時に、俺は支配している森の外まで吹き飛ばされたのだった。

真の七怪があらわれた

吹き飛ばされながら思った。
人ってこんなに飛べるものなのかと。
そんな感じで現実逃避をしていると、地面と熱いキスをすることになった。
受け身は取れずダメージは甚大だし、大規模な力の行使で疲労感もハンパない。
いたいいたい！
もう帰る！
こんな面倒事は、お開きにしよう。
はい。解散！
そもそも、何で痛い思いをしてまで、こんな面倒な事しないといけないの？
どこで選択肢を間違えた？
やっぱり趙公明の提案に乗ったのがまずかったよね。
見るからにヤバい感じがしてたのに、目先にぶら下げられた餌に飛びつくのは問題だったと今更ながらに思う。
俺ってかなり短慮だね。
この失敗を踏まえて、次からはそんな餌に釣られクマー。
俺は、とっさに体をよじり、コロコロと転がって移動する。
すると頭が有った場所の地面が砕かれた。
コイツ、俺の頭を踏み抜くつもりだったな。
「おいおい。もう少し現実逃避させてくれよ。とても疲れてるし、体中痛いんだ」
「現実逃避している間に、あの世に送ってやろうって言う、俺の優しさは伝わらないかね？」
「そんな優しさは伝わらないし、どの道死んだら伝わらないだろ！どうせなら、俺が手をくだすまでもないとか言って帰ってくれた方が優しかったよ」
俺は、起き上がり袁洪と呼ばれた白猿を睨みつけた。

「そんなに睨んでも結果は変わらないぜ。お前を見逃しても力をつけてリベンジしに来るであろうことは目に見えているからな。俺達よりも、あの化物どもの方が怖いんだろう？ここにいるのも、あの化物どもの差し金だろ？あの化物どもと同時に相手にするには面倒な術を持ってるようだから、ここで消えてもらう方が後々楽になるってものよ」

よく喋る猿だ。

俺から地の利を奪ったからか、先ほど臆病なくらい慎重に不意打ちを仕掛けてきた癖に、ずいぶんと余裕がある。

俺の事を舐めてるのか？

それとも、何か隠し玉でもあるのか？

どちらにしてもムカつく。

あんなに優しい御姉様達に化物とか言いやがって。

悔しいけど、言い返せない。

いや、違う。待て。そうじゃない。

許せないな。

お前も化物じゃないか。

あれ？これも何か違う気がするが、まあいい。

「お前の言いたい事はよく分かったよ。さっきまでは、どう逃げようか考えていたが、気が変わった。お前をぶちのめす」

やっぱり俺って短慮だったよ。

目の前の白猿に向かって、攻撃を仕掛ける。

「くっ、どこにまだそんな底力が？」

白猿は、とっさに防御したようだったが、ダメージが入ったのか苦悶の顔をうかべた。

そして、距離を取ろうとした所を、間合いを詰めて追撃する。

しかし、相手はある程度読めていたのか紙一重で交わし反撃してきた。

俺は、そのダメージに思わず少し動きを止めるが、相手が攻撃で硬直している間にお返しを叩きこむ。

どうやらスペックは俺の方が上だったようだ。

その後、互角の攻防を繰り返すが、冷静になった俺は思う。
勝てる気がしねー。
いや、負ける気もしなんだけど、決め手に欠けると言うか、倒しきれる気がしない。
相手も、同様に感じたのか、お互いに攻撃の手がゆるみ距離を取り始める。
「ここまで、やっても助けに来ないって事は、化物どもはしばらく来ないと思って良さそうだな」
白猿が勝ち誇ったように言った。
「御姉様達が来ない事に何の関係がある？」
「いや、大有りだ。俺達は、この後化物と戦うことを想定していたのだが、今は目下お前を排除すれば、しばらくは時間があるって事だ」
「何が言いたい？」
「七怪が協力していたとしたらどうだ？お前たち、そろそろ出てこい」
その声に呼応するかのように、六つの人影が現れた。
そう人型なのだ。
ムカデ・蛇・豚・牛・犬・羊の特徴を持った人型の妖怪だ。
俺は、大きければ強いと思っていたが、この白猿と戦って分かった。
この白猿は、先ほどの巨大な猿よりも強い。
そして、おそらくこの白猿と同格な奴らが、あと六体も控えていたとか、ちょっとチュートリアル的な初ミッションなのに難易度おかしくないですか？
できればお遣いミッションを繰り返して、装備と技を貰って、安全に成長していけるタイプの方が好みでした。
そんな俺の心境を無視して、七怪はストーリーを進める。
「ここまでやったんだ。俺は休ませてもらう。とりあえず、今の所脅威はコイツだけだ。さっさと片付けて親父達を救出に行こうぜ」
「袁洪よ。ずいぶんと手古摺ったようだな」
「言ってくれるぜ。そいつ一人に部下達は全滅。オマケにそいつ自体も能力が高いみたいだ。控えめに言って十分に化物だぜ」
「それもそうだな。油断せずに行かせてもらう」

あ、白猿の余裕は、これだったのね。
まだ仲間が控えているとか、残機が無い俺と違って余裕あるわけですね。
しかも、御姉様達が居るか居ないか判断する為に慎重に時間を使って判断してる辺り賢い。
部下達が、一網打尽にされたから、再び同じことをされないように警戒もされていた訳か。
俺の完敗だ。
今日の所は、見逃してやる。
お前たち運が良かったな。
さて、帰るとしますか。
「おい。どこに行くつもりだ？」
「ですよね？」
一斉に三人くらいが飛びかかってきた。
一人の攻撃は、なんとか防げたが、残り二人の攻撃は防げずにダメージが入る。
袋叩きだ。
なんとか、強引に突破したが控えていた三人によって、再び袋叩きにあう。
あ、これ以上ダメージが入るとヤバい。
変化が解けそう。
今植物になったら、身動きが取れないから完璧に詰む。
そうこう考えている内に、良い一撃を貰い俺の変化が解けてしまった。
「な、なんだコイツは？」
「貴様は、あの化物花だったのか？」
「デカい。デカ過ぎる。前よりデカくなってるんじゃないか？もう、親父達よりも巨大だ」
七怪達が何か言っているが、今はどうでもいい。
俺の生存本能は、必死に回復しようと地面からエネルギーを吸い上げる。

兄様に破裂するかもしれないと言われて、積極的に吸った事は無かったが、そんな事を言っている暇はない。
俺が本気で吸い上げている影響か、地は渇きひび割れて、周囲の植物達は枯れ始めた。
「コイツ、そのままにしていたら危険だ」
「ああ、所詮は植物だ。さっさとへし折ってやる」
「みんな、ここは最後のひと踏ん張りだ。一斉にかかるぞ」
そう言って七怪は、同時に最大威力の攻撃を放った。
今や巨大な樹木のような花が、轟音をたてて大きく揺れる。
しかし、倒れたのは七怪の方で有った。
それぞれに苦悶の顔を浮かべる七怪を見下ろしながら思った。
そんな大きな声で攻撃するって言ってるのに防御しない訳ないだろう？
大量に吸い上げたエネルギーで術を使い、体を硬質化させていた。
あまりにも硬い為、それぞれの攻撃が自身に跳ね返り七怪にダメージを与えのだ。
しかし、それだけで安心できなかったので、枝や根や蔦を伸ばし七怪を絡め取る。
あまりにも異様な光景に、七怪は叫びを上げたが、それでも不気味な植物達の手が緩まる事は無かった。
これで、俺は辛くも七怪を掌握する事に成功したのである。
話は、これで終われば良かったのだが、ダメージを負い過ぎた俺はエネルギーを吸い上げるのを辞めず、環境破壊を繰り返した。
それは、辺り一帯砂漠になるまで続き、その地に有った龍脈をも破壊してしまったのは言うまでもない。
そして俺は、七怪を攻略する際に、辺り一面を砂漠にし龍脈を破壊した結果、金鰲島の先輩達からヤバいヤツだと思われる事になった。
当初の武勇伝を作っていじめを回避っていう目標は達成されたが、この扱いはある意味いじめではないだろうか？
趙公明と同類扱いとか解せぬ。

後始末の後は祝勝会。あの惨状には目をつぶって欲しい

「み、水をくれー」

どこからか、くぐもった声が聞こえてくる。

七怪にボコられて、花になってから一晩が過ぎた。

久しぶりの植物ライフだけど、やっちまった感がある。

だって、一晩で見渡す限り砂漠になるとかどーよ？

うん。水が欲しいのは俺の方だ。

根が水を求めて地中深くや広範囲に伸びてるが、そろそろマジで吸える物がなくなって来た気がする。

どれもこれも俺を袋叩きにした七怪や、こんな試練を与えた兄様や通天教主様が悪いと言っておこう。

なぜなら責任転嫁でもしてないと俺って確実に討伐対象じゃない？

でも、このペースで吸い付くしてしまうなんて、俺も大食いの資質があるのかもしれないし、今ならマドンナ姉様があんなに物を食べてる気持ちが少し分かったかもしれない。

植物状態と違って、人型は根からエネルギーを吸収できないので、その分エネルギー確保の為に食が進むのかもしれない。

もしかしたら、俺も燃費が悪い可能性がある事を覚悟せねば。

なら兄様やビーナス姉様やクイーン姉様は、普通なのが謎だ。

もしかしたら、燃費が良いのか、燃料タンクが大きいのかもしれない。

俺もできるなら、そっちの方が良かったりします。

そういえば、捕まえたままの七怪や、生き埋めにした動物達はどうしようか？

七怪にはボコられた恨みがあるから、しばらくはこのままで良いけど、たぶんあの辺りの砂漠に埋まってる奴らって、このまま放置したらヤバいかも？

ちょっと罪悪感はあるし、悲しいけど植物態で身動きの取れない俺にはどうする事もできない。
ここは兄様に倣(なら)って、涙ながらに黙祷でも捧げておけば許されるよね？
黙祷完了。
しかし、そろそろダメージも癒えてきたけど、まだ人型になれる気がしないのは、なぜだろう？
それと、兄様の迎え遅くないですか？
送り出す時は、あんなに早かったのに、迎えに来る気配がしないのですが。
ハッ、まさか、この大惨事の責任を押し付けて俺を闇に葬るつもりでは？
「ノンノン。相変わらず人聞きが悪いことを言わないで欲しいな。ちょっと準備に時間がかかっただけで、この言われようとは」
え？兄様いつの間に？
しかも、でっかい植木鉢まであるし、本当にいつの間に？
「さっきから何かブツブツ言っている辺りからだよ。え？なんだって？この惨状は僕と通天教主様のせいだって？」
言ってない。言ってない。
うん。全面的に七怪が悪いです。
「そう？なら良いのだけど。あと、そろそろ皆来る頃だと思うよ。正大が気にしてるだろうから、砂漠から彼らを救出するのに必要な人員を手配しておいたよ」
それは、ありがとうございます。
だけど、水晶で観察していたとしても大量に人員を動かすなんて手際が良いですね。
すると兄様は、両腕を大きく広げて自信満々に言った。
「正大なら、きっとやってくれると信じていたのさ」
えーと、その言葉は、七怪攻略を信じていたのか、やらかす事を信じていたのか判断に迷います。
前者だと思って良いですか？

「しかし、辺り一面砂漠だね。張紹あたりなら喜びそうだけど、これは植物系としては不味くないかい？」
うぐ、スルーした上に痛い所を突く。
ちょっとダメージが大きく自制がききませんでした。
でも、反省はしているけど、後悔はしてません。
とりあえず、次からは、この惨状から救援を待たずに自力で移動できるようにせねば。
「ちょっと反省の方向が違う気もするけど、失敗は成長の元だと言うからね。どんどん僕を楽しませる失敗をしてくれたまえ」
ちょっと！失敗する前提で話さないでくれませんか！
縁起でもない。

その後、やってきた少し興奮気味の張紹さんの術で砂から掘り起こして貰って、ワイヤーで引上げられた俺は無事に植え替えられた。
兄様がちょっと邪魔な根っこは金蛟剪で切ってしまうおと言ったので、術で頑張って縮めた。
あと、それの応用で全体的に小さくなれたので植え替えが少しは楽になったと信じたい。
でも、縮む時に七怪を拘束している部分も縮小されたので、何か悲鳴が聞こえたが気のせいで有って欲しい。
地面に埋まっていた動物達は、趙公明派閥の仙人に助けられて投降したもようだ。
ちょっとマッチポンプみたいだと思ったが、他の仙人の心象が上がって、俺のが下がるのはどうにも解せない。
しかし、さすが趙公明派閥の仙人達だ。
この惨状を見ても、表面上はいつもの事だと思ってるのか、ドン引きも何も無かった。
兄様は、いったい普段から何をしているのか凄く気になる。
そして、肝心の七怪は、黙々と食べ続けるマドンナ姉様の隣に置かれたら、すぐに金鰲島の傘下になると表明してくれた。
たまに、これ食材？これ料理するの？って感じの視線に恐怖を感じ

たからだろうと思う。
俺だって、怖いから仕方ない。

最後に今、金鰲島では祝勝会が行われている。
もちろん主役は俺って事はなく、壁際に観葉植物かの如く飾られていた。
目の前で、先輩達は飲めや歌えで大騒ぎ。
とても楽しそうである。
絶対に祝勝会じゃなくて、砂漠の救助作業の打ち上げとか、無駄な手間かけさせやがってと思ってる人達への慰労会だよね？
だって、俺のこと放置だし、俺この状態だと酒も飲めずご馳走も食べられないから、ただの罰だよね？
しかし、なかなか、人型になれないのですが？
ちょっと前に完璧とは言えないけど人化を習得したはずだよね？
あれ？もしかして、また植物からやり直しですか？
勘弁してくださいよ。
「さすがに、そろそろ、その疑問に答えようじゃないか。人型になれる妖怪でもダメージを負ったり極度に消耗すると原型に戻ってしまう。再び人型になるには長年力を蓄える必要があるのさ」
えーと、ダメージは龍脈を吸いまくったおかげで癒えてるし、余分に吸ったから力もある程度は蓄えている気がするのだけど？
「正大は、まだ妖怪じゃなくて、妖ゲツだろ？たぶん、人化が不完全なのもあるけど、しばらくは時間がかかると推測するよ。まあ、前ほど時間も材料もかからないと思うから安心したまえ」
うーん。そう言われると、仕方ない気がしてきたかな。
早く妖怪になりたいものだ。
しかし、それなら、こんな試練を妖ゲツにさせないで、妖怪になるまで待って欲しかった。
「趙公明よ。なぜ独り言をしているのだ？」
げ？通天教主様だ。
今、一番会いたく無い人ナンバーワン。

何故なら、七怪は攻略できたが、そこに有った龍脈を完全に破壊してしまったからだ。
元々、そこの龍脈を手に入れる指令を趙公明に出してたみたいなので、この結果は、きまりが悪い。
「この状態の正大の声は、どうやら僕にしか聞こえないようで、彼の疑問に答えていたのです。ちなみに、今は通天教主様に会いたくなかったみたいです」
「ほう？」
兄様！余計なことは言わないでください。
通天教主様がめちゃめちゃ睨んでるじゃないですか！
この姿だと、言い訳も説得も無理なので勘弁してください。
「おっと失礼。言い間違えました。会いたくないではなく、龍脈を破壊してしまった負い目から、合わせる顔がないと言っていたのを簡略に伝えてしまい申し訳ない」
「ふむ。それなら仕方ないかもしれん。趙公明の弟だからと過剰に期待した結果無理が生じ、このような事になってしまったのだから。その点は、我の方こそ済まなかったと伝えてくれ」
「過分な気遣いありがとうございます。きっと伝わっていると思いますよ」
良かった。
視線がやわらいだ気がする。
フォローは助かったけど、本当に言い方には気をつけてください兄様。
絶対に俺で遊んでますよね？
「趙正大よ。七怪の攻略見事で有った。これで当初の目的は果たされたと思う。しかし、龍脈を破壊し辺り一面を砂漠にした悪名は大きいであろう。いずれ汚名返上の機会を与えるので良く修行に励むのだ」
あ、やっぱり後で何かさせられるのですか。
でも、ちゃんと修行が挟めるのは大助かりです。
それで、俺の指導は、従来通り基礎・宝貝・術部門で一般の妖怪と同じように学ぶのですよね？

「趙公明よ。趙正大の指導をしっかりと頼むぞ」
「はい。お任せください。必ずや立派な仙道にしてご覧にいれます」
趙公明は、とても良い笑顔でこちらを見るとサムズアップした。
なんだか寒気と共に嫌な予感がする。
いえ、指導は従来通りでお願いします。
張紹さんを見るに、絶対に他の部門の人達もまともだと推測できる。
だから是非とも是非とも修行は、安全重視でお願いします。
今までの兄様の言動を見ると、その方針はどんな物なのか分からず安心できない。
「うむ。趙公明よ。本当にしっかりと頼むぞ。おそらくこの者は、おぬしにしか手に負えぬはずだから」
ぐはっ！
俺の師匠が趙公明で確定してしまった。
そして、通天教主様に問題児だと認識されてる。
俺の哀しみによる叫びが、夜空にこだまするが他の人には聞こえていない。
だが、俺の叫びが聞こえるであろう兄様は楽しそうに笑っていた。

閑話　このアンニュイ！君に届け！

ｓｉｄｅ趙公明

渡された宝貝を使ってみると、彼の場所はすぐに分かった。

その場所に早く向かいたいが、まずは遠見の術で様子を伺ってからだと思い至る。

どんな場所に、どんな状態でいるか分からないし、第一印象を良くする為の準備をするにしても、やっぱり先ずは情報が大事だからね。

水晶に映し出されたのは、広い平原で見晴らしが良かった。

それに天気は晴れで、視界を遮る雲は一つもない。

これなら空から降ってきて登場すれば、かなりのインパクトがあるんじゃないかな？

実に素晴らしい。

採用しよう。

次に彼の状態だが、くっきりと魂魄体が見える。

侵入者くんは、彼の事を大した事はないと言っていたが、特殊なフィールドが張られている訳でも、何かの術を行使している訳でもないのに、魂魄体を維持しているのは、僕から見ると十分に異常な事に感じるのだが。

しかし、様子を見るに、寝起きなのかフラフラとしているだけで、強い意思を感じられない。

これなら思考があまり働いてないかもしれないから、上手くまるめ込そうだ。

彼の意識がはっきりする前に行かねば。

これは急ぐ必要がありそうだ。

さっそく接触してみたけど、思ったより簡単に誘導できた。

根は素直なのかもしれない。

簡単に妖怪に成れる訳が無いのに、すぐに妖怪に成れると思い込んでるあたり単純とも言える。

しかし、千年か。

ちょっと長いね。
僕としても、そんなに待たせるのは心苦しい。
侵入者くんは、彼におとなしくしていて欲しかったみたいだが、それでは彼があんまりなので早く妖怪になれるように手助けする事にした。
まあ、本音は早く遊びたいってのも有るけど、新藤崎竜先生の紹介状を待たされているのだから、その間は好きにさせて貰おうじゃないか。
勿論、その後も好きにさせて貰うけども。
それと弟になったのだから、侵入者くんに大した事は無いと言われるのは少し悔しいよね。
せっかくだから立派に育てる計画でも立てるべきか。
いつか侵入者くんを見返せる日が来るのを楽しみにしよう。
どんな顔をするのか実に見ものだと思う。
その為には、やっぱり早く妖怪にする必要がある。
そうだ。確か、通天教主様に龍脈の確保を依頼されてたんだった。
そのエネルギーを転用してみるのはどうだろうか？
たった今思いついたのだが、さも計画していたかのように彼に伝えた。
あとは、名前どうしようかな？
僕が公明だから、正大にしよう。
公明正大。
実に僕達らしい名前じゃないか。

正大を龍脈に移し替えて一人帰る。
初対面にスルーされた時は、どうなる事かと思ったが、それ以降は実に良い反応を繰り返してくれた。
そして、実にいじりがいがある。
この分だと、しばらくは楽しみに事欠かないだろう。
そういえば、約束だから妹達にお願いしに行かなければ。
妹達なら、すぐにでも向かってくれるだろうけど、ここは少し身の

危険を感じて貰うべきか。
妹達には、ピンチになるまで様子を見るだけにしておくようにと指示をだしておこう。
別に、ピンチになって慌てる様子を見たいだけって事は無いと言わなくても分かって貰えるよね？
せっかくだから、複数の龍脈を制圧して、同じように実験してみる事にした。
魂魄の有る無しが、妖怪になるかどうかに影響がある事を調べるのは大事だと思う。
防衛や管理に人員を割く必要があるけど、あまり大きく動かすと通天教主様にバレてしまうかもしれない。
いや、別にバレても問題は無いのだけど、せめて正大が妖ゲツになるまでは龍脈を使いたい所だ。
それなら、後で研究結果の資料や比較を出せるから、今後の仙人界の発展に役立つんだよと、通天教主様を説得できやすい気がする。
それなら最初から提案してれば良いじゃないかって？
通天教主様は、なかなかに頭が固い。
僕は必要だと思うから提出している劇場やカラオケ施設の建設に反対するのだから。
きっと正大の事なら許可はおりるだろうけど、許可が出るまでに時間がかかるだろう。
それなら、事後承諾になるけど、早めにやっておいた方が実に効率的だと思う。
さてと、そろそろ正大に会いに行こうと思うのだけど、お土産はどうするべきだろうか？

プレゼントって自分が貰って嬉しい物が基本だよね？
ならば、僕が欲しい思う存分に力を振るえる敵を作ってあげる事にした。
それなら実戦を行えるし、ついでに狩った獲物も持って行けば一石二鳥どころか三鳥の素晴らしい考えだと自画自賛したい。

だからこそ、やっぱり最初は大物だね。
東にある海に住んでいる海竜王とか、天空に住んでいる火竜とか、なかなか良い候補だと思う。
他には、自分達は強い恐れられる存在だと思っていそうな霊獣達も候補に入れておこう。
さてと、最初はどれに手を付けようか悩むところだ。
これなら、きっと喜んで貰えるだろう。

持って行ったお土産は凄く好評だった。
想像以上のリアクションをしていたし、口ではああ言っていたが、きっとあれが噂のツンデレに違いない。
それにしても、竜はとても美味しかった。
雲霄の料理の腕も上がっているようだし、このお土産シリーズはこれからも続けていこうと思う。
正大には悪いが、しばらくはその素材で作った肥料だけになりそうだ。
この料理が味わえないとは、正大もつくづく運がないな。
しかし、安心して欲しい。
料理の味に関しては、この僕が責任をもってレポートするので、料理を眺めて味を十分に想像できるようにしておこうじゃないか。

今日は、正大の所ではなく崑崙山と外交の為に、中立の立場を取る太上老君の住処で会談が行われた。
暗黙の了解である、金鰲島は妖怪の実力者を、崑崙山は人間の実力者をまとめるまでは、お互いにそれぞれの領域に手出しせず、引き抜きやスカウトはそれぞれの領域の者が優先して行うなどの約束事の再確認である。
これは、明らかに妖怪などの支配図が大きい為、金鰲島有利の内容だった。
だから、崑崙側は普通の人間が住む領域を増やす為に、現在の生息域周辺と複数の場所から人間の手に負えない存在を討伐もしくは追

放する依頼を出してきたのだ。
それらの者達が良ければ金鰲側に引き入れても構わないと言う話なので、こちらとしては問題を感じる事もなく了承された。
これは、正大のお土産を増やすチャンスではないだろうか？
ついでに、妖ゲツになった時の修行もできそうな内容だったので、僕としては大変に満足な会談であった。
あとは、通天教主様と元始天尊くんの個人的な歓談が行われる為、僕と崑崙側の側近は席を外した。
彼も強そうに見える。
お願いしたら手合せしてくれないかな？
でも、通天教主様に崑崙側の仙道と問題を起こすなと釘を刺されているので今回は諦めよう。
でも、ただ待っているのも暇だな。
しかし、こんな事もあろうかと、前回来た時に立派な池が有る事を知っている僕は釣り具を用意していたのだ。
さてさて、どんな大物が釣れるかな。
期待に胸を膨らませていると、強い手ごたえを感じる。
ここは腕の見せ所だね。
華麗に一本釣りを決めると、そこには大きなマンボウの姿が。
うーん。この感じなかなかの強い霊獣だね？
なんだかとても怒っている。
確か、崑崙側の仙道と問題を起こさなければ良いのだから、この霊獣を倒してしまっても、まったく問題は無い訳だ。
向こうも、こちらの戦意を感じたのか先制攻撃を仕掛けてきた。
これは立派な正当防衛だね。
この霊獣が、どれくらいの強さがあるのか少しワクワクしながら、宝貝を握った。
帰りに通天教主様から、「問題は起こさなかったか？」と聞かれたので「崑崙側の仙道とは問題無かった」と答えておいた。
嘘はついてないと思う。

そんなこんなで、弟にお土産を持って行く日々を過ごしていると、妹達がついに人化を完成させて、名実ともに妖怪仙人を名のれるようになった。
実にめでたい。
弟も、すくすくと成長しているので、この調子なら人化できる日も近いだろう。
そんな中、ある日、通天教主様から呼び出しが有った。
色々と心当たりがあるだけに、どの事か見当がつかない。
とりあえず、正大に関しての可能性もあるから、言い訳じゃなくて研究結果の資料を準備しておかないといけないな。
そうだ。この機会に正大が人化した時の記念に試練を与えらるように仕向けよう。
何の呼び出しであろうと、色々と報告する事を決めて、僕は通天教主様が待つ部屋に向かうのだった。
願わくは、この試練を乗り越えて正大が一回り成長することを祈る。

閑話　うちのナンバーツーがどうやらアンニュイらしい

ｓｉｄｅ通天教主

いつも明るい雰囲気を振り撒き悩みとは無縁と思える趙公明が、何故か落ち込んでいた。

いったいどうした事かと聞いてみると、ため息交じりに答える。

「今回、通天教主様は出番と見せ場が有って良いですね」

いったい何の事を言っているのだ？

言葉の意図を掴めず首を傾げていると趙公明は言葉を続けた。

「ああ、申し訳ない。このアンニュイな気分は出番の無かった者にしか分からないのです」

本当に何を言っているのだ？

たまに意味の分からない事を言うのだが、今回も話に脈絡が無い。

そうした、我の心情を察したのか、趙公明はヤレヤレとジェスチャーをして、今回の会議で話合うのに必要な報告書や提案書やカリキュラムの原案に嘆願書など色々な書類を山のように提出してきた。

いつもよりも、かなり量が多いのは嫌がらせかもしれない。

趙公明からの書類によく有る事なのだが、自身の趣味に合わせたのや、とんでも無い計画だったりと却下案件が多発する。

その為、次に出される修正案が、まともに見えてしまうのが不思議だ。

また、意見を求めると初回は、たいてい問題発言をして参考にでき無かったりする。

それを却下すると、だいたいまともな事を言い出すので、できるなら最初からそうして貰いたい。

そんな事を考えても、この書類の山が減る訳でも会議が早く終わる訳でも無いので、手早く目を通していく。

しかし、やはり却下案件が有った。

以前から、熱心に提出している金鰲島に新たに建設する施設の提案

書である。
今は、それに割くリソースが無く、保留案件だと言っておるのに。
美術館や博物館は分かるので、余裕が出てくるまで保留で良いだろう。
しかし、劇場とカラオケ施設は必要を感じないので、今回も却下を言い渡す。
毎回、まともそうな施設にまぎれて提出されるので、これだけしつこいとウッカリと許可してしまいそうで困る。
次に目を通したのが、仙道の育成カリキュラムなのだが、ボイストレーニングやダンスにミュージカルに果ては舞台装置の習熟や照明などの裏方など、劇場を建てたらそのまま劇団員にするのかと思える内容となっていた。
表現力や協力性を育むのに良い部分も有りそうで全否定はできないが、仙人としての道を極める為の時間がまったく無いのは不味いと思う。
そして、ページをめくると却下された時の代替案なのか、体力測定のような事を行い個別に特技特徴に合わせてカリキュラムを組んだり、さらに本人が望むなら苦手を克服できるようにするなど、カリキュラムを組む前段階の事が書いて有った。
そうそう、こういった事を書いて欲しいのに、最初のカリキュラムに関して全否定はできないが、必要なかったのではと思ってしまう。
とりあえず、小さく「面倒だから、却下希望」と書かれているのは見なかったことにする。
そういった感じに書類を片していくと、最重要案件と書かれた封筒が出てきた。
こういった物は、重要でもなんでもなく趙公明の私事の可能性が高い。
それでも無視する訳にはいかず、封筒を開けると複数枚の原稿と「感想お願いします」と書かれた紙が出てきた。
一枚目は概要が書かれており、ハートフルサッカーのスポーツ物で、ワールドカップ日本代表を夢見る高校生のライバルあふれる波乱

万丈青春活劇らしい。
その次は、まだネームの段階だが、漫画が執筆されていた。
無視すると、後々面倒な事になりそうなので、手早く読んで感想を言うとするか。
まず初めに言いたいのだが、主人公の設定盛り過ぎじゃないか？
フランス貴族の末裔で、生粋の江戸っ子らしい。
そして、文脈から察するに幼少期から高校に行くまでは、北海道在住のようだ。
次に、ライバル達だが、剣道にボクシングに不良のバトンミントン集団にプロボーラーなどなど、サッカー関係のライバルがまったく出てこない。
むしろ主人公はサッカーよりも他のスポーツの方が才能有りそうな気配がひしひしと感じられる。
後は、最初の目標が目指せ甲子園となっているが、せめて国立競技場にするべきではないか？
確かに、クイズ甲子園やまんが甲子園とかみたいに、全国大会みたいな物かと伝わりやすいが、実際に甲子園球場でサッカーしたりしないよね？
あ、聞いてみたら、その予定らしい。
とりあえず、今の状態だと整合性を取る為にスポーツのジャンルをサッカーからバトル有りのキックベースボールにして、青春スポ魂からシュールギャグへと転向する事を進めたのだが、趙公明は良い顔をしなかった。
その方が、色々なスポーツの仲間を取り入れて何が有ってもギャグで済ませられるのだが、趙公明的にハートフルサッカーは譲れないらしい。
「この良さが分からないなんて実にアンニュイだ。時代が僕に追いついてないと見える」
結果さらにテンションが下がり会議は、いつもより終わる時間が遅れた。
この事にしばらく罪悪感が残ったのだが、次に趙公明に合った時は

良い事が有ったのか、いつものテンションに戻っていたので安心した。
次は、もっと褒める方向で感想を言おうと少し反省したのは言うまでもない。

またある日。
崑崙山の元始と話し合う為に、老師の住処で会合を開いた。
供に趙公明を連れて来たが、崑崙と問題を起こさないように釘を刺しておこう。
話し合うのは、暗黙の了解についてだが、こちらに有利な状態だったからか、元始から色々とお願いをされた。
崑崙は、うちの金鰲島に比べて戒律の内容が厳しく、おそらく人間達を妖怪や強い獣から守れないのを心苦しく思っていたのだろう。
特にうちの方針的には問題なかったので引き受ける事にした。
また、我は金鰲島から長く離れられない立場にいるゆえ、趙公明に飛び回って貰う事になる。
この面倒な頼みを嫌な顔をせずに引き受けてくれるのだから、頭を下げてまで我の片腕に引き入れたのは正解だったと思う。
さて、一通り会談を終えて、元始とオフレコで話す為に、お互いに供の者達を下がらせる。
色々と、歓談や情報交換をしていると、元始が神妙な顔で訊ねてきた。
「ところで通天よ。仙人界を開こうと思った時の事を覚えておるか？」
いきなり、そんな昔の事を聞かれても答えに困ってしまう。
思い出そうとしても、記憶に霞がかかったようなおぼろげな曖昧な事しか出てこない。
「すまない。だいぶ昔のことだから、上手く思い出せぬ」
「そうか。やはりそうか」
元始は、何かを確信したのか、納得したのか頷き続ける。
その後、考え事をしているのか上の空になったので、今回の会談は

お開きになった。
そういえば、趙公明にも似たような質問をされた気がする。
仙人界を作って我に何のメリットが有るのかと。
よくよく考えてみるとメリットは無かった。
次に、なぜ仙人界を作ったのかと。
これは先ほどの元始にも答えたが、よく覚えていないだ。
その答えに趙公明も納得したように頷いていたのが印象に残っている。
あとは、イレギュラーを一か所にや、まとめて潰すのが楽そうや、きっと華やかな戦争になると物騒な事を呟いていたが、いつも通りの突飛な発言なので聞こえなかった事にしたのはしっかりと覚えている。
帰りに趙公明と合流して、問題は起こさなかったかと訊ねると肯定の返事が聞こえた。
その答えに安心したのだが、布でくるまれた大きな物が少し気になる。
こちらも元始とのプライベートな会話を探られるのは困るので、聞いてみたいが止めておいた。
趙公明の気球に釣り具が積んであったのを見るに、おそらく大物を釣ったのだろう。
別に、取り上げたりはしないから、その成果を自慢げに見せてくれても良いんじゃないかと少し思った。

そして、しばらくして、また報告書などの書類に目を通す日々を過ごしていると、元始に頼まれた事は進展しているが、エネルギー確保の為に以前から指令を出していた龍脈の確保が遅れている事に気づいた。
あの趙公明なら、もう一つや二つは確保していると思ったのだが、何も進展していないようだ。
しかし、その確保の為に人員を使っているようでもある。
これは、何かをこっそりと行っているな？

ろくでも無い事なら止めねばならん。
一応、言えば素直に聞くやつだから、呼び出して訊ねてみるか。
もしかすると意外と手こずっている可能性もあるが、むしろ趙公明の手に余る存在がいるのなら、そちらの方が面倒で厄介であろう。
そうで無い事を願うばかりだが、その場合は早めに対策を練らねばならんな。
少し頭痛がする。
気付かなければ良かったと。

原作開始１９５０年前ぐらい　仙人界での生活が始まる

仙人界，は，平和だ

あれから人型になるまで、けっこうな月日が流れた。
なぜなら、龍脈から定期的にエネルギーが吸える場所ではなく、金鰲島の日当たりの良い場所に鉢植えに入れられたまま置かれていたからである。
まあ、そのまま放置されていれば心が折れていたであろうが、御姉様達は毎日水やりに来てくれていたし、張紹さんもたまに訪問してくれている。
それと、怖いもの見たさなのか、たまに他の妖怪達も訪れる時も有った。
後で聞いた話なのだが、妖怪を食べる植物がいるとかで度胸試しに使われていたみたいだ。
通りで、おびえているように見えた訳だ。
気のせいで有って欲しかった。
他に人型になるのが遅れた理由としては、例のお土産が減った事も原因かもしれない。
たぶん効果が有った事に驚きである。
ちなみに、減った理由だが俺の育成を秘密裏に行っていたせいで、滞っていた業務や後片付けに時間を取られているらしいけど、何をやっているのかは教えてくれなかった。
でも、狩りに行かない理由の本音はダダ漏れで、どうやら後で修行の一環に使うのにその前に無くなったら困るからだそうだ。
まったくもって嫌な予感がするし、個人的には無くなっても全然問題は無いのだけれども。
まあ、なんだかんだで植物の間は、とても平和に過ごせた。
この平和がいつまでも続けば良いのにと願っていたけど現実は残酷。

人型になった途端に修行と称して、兄様にあっちこっちに連れて行かれたのである。
海だったり、山だったり、空だったりと、ただの旅行ならどれほど良かった事か。
耐久実験とか、環境によっての能力変化とか口では簡単に言えるが過酷だった。
耐久実験は人化が解けないギリギリを知る為に凄いダメージを何回も受けて神を呪ったし、環境テストに関しては空と海は上手くエネルギーが吸えないみたいで強力な術は使えなくなるし能力も下がるみたいだ。
それ以外の場所では、大規模な術は使えたが龍脈のようなエネルギーがある場所なら良いのだが、そうでないのなら土地が痩せる気がするし、ちょっと枯れかけてる気もして焦った。
あれ？俺って凄く扱いに困る存在じゃない？
もしかしなくても、適応している環境以外ではお荷物だったり？
そんな俺を慰めるかのように、兄様は修行の方向性は決まったから安心するようにと。
あなたは神か、いや、さっきまでの実験を思い出すと気のせいだった。
そして兄様は仕事や準備に時間がかかるらしい。
その間は、金鰲島内で自由時間になった。
とりあえず、今までの過酷な日々を癒す為に休憩したい所だが、張紹さんと約束もあるし前々から準備して貰っていた酒で飲み会を開く事にした。
まずは、いつなら空いているか聞きに行くと今夜大丈夫だそうだ。
とりあえず、忘れてしまわない内に指定された場所で準備でもするかな。
夜になり、張紹さんが来て言った。
「同僚を連れてきた。これから長い付き合いになるだろうから、親睦を深めると良い」
紹介されたのは、姚斌（ようひん）さんと金光（きんこう）さんで、基礎部門と宝貝部門を担

当する金鰲島でも上位陣である方々だ。
姚斌さんは、顔に陰陽の仮面を付けており、服装は黒子ともお坊さんとも取れる黒い服を着ている。
ちょっと階級にうるさい感じがしてプライドが高そうだと思ったが、話してみると兄様と比べて常識人だと感じられ安心できた。
時間があるのなら、今度基礎部門で俺と同期になるであろう新人達に指導を行うそうなので参加するようにススメられた。
兄様は特別な事をしたがるので一般的な事を知っておくのも悪くないだろうと。
それと、苦労するだろうけど強く生きろよと励まされた。
次に、金光さんだが、張紹さんが言っていたように美人さんだった。
しかし、顔と手以外は透明で下半身は完全に見えない。
だからこそ、ひらひらとはためく衣服の中を思わず覗きたくなったのは仕方ないと思う。
そして、彼女からは修行が落ちついたら宝貝部門まで来るように言われた。
やはり、宝貝を作るのは時間がかかるので、ある程度修行が完了するまでは、修行に専念した方が良いとのことだ。
あとは、死ぬ気で頑張らないと生きられないぞと励まされた。
この二人を紹介してくれた張紹さんには感謝である。
だから、たぶん問題ないだろうけど、人化してから兄様とどんな事をしていたのかを酒の肴にねだられたので話してしまった。
まあ、これがどんな結果になろうとも、今が盛り上がるなら、どうでも良いかと思ってしまうほど酔っていたのだろう。
結果、四人でかなりの量の酒を消費したのだが、この中で二日酔いに苦しんだのは俺だけだった。
これが仙人としての格の違いなのかと見せつけられた気がする。
そして、人型の俺って状態異常に弱くないですか？
張紹さんとの約束の酒盛りも無事に終えて、俺はしばらく本当にくつろいでいた。
御姉様達とアフタヌーンティーを楽しんだり、金鰲島で支給される

謎肉の味を吟味したり、惰眠を貪ったりと、植物の時にはできなかった事を楽しんだ。
　そんな日々の終わりはすぐに訪れた。
「やあ、正大。つかの間の休息は楽しめたかい？じゃあ、そろそろ行こうじゃないか」
　嫌な予感しかしないので、行きたくないです。
　断固拒否の姿勢を取らざるおえない。
「まったく仕方ないね。雲霄頼むよ。君も正大に立派な仙人になって欲しいだろう？」
「いやですわお兄様。私の名前はビーナス。でも、私も正大には立派な仙人になって欲しいので協力いたしますわ」
　最初の言葉に希望を持った俺だが、次に続いた言葉に絶望した。
　御姉様達から攻められると俺は、少し弱い気がする。
　色々と困惑している俺をよそに、ビーナス姉様は俵でも担ぐかのように俺を軽々と持ち上げて運んだ。
　やめろーはなせーと心で訴えかけるが、下手をしたらこの筋肉質な腕でへし折られる可能性もあるので、大人しく俺は運ばれた。
　到着したのは、兄様の気球乗り場である。
「何をするか分からないと、正大も不安だろうから、今回はちゃんと説明することにしよう」
「いえ、できれば毎回ちゃんと説明して貰えると助かります」
「まあ、聞きたまえ。これから通天教主様が元始天尊くんから頼まれた討伐に行くのだけど、それを正大にやって貰いたい。勿論、この僕が同行して監督するから前みたいなギリギリな心配はしなくても良いはずだ。やっぱり修行といったら実戦に勝るものはないからね」
　これは、思っていたよりも安全そうな気がする。
　前々から、ダダ漏れだった事なので、この事は覚悟してたし、無理そうな相手は兄様が引き受けるって事なら安心だよね。
　でも、さっきから俺にロープをくくりつけているのは、何故ですか？
「ああ、これかい？目的地に向かいながら、正大には瞑想と術を苦手な

フィールドである空中で行ってもらおうと思ってね。これなら、限られたエネルギーで頑張れるようになるし、瞑想で自身を高めて苦手も克服できる気がするんだ」
　え？何？もしかして、俺空中で吊るされるの？
　しかも、この強度の弱そうなロープが命綱？
　それに、気がするだけで確証は無いんですよね？
　ちょっと待って話し合おう。
　内心で混乱する俺をよそに、気球は浮かび上がり足が地から離れた。
「ああ、目的地まではゆっくりと行くから存分に修行に励むと良い」
「ちょっと待って。本気で待って。このロープがミチミチと危険な音を立ててるんだけど」
「それは勿論、ギリギリの強度のものを選んだから当然さ。さあ頑張って術で強化するんだ。じゃないと本当にちぎれてしまうよ？」
「いやいや、術で強化するのは良いけど、どれくらいやるのか先の見えない持久走なのが凄く辛いんですけど、落ちたらどうする！」
「どうする事もできないね。そうなったら悲しい事になるのだけど、僕は正大の事を信じているよ」
「兄様がやってる事だから止められるでしょう！それと、こういう信用ならいらないから。これなら信用ない方がいいから」
「はは。喋ってないで、瞑想を始めてくれないかい？微量かもしれないし、苦手なエネルギーかもしれないけど、少しでも多くのエネルギーを取りこめるようにするか、自身からエネルギーを作り出す努力した方が、僕は合理的だと思うね」
「何事にも段階があるから。この修行は、習得できなければ死ねってレベルの意思を感じるよ。ほらこんな事しなくても、安全にお願いしますよ」
「安全にって言われても出来ないヤツには出来ないんだよ。だったら死ぬ気で一回やらせた方が成功する確率が高そうだろ？」
　説得は無理だと悟った俺は、全力で瞑想しつつ、ロープを強化しながら、長時間術を使う為のエネルギー配分を調整する事にした。

自分を支えるくらいのギリギリの強化にしておかないと、すぐに力尽きてしまう。
そうなると考えた後に、視線を下に向けると後悔してしまった。
「やっぱり、マジで中止お願いします」
「騒ぐ元気があるなら、まだまだ大丈夫さ」
俺は懇願を続けたが、兄様には暖簾に腕押しだった。

宝貝が欲しい！

結果的に修行は中止になった。
もちろん、俺の懇願が兄様に届いた訳ではない。
あれはロープで吊るされた空の旅をしばらく続けて、喋る余裕も無く限界が近づいているのに修行はいつになったら終わるのか余計な事を考えていたのが悪いのだろう。
術のかかりが悪くなったロープが切れたのだ。
あの千切れる音が、こんなにも絶望を感じさせるとは思いもしなかった。
耳に今でも、ブチッと鳴る音がこびりついている。
そして、俺はあわや大地まで真っ逆さまだったのだが、すぐさま兄様の宝貝である縛竜索によって絡め取られて引上げられたのだ。
フィッシュオンとかふざけた掛け声で。
この対応の手早さは絶対に落ちると確信していたと思う。
兄様にツッコミを入れる事や、無茶な修行に対する抗議も、限界を迎えて絶望を味わい、そして助かった安堵に浸りへたり込む俺には出来なかった。
「やはり、一回では無理だったかな？とりあえず、何か得るものは有ったかい？」
やっぱり無理だと思ってさせてやがった。
思考がまとまらないのと、以前の自分と比較する事もできないので、今の所何かを得られた実感はない。
でも必死さと限界を超えてでも頑張らないといけないって気持ちは得られた気がする。
まあ、賭かっているのは自分の命だし、今回は助かったけど次は助かるという保証はないのだから。
しかし、口では薄情で有っても助けてくれた事には感謝しよう。
まあ、元凶であるのから、感謝は相殺されるのだが。
むしろマイナスだ。
本人の気楽さや余裕は助けるつもりが有ったからだろうと思いた

い。
「その様子だと、実感はなさそうだね。物語の主人公はピンチになると覚醒するって聞いたのだけど、この程度では無理だったか。次は、もっとハードにいこう」
ヤバい。このままだと、修行の無茶さ加減が際限無く上がってしまう。
とりあえず、嘘でもなんでも良いから覚醒アピールをせねば。
しかし、俺の体は疲労からか思うように動かず、声も出せない状態だった。
さっき、学んだ必死さと限界突破を思い出すんだ俺。
無理でした。
出来ない事は、やっぱりどう有っても出来ないのだ。
「ほんのジョークさ。そんな絶望そうな顔をしないでくれたまえ。それとも、なにかね君。僕がそんな男に見えるのかい？それともさっきの修行の事をあげつらうつもりかな？もし助かる事を知っていたら、あんなに必死に頑張ったかい？僕は正大の弱点は、すぐに諦めてしまう所だと思っている。それを自覚して貰う為に、少々荒療治になったのは認めなくもないが」
兄様より強くなった時は、覚えていろよと心に誓った。
しかしながら、ジョークなら良いのだが、ちゃんと言質を取らないとノリでやりかねないとは思ってたりもする。
重要な事なので、はっきりと声に出して問いかける。
「本当にジョークですか？」
「勿論さ。しかし、予想以上に疲弊しているようだね。これでは、目的地についても討伐は無理かな」
この疲れは、ちょっと休んだくらいでは取れない気がする。
それに、ここは空の上だ。
能力が落ちるって事は、回復力も落ちてる訳で時間をかけないと討伐する元気はないと思う。
「仕方ない。今回は休んで、僕の戦う様を見学すると良い」
そう言って良い所を見せられるのが嬉しいのか上機嫌だ。

そういえば、兄様が戦う姿を見るのは、最初に金蛟剪を使って以来見てない気がする。
あの宝貝は凄すぎて参考にならないと思うのだが、お手並み拝見といこうじゃないか。
討伐対象は複数いて、それを同時に相手取る事になったのだが兄様は金蛟剪を使わなかった。
しかしも相手を圧倒する戦いっぷりを披露したのである。
あの縛竜索と呼ばれる宝貝は、派手さこそ無いが良いものだ。
リーチが伸びるムチのような打撃から、レイピアのような鋭い突き、そして刃も無いのに斬撃を放てるという、近から中距離を完全にカバーしている。
多様性があると言われると便利なような気もするが、全ての性能を使いこなすには持ち主の技量を問われるであろう。
それを十全に使いこなす兄様の実力は、単純な破壊力のある金蛟剪に頼るだけの男ではなく、真に戦うすべを持つ戦士である事がうかがい知れる。
不覚だが、ちょっとだけ華麗だとも思ってしまった。
しかしながら、兄様ならもっと爆発したり、巨大ロボットだったりと派手な物を好みそうな気がするのは俺の偏見なのだろうか？
「どうだい？この僕の華麗な戦いっぷりは？」
「その縛竜索ください」
「パルドゥン。それは出来ない。僕としてもこの宝貝は気に入っているのだよ。しかし、ぶしつけだね。術を使えば、正大も似た事ができるんじゃないかい？」
「術は、下準備も必要だし、消耗も激しいのですよ。兄様は金蛟剪持ってるんだし、それ要らないじゃないですか。ください」
「まあ、この宝貝は上げられないけど、それを含めて正大が宝貝を持つのはまだ早いと思うんだ」
「何故ですか？」
「まあ、これは僕の見立てなのだけど、宝貝はそれぞれ必要としているエネルギーが異なると思っている」

そこから兄様の講義が始まった。
例えば、ある宝貝を使うのにエネルギーＡが必要だとして、その宝貝の使い手は発動する為にエネルギーＡが必要なので使い続けるとエネルギーＡが安定して作れるようになる。
だがその影響か、他のエネルギーを作るのが苦手になり、別の宝貝を使おうとしても発動にエネルギーＢを必要とする為、エネルギーＡでは威力が落ちる・消耗が激しい・もしくは発動すらしない現象が発生する。
それにエネルギーが固定されてしまうと、長年修行して覚えた術ならともかく、新たな術を覚える事が限りなく出来なくなる可能性があるそうだ。
それに覚えている術でも、しっかり習熟訓練を続けないと使えなくなる可能性もあるらしい。
なので、自分に合った宝貝選びをしないと、後々後悔するのは自分だと諭された。
一度選ぶと、その宝貝を強化するか同系統の宝貝を扱うか、自身のエネルギーに合わせて自作するか、もしくは威力や性能を抑えた低燃費な宝貝にするの事になり、他の宝貝に乗り換えるのは並大抵の努力では難しくなるそうだ。
しかしながら、天才とはいるもので複数の宝貝を扱える存在もいるらしい。
そういった者は、複数のエネルギーを使い分けられる技巧派か、エネルギーの種類とか関係なく大量のエネルギーを保有している強者などが良い例だと。
中には、一時的に自分の体を組み替えて発生させるエネルギーを変える者も存在するかもしれないとも。
なので、今は自身の成長に専念したり術を覚えられるのならそれを頑張った方が大変だが、能力に幅が出るかもと推測していた。
もしかしたらだが術の修行に励んだ者は技巧派になりやすい傾向にあり、２～３種類は使い分けられる可能性が少なからずあるかもと。

でも、宝貝があれば手っ取り早く奇跡の力が扱えるので、一概にどちらが良いかは分からないそうだ。
うん。どちらが良いか分からないのは同意だね。
だって術とか、苦労の割に性能がゴミなもの多いから。
張紹さんには悪いけど、本当に廃れる未来しか見えないよ。
しかし、改めて言われると悩むね。
色々と出来るようになるか、手っ取り早く力を得るか。
まあ、今は早急に力が必要な状況でもないので、非常に残念だが宝貝は保留にしよう。
もっと素敵な宝貝に出会った時に使えませんじゃあ悲し過ぎるからね。
まあ、縛竜索をあげたくないが為のでっち上げの可能性もなくもないと怪しんではいるが、一応納得できる内容だったので、これ以上宝貝を要求する事もなく大人しく金鰲島に帰ることにした。
そして、今回の目的は、俺の諦め癖を自覚させる事だったのか、しばらくは金鰲島で同期と基礎を学ぶ事になった。
でも、基礎を終えたら兄様の事だから本気で覚醒の連続を狙った修行を組んでいる可能性もあるだけに身震いを抑えられない。
そんな日々を過ごすと、ある日姉様達が上機嫌でやってきた。
どうやら、長年開発していた宝貝が完成したらしい。
名前はビーナス愛の泉のあふるる壺と言う、強力な吸引力のあるポンプである。
これで水汲みや水やりが楽になると言うビーナス姉様の言葉にマジでお世話になりましたと頭を下げたくなる。
というかそんな宝貝を開発させてしまうくらい苦労かけていたのかと、若干の心苦しさを感じた。
でも、その宝貝は性能がおかしい。
吸い込めるものは、風だろうが炎だろうが雷だろうがビームだろうが何でも吸い込めて、しかも、その吸い込んだ状態のまま放出できると言う強力な兵器である。
なにそれ、俺も宝貝が欲しい。

我慢を決めたのに、そんな物を見せつけないで欲しいと、姉様の宝貝を褒めながら心から思った。

術は要らない子だなんて言ってないよ

しばらく同期と姚斌さんの基礎部門に出て、一般的な瞑想や仙人としての鍛錬方法を教わった。
なぜか同期達から引かれていて、親しい知り合いを作ることの出来ない授業だったが、すごく安全で心からホッとする。
あんな無茶な修行をした後だから、ちょっと物足りないとか全然思ってないから。
本当に本当だ。
フリじゃないよ？
ビバ、成長性より安全性。
それよりも、危険な方が成長できると思う考えは間違っていると兄様に訴えかけたい。
たぶん聞き入れてはくれないだろうけど。
おっと、集中力が乱れてしまった。
今は、一人で黙々と瞑想をしている途中だったのだ。
それぞれに都合があるので、師匠や各部門の仙人達が直接指導する時間は思ったより少ない。
決まった日にそれぞれの教えやカリキュラムを守っているかの確認や、成長に合わせて仙道としての格の査定、他にも修行が合ってない場合の相談や、兄様による突発的なイベントなどなど数えるくらいしかない。
ちなみに兄様のイベントは俺を正式に弟子にしてから減っているそうで、先輩達から感謝されていた。
そのイベントのほとんどが俺専用になった感じがあるので、全然嬉しくないが。
そういえば宝貝部門だが正直言って金光さんは、いつか過労死するんじゃないかと思うほど過密スケジュールだった。
まずは宝貝の使用法や作成に関しての授業なのだが、今は凄く熱いので希望者や再受講者が多く、授業が開かれる回数がダントツで多い。

次に、発掘された宝貝の解析は、量はそれほど多くは無いのだがオーパーツ過ぎる物などが多々あり、なかなか進まないのが現状だそうだ。
そして、最も多く時間が取られるのが宝貝の開発らしい。
個人的な開発なら時間がかかるのは仕方ないかもしれないが、今は宝貝の開発は手探りが多いので行き詰った仙道からの相談や、試作実験でのトライ&エラーはやはり膨大な時間がかかるそうだ。
中でも、ネックになるのが素材らしいのだが、やはり貴重なので自身で取りに行くか通天教主様主導での大規模な採取部隊の結成などで賄っているらしい。
もちろん採取は危険が多いので、上位の仙人が駆り出される事が多く、素材が大量に必要な宝貝部門は率先して参加しているらしい。
なので、未だに妖怪になっておらず未熟な仙道である俺が宝貝欲しさに、金光さんの所に行くのは迷惑だと察した。
念願の宝貝は、まだまだ先になりそうだ。
凄く無念である。
宝貝を作りたいなら兄様や姉様達に聞けば良いと言われそうだが、方針としてはまだ早いと言われているし、あの人達って天才肌だから教わるのに不安がある。
ちなみに修行内容にも不安があるから、それが拍車をかけているのだ。
あとは、術部門だがお察しである。
道のりが長いのに適正が必要とか、欲しい術が無理だった時点で行かない人が多いそうだ。
どの術に適正があるか一々確かめないといけないし、そんな事よりも修行や宝貝だって風潮が流れている。
そんな事を考えていると、一人の道士から張紹さんが呼んでると伝言が来た。
あれ？失礼な事を考えているのが読まれたのか不安になりながら術部門の部屋へと向かった。
「何やら宝貝が欲しいそうじゃないか？正大は共に術部門を盛り上げ

てくれるとばかり思っていたのだが」
「あ、いや、まあ、術には現在のメインウェポンだし頼りにしてるけど、それはそれとして、やっぱり今流行りの宝貝は欲しいと言うかなんと言うか」
うん。なぜか口から言い訳が出てしまった。
宝貝は良い物なのだから、欲しい事自体悪い訳ではないはずなのに。
「まあ、この際だから言っておくが初回に来る新規を除けば、この部門を利用しているのは正大と姚斌と金光の三名くらいだ。このままでは、術が廃れるだけでなく廃部の恐れもある」
「姚斌さんと金光さんもですか」
「ああ、彼らも古い仙人で術を修めていたから、一応術派なのだよ」
口から出そうになったが、術部門を宝貝部門に統合した方が色々と合理的な気がするとか言わなくて良かった。
金鰲島でも上位に入る三名の心象を悪くしそうな発言は、ここでの生活を脅かしそうだからね。
「しかし、意外ですね。術の盛衰は気にしていたみたいですが、部門の存続も気にしていたなんて。そう簡単には無くならないと思いますよ」
「そうは言ってもだね。実績が少ないのだよ。それと何であろうと一部門のトップに立っているのに、それを下ろされるのが嫌なだけだね」
心配している理由が、とても俗な動機だけど、なんとも納得のいく動機であった。
「まあ、今回呼んだのは少しばかり術部門を手伝って欲しくてね」
「それは、お世話になったので可能な事なら協力したいですよ」
「助かる。詳しくは姚斌が来てから話そう。ちなみに金光は忙しくて無理らしい」
姚斌さんも金光さんも術部門に協力的なんだね。
本当に余計な事を言わなくて良かったよ。
そんなことを考えていると、すぐに姚斌さんが来た。

「来たな姚斌。さっそくで悪いのだが、以前から頼んでいた事を実行にうつして欲しい」
「本当にさっそくだな。これは簡単には出来ないと思うぞ」
「それでも、次のステップにうつるのに必要な事なのだ」
いきなり会話から置いてかれました。
俺はいったい何をされるのでしょう？
「ああ、すまない。正大には説明が必要だったね。簡単に説明すると、術のハードルを下げる為に、簡易的に術を発動する為の触媒を開発しようと思ってね」
うん。素直に宝貝作った方が良いと思ったけど口には出さないよ。
「その前段階として、正大には術符の作成を習得して欲しい。術符とは、紙に決められた図式をエネルギーを使って書く事によって、使い捨てではあるが爆発やら発火などの現象を起こせる札なのだ。あいにくと私の手はふさがっていて、指導できないので姚斌に頼む事にした」
うん。そりゃあ手で立っていたら、手はふさがってますよね。
でも、俺はこの前の飲み会で知っている。
張紹さんの手は、普通の長さまで縮めることが出来るので、普通に地面に足で立って手の長さを縮めたら可能ではないのかと？
酒宴では、片手で立って片手で飲むをやっていたので、このスタイルは何かこだわりがあるのだろうか？
「口で説明するよりは見て貰った方が早い。これが爆符だ」
そう言って姚斌さんは札を投げると、壁に張り付いた札が爆発した。
ちょっと、いきなりそういう事をされると驚くじゃないですか！
しかも、上手く遠くの壁まで飛んで行ったから良かったけど、これもし途中で地面に落ちていたら俺爆発に巻き込まれてましたよね？
あと、壁に穴が開いてるんですが！
「姚斌よ。自慢したいのは分かるが、いきなりは驚くだろう」
「え？それだけですか？壁に穴が出来てますよ」
「ちょうど広くしようと思ってたから問題ない。あれくらいの大きさ

なら収納スペースと言った所か。むしろ、もう少し大きくても良かったかもしれない」
「張紹よ。それは挑発か？威力を抑えたのだが、もっと吹き飛ばしても良かったのだぞ」
「いえ、普通に十分驚きましたから。術符って凄いですね。これは誰にでも使えるんですか？」
「ん？ああ、威力は札の制作者と使用者のエネルギーによるが、仙人なら使えると思うぞ」
　これは、けっこう便利そうな予感がする。
　教えてくれると言うのなら、興味がわいたので教えて欲しい。
　でも。俺は、兄様との生活で、そんな餌にを何度も繰り返してきたんだ。
　そろそろ学習している事を証明せねば。
「それでデメリットはなんですか？」
「デメリットか？それはたくさん有るな。まず使い捨てという事だな。次に紙だから水に弱いし、起動する前に燃やされたら効果出ないので火にも弱い。それと寝てる時にウッカリ発動させて誤爆したら目も当てられん。他には、別途で上手く紙を飛ばす術も必要で、それがないと思わぬ方向に行って大惨事になるだろう。そして最後に、慣れても一日に数枚しか作れなくて凄く疲れるという事だ」
　うん。本当素直に宝貝作った方が良いと思います。

趙公明と行く十天君勧誘の旅「その壱」
重大な事を気付いてしまった

日課に寝る前の術符作成の練習が追加された。
何故寝る前かと言うと、修行の前に作成練習をすると疲労感から修行に身が入らないからである。
しかし、この練習はなかなかに苦行だった。
いきなりお手本通りにヤレと言われても無理な話だったので、姚斌さんからしばらく綺麗な直線を描くように指示された。
縦だったり横だったり斜めだったりと、ひたすらに直線を描き続ける。
しかも、これに慣れたら次は綺麗な円だったり、直線を太くしたり細くしたりと練習の終わりが見えない。
そう現在は見事に疲れるだけで、何の効果も無い術符を量産しているのだ。
それは使い物にならないと分かっていても疲労の結晶なので捨てる事も出来ず、部屋に術符のなりそこないが貯まり始める。
何かリサイクル方法を考えないと精神衛生上よろしくない気がしているのだが、良い案なんて簡単に出るものではなかった。
実に悩ましい。
そんな疲労はしているが安全な日々を過ごしていると、ある事に気がついてしまう。
それは昼休憩で支給された謎肉を食べている時に、ふと思った。
俺は人型になってから、まだ御馳走を食べた事が無いと。
最初に人型になった時は、急にお偉いさんに呼ばれて、その後は無理難題に四苦八苦してそんな事を気にしている余裕は無かった。
そして、その無理難題を達成した後に宴会で御馳走が振る舞われたのだが、その時は植物だったので、ついに口に入れる事が出来なかったのだ。
その後、再び人型になったら兄様に振り回されてそんな事を考える

余裕もなかったし、この支給された謎肉でも食べ物を味わえる喜びを感じて満足していた自分もいた。
だが、疲れているが安全な日々が過ごし考える余裕が出てくると、植物の時に兄様や姉様達が食べていた料理の数々を思い出してしまい、急にこの謎肉が味気ない物に感じられる。
気付いてしまったからには仕方ない。
この謎肉だけで満足するのは、もう無理だろう。
ならばする事は一つである。
兄様に抗議に行こう。
思い立ったなら修行をしている場合じゃないな、さっそく行こうすぐさま行こう。
俺は、足早に兄様がいるであろう場所に向かった。
普段なら余計な厄介事を避ける為に自ら行こうとも思わない場所だというのに。
「なになに?正大は御馳走が食べたいのかい?」
まったくもって、その通りなので、首を縦に振り肯定する。
それに対して兄様の回答は無慈悲な物だった。
「残念だけど、今は材料を切らしていてね。他の仙道達もその謎肉で我慢しているんだ。次の大規模な調達があるまでは、御馳走は無いよ」
材料が無い。
御馳走は無い。
最初は、その言葉が頭を素通りして事実を否定し、次にその言葉が頭にリフレインした後にその事実を認識して崩れ落ちる。
ちょっとこれは久しぶりにショックを感じているようだ。
「ふむ。そんなにショックを受けるとは思わなかったよ。仕方ないね。かわいい弟の為に、この兄が一肌脱ごうじゃないか」
「さすが兄様です。実に頼りになるお方ですね」
「この僕でも、この立ち直りの速さは驚きを隠せないよ。まあ、それも嫌いじゃないけれど」
「そんな事は、どうでも良いです。具体的にどうするのですか?」

「相変わらず性急だね。まあ、簡単に言うと無いなら自分で調達してくれれば良いじゃないか。まあ、普通の仙道なら許可が必要だけれども、僕はちょうど外に行く仕事が有った所さ」
「なるほど。それに同行して、御馳走が食べたければ自分で材料を調達しろと？」
「まあ、そんな所かな。ちなみに、行くなら空と山と海のどこが良いかい？」
「山です。他の選択肢はありえない」
「即答だね。そっか山か。ちょっと行く予定の山には竜はいないけど良いんだね？」
「いや、居なくて良いです。海で魚や、空の鳥とかも少し良いかなと思ったけど、能力下がるから選択肢から外して正解でしたよ。まさか選択していたら竜を狩る事になるとは思ってませんでした」
「ノンノン。御馳走を食べたいと言ったのは正大だろう。なら素材は最高を狙うべきだと僕は思うよ」
「何事も限度があります。何回も何度でも言いますが」
「まったく我儘だね。雲霄達を見習って欲しいものだ」
むしろ、兄様が御姉様達を見習うべきじゃないかと思ったが、口から出る前に思いとどまった。
今は、兄様の職権乱用で外に行けるのだから、機嫌を損ねさせて気が変わられたら困る。
なので、日取りが決まったら教えてくださいと言って部屋を出ようとした。
「じゃあ、さっそく今から行こうか」
うん。たぶん兄様も俺にとやかく言えないくらい性急なんじゃないかと思う。
そして色々と準備を終えて、いつもの気球乗り場に来ているのだが、さっそく抗議したい事が出てきた。
「兄様。俺は、何故ロープでまた縛られているのでしょうか？」
「ほら、せっかく出かけるのだから、例の修行を再開しようと思ってね。正大も成長しているだろうから目指せ記録更新って所かな」

「いやいや、この修行って命懸けだし、目的地についても疲れて狩りにならないよ」
「なら見事に成功させるしかないね。姚斌の所で基礎は習ったのだろう？なら今度こそ逝けるさ」
「ちょっと待って。なんかニュアンスがおかしくなかった？ねえ？もしかして、今度は落とすつもりですか？」
兄様は、楽しそうに笑うだけで何も答えてくれなかった。
そして、気球はつつがなく空の旅に出発する
俺は、さっそく兄様を頼った事を後悔した。
「ちょっと兄様返事してください。本当にシャレにならないですから」
空での修行が始まったが、基礎的な修行をしたおかげか前よりは楽に出来るようになっていた。
楽と言っても気を抜いたらヤバいレベルなのだが。
そして、俺がこんなにも慌てているのは時間が夜になり、定期的に声をかけてくる兄様が静かになったからである。
もしかして寝ているなんて事は無いよね？
もし寝てた場合、今ロープが切れたら確実に落ちる。
さすがに達人でも、寝てる状態から俺を引き上げられるとは思えない。
ここはジョークで静かにしている可能性に賭けても良いのだが、掛かっているのは自分の命だ。
「まさか寝てたりとかしませんよね？本当に寝るなら引き上げてからにして貰えませんか？」
俺は大声で叫び続けるが、現実は無情だ。
返事は無い。
あ、これは絶対に寝てるパターンだ。
そして、俺の絶対に気が抜けない戦いが始まった。
ブツラクアウトしていた意識が戻り、俺は飛び起きた。
なんだ夢か。
ロープが切れて気絶したなんて無かったんだ。

「残念ながら現実だよ。まったく、精神的に余裕がある時は安定していたのに、少し揺さぶりをかけただけで脆くも崩れるなんて、まだまだ修行が足りないね」
「え？ここはどこ？」
「目的地の近くに到着したよ。かなりグッスリだったし、地面に接してたらから少しは回復したかい？」
　ああ、通りで地面にいる安心感がある訳だ。
　あの戦いが始まってから、助けが無いかもと疑心暗鬼になった結果集中力が途中で乱れたのだろう。
　すぐに限界が近くなり、俺は二回目のロープが切れる音を聞いた。
　そして、情けない事に気絶したのだろう。
　いや、言い訳させて貰うと、こんな無茶な修行が悪いのだ。
　そしてギリギリな所を揺さぶりをかけるヤツが悪いのだ。
　つまり俺は悪くない。
証明完了(QED)である。
「いつでも助けがあるとは思わない方が良い。今回も僕が声をかけている間は、危険な修行だと言うのに妙に安心している風に感じたよ。次からは、もう少し気合を入れて頑張るように」
　いや、危険な修行ならしたくないのですが。
　でも、一度助かったので、妙な安心感が有ったのは確かだ。
　気合も初回に比べて入っていなかったかもしれない。
　それに、いつでも平常心でいられる訳でも無いので、むしろ危険を感じてからが修行の本番だったのかも？
　あれ？なんか少し感覚がマヒしてきている気がする。
　とりあえず、安全に関してだけは抗議を入れておこう。
「ところで、もう動けそうかい？目的地の近くに着いたから、さっそく御馳走の材料集めに入らないかい？」
　そうでした。
　今回は、御馳走を求めての旅だったのだ。
　さっそく獲物を探しに行かなければ。
「うん。しっかり成長しているみたいだね。今回は動けるだけの元気

がありそうだ」
「ええ、御馳走が俺を待っているのです。さっさと獲物を探しに行きましょう」
俺は、緩慢な動作の兄様をせかしながら、山へと向かった。
しかし、この山は何か変だ。
少し捜索を開始して、違和感を感じた。
自然の中にしては静か過ぎるし、他の生き物の気配がない気がする。
まあ、俺に野生の直観や、生き物の気配がはっきりと分かる訳じゃないので気のせいだと思いたい。
ちょっと嫌な予感がする。
しかし、その予感が当たっているのか探しても獲物は見つかる事は無かった。
ちょっと待って、こんなに苦労して遠征したのに成果無しで帰る事になるなんて勘弁して欲しい。
必死に探したが、やはり見つからない。
泥臭いから少し敬遠していたが、最悪川魚でも良いかと川辺に行ったのだが、魚すら見当たらない。
実に最悪である。
兄様の言葉を借りると、まさにアンニュイだ。
見つからないのは仕方ないので、今回は諦める事にしよう。
兄様には、さっさと仕事を終わって貰って、もう帰りたい気分である。
そんな事を考えていると建物を見つけた。
近くに行ってみると御食事処と看板が付けられており、店先にあるメニューボードの貼り紙に目がいく。
「ここは注文の多い御食事処です。どなたでも遠慮なく中へお入りください」
なんか見覚えがあるし、嫌な予感しかしない。
「正大。獲物が見つからなくて御馳走が食べられないと落ち込んでいたし、ここに入って何か食べて行こうか。いやー、獲物が取れなくて

不運だと思ってたけど、こんな所に御食事所が有るなんてラッキーだったね」

改めて言おう、嫌な予感しかしないと。

御代はいかほど？

たぶん危険なので兄様を説得する事にした。
「御馳走とかもう良いですから、さっさと兄様の仕事終わらせて帰りましょうか」
「急にどうしたんだい？あんなに食べ物に執着していたのに。でも、今回はこの辺りに住んでいる仙人に用が有ってね。たぶん、ここだと思うからどの道入らないって選択肢はないよ」
「え？こんなに殺る気満々な場所に入るって正気？」
「別に見た所高級店って訳ではなさそうだし、そこまで敷居は高くないように見えるから、そんなに尻込みしなくても平気さ」
「いや、別に尻込みしてるとかじゃなくて」
「どの道入る事になるんだから、食べて行った方が良いと思うのだけど？」
その後、色々と話し合ったが結局入る事になった。
兄様は、大丈夫大丈夫と言いながら建物のドアを開き入っていく。
何が有っても問題無いと自信があふれているように見える。
俺は、置いてかれないように慌てて後に続いた。
扉をくぐると、入店を知らせる鈴の音が鳴り響くが、これが侵入者を知らせる警報に感じるのは、俺の心がすさんでいるからだろうか？
まあ、すさんだ心の目で店の内装を見てみると、普通の旅館にありそうな玄関だ。
そしてすぐ目の付く場所に立て札が有った。
「ここは土足厳禁となっております。靴をお脱ぎになって、右手側に見える靴箱にお入れください。また、足が汚れている方は近くにあるタオルを使って汚れを落としてください。それが終われば正面の扉へお進みください。色々と注文が多く煩わしい思いをさせてしまいますが、どうか最後までお付き合い願います」
「どうやら注文が多いのは、メニューが多いって訳ではなさそうだね。逆に予約が多くて待たされるパターンも有ったけど、これなら心配ないね」

そう言って兄様は、靴を脱ぎ靴箱へ収納した。
俺としては、さっそく靴が人質に取られた上、外の舗装されてない砂利道を裸足で走るのは痛いそうだなと思った。
そして先へと進む兄様の後に続いて次の部屋に入った。
また、立て札がある。
〔まずは手をそこの水道で洗いましょう。清潔さに自信のない方はシャワールームも用意してあるので遠慮なくご利用ください。〕
「確かに食事の前に手を洗うのは基本だね。しかし、野郎のシャワーシーンなんてサービスにもならないだろうし、僕は清潔感には自信があるんだ。ここは手を洗うだけにして先に進もうか」
野郎のシャワーシーンは必要ないのは同意である。
そして、女性で有っても姉様達のサービスシーンは激しく遠慮したい。
しかしながら、これは自分から洗って貰えると調理する側からしたら楽になるって事だよね？
穿った目で見過ぎかな？
兄様は何も思ってないみたいだし。
おっと余計な事を考えていると置いてかれる。
こんな場所で一人になるなんてゴメンなので、急いで追いかけよう。
〔武器をお持ちの方に食事を御出しする事はできません。右手側に見えるコインロッカーにしまってください。鍵は無くさないようお願いします〕
「うーん。まあ、話し合いに来たのだし、食事中に武器を持ちだすのも無粋か。ここは指示に従おう」
あからさまに露骨な武装解除が来ましたよ。
え？縛竜索だけじゃなくて、金蛟剪もしまっちゃうの？
ちょっと考えなおして欲しい。
兄様は自分の強さに自信があるのだろうけど、それは無いと思う。
すぐに次の部屋に行かないで！
もう一度話し合おう。

絶対に罠だって。
この自信はどこから来るのだろうか？
是非とも教えて欲しい。
そして、それが俺を安心させる根拠ならば、隠さずに教えて欲しいものだ。
とりあえず、俺だけここに留まる訳にもいかないので次の部屋へ向かった。
〔料理が出来たらベルでお知らせします。しばらく、そこの椅子に座ってお待ちください。ベルが鳴ったら次の部屋へどうぞ。お待たせしている間に、ドリンクバーはいかがですか？どうぞ自由にお飲みになってください〕
「へぇ。なかなか気がきくじゃないか。待っている間に頂くとしょう」
兄様は、椅子に座りながら優雅にティーブレイクを始めた。
飲んでいる物は色々な物を混ぜたブレンドだけど、すごくチャレンジ精神があるよね。
じゃなくて、料理の準備って向こうは戦闘態勢に入ったって事だよね？
相手に準備する時間を与えて、こんな所でゆっくりとしていて大丈夫なのか？
俺は、とてもそわそわしながらベルが鳴るのを待った。
だって、処刑執行を待つ食材の気分がしたから。
しばらくしてベルが鳴った。
兄様は、意外と早かったと言いながら次の部屋へと向かう。
え？ここは慎重に行くべきじゃないの？
そう思いながらも、兄様の後をおっかなびっくりと警戒しながら次の部屋に入った。
そこには美味しそうな料理が並べられており、またいつもの立て札が有った。
〔どうぞ、ごゆっくりとお召し上がりください。次の部屋にデザートを準備中です。またベルが鳴ると準備完了の合図でございます。し

かし、急がせる訳ではないので、御食事中ならば慌てて向かわなくても問題ありません」
「おお、実に美味しそうな料理じゃないか。しかし、ここの主はシャイなのかね？いっこうに姿を見せる気配がないのだが。まあ、だけど目の前に料理があるなら、まずは頂こうじゃないか」
まさか本当に料理が出てくるとは思わなかった。
ここで戦闘になると思っていたのだけど、予想がハズレて少しだけ緊張がほぐれる。
俺が心配し過ぎなだけで、ここは本当に食事を提供しているだけの場所なのだろうか？
そんな悩みを無視するように、兄様は食事を続けて上機嫌に言った。
「うん。なかなかの料理の腕じゃないか。金鰲島には、料理ができる者がほとんどいないからね。きっと彼を連れて帰れば皆喜ぶよ。材料が無いってのは勿論だけど、全員に料理が行きわたらないから金鰲島で支給されるのは謎肉になってるんだ。でも、料理人が増えれば、それは解消されるかもしれない」
なんと毎日変わりばえのしない味の謎肉しか出て来ないと思っていたら、そんな理由が有ったとは。
これは是が非でも、料理人を連れて帰ろう！
そんなこんなで、会話を続けているとベルが鳴った。
そして、次の部屋に向かうと切り分けられたアプッルパイとお馴染の立て札。
〔料理は満足して頂けましたか？次は、当店自慢のアップルパイをお召し上がりください。そして御代の方なのですが、お金なんて無粋な物は請求いたしません。次の部屋と、次の次の部屋で簡単なお願いを聞いて頂ければ、けっこうです。では、お待ちしております〕
「うん。自慢と言うだけ有って、かなり美味しいじゃないか。これはお土産に包んで貰えないかな？これは是非ともシェフに会わねば」
え？もう食べたんですか？
デザートが準備されていたのにも驚いたけど、簡単なお願いっての

が嫌な予感がする。
兄様は能天気に次の部屋に向かって行くが、俺はやっぱりと思いながら痛い胃を抑え兄様の後に続く。
次の部屋に入ると、何かの液体が入った大きな容器と、白い粉が入った大きな容器と、いつもの立て札が有った。
〔まずは黄色い液体に浸かってから、白い粉にダイブして満遍なく粉を体に付けて次の部屋にお進みください〕
「この液体は、溶き卵ようだね。そして、この白い粉はパン粉かな？」
兄様は、触ったり口に入れたりしてそれが何かを確かめている。
なぜそう物怖じせずに口に入れられるのか聞いてみたい所だが、そんな事に思考を割いている暇はない。
やっぱり、ここの主人は俺達を料理する気だったのだろう。
次の部屋からは、油の匂いと何か液体が煮える音がする。
「だから言ったじゃないですか。これは罠だし、殺る気満々な相手だって。急いで引き返しましょう」
そう言って、俺は入ってきた扉に振り返ると、そこに貼り紙が有った。
〔お客様。食い逃げは犯罪ですよ。そんなお客様は足元にご注意ください〕
その文字を見た途端に、俺と兄様の足元に何かの模様が浮かび上がる。
これは何かと疑問に思ったがすぐに答えは分かった。
兄様の足元から、物凄い火柱が上がり炎に包まれたのである。
その炎は消える事もなく延々と燃え盛り、俺を恐怖させるには十分な光景であった。

これは天罰だと思います

拝啓。
炎上している兄様へ。
絶対に罠だと主張したのに聞き入れないから言わんこっちゃない事になってるじゃないですか。
あと、俺が食べるの我慢してるのに美味しそうに食べたり、俺の分のアップルパイも食べたから、これはきっと天罰だと思います。
違う違う。
あまりにもビックリしたから現実逃避して帰って来れない所だった。
とりあえず俺の足元からは火が噴出してないけど、いつ炎上するか分かったもんじゃない。
しかし、これ一人しか燃やせないのかな？
あっちは、まだまだ凄い火力が出てるけど、こっちはなんともないし。
だけど、いつまでも足元の模様の中にいるのは嫌な感じがするので移動しようか。
え？何この模様追いかけてくる。
とっても怖いんですけど！
そうこうしていると、次に進む扉が開き男女の話し声が聞こえてきた。
「やはり、こんなお願いを聞いてくれる者などいないですね」
「ええ、私もそう思うけど、この火炎封印を作動させる仕上げに必要なことだから」
「そうですね。実際に、あの指示に従って次の部屋に来られたら逆に困る所でした」
術が作動したから、こいつら様子を見に来たのか。
男も女も体の大事な部分も包帯で隠しているだけの大胆な格好である。
まあ、俺も蔦でグルグル巻きな服装だから人の事は言えないが。

しかし、一番の特徴はお互いの手を包帯で繋いでことだろうか？
だけど自由な方の手にも、足にもバンテージよろしくグルグル巻きである。
包帯が原形なのだろうか？
とても料理をする人には見えない。
「しかし、カウント六は火力が違いますね」
「ええ、普通の相手であればカウント二か三あたりで致命傷ですし、これなら骨も残さず無に回帰することでしょう……」
あ、男の方と目が合ってしまった。
部屋の角で空気になる事を努めていたのに、やはり遮蔽物が無いと隠れるとか無理ですよね。
うん。時間稼ぎにもならないと思うけど、ここは普通に挨拶して話し合いで解決できないか頑張ってみよう。
可能性がゼロじゃないなら、やる価値はあると信じたい。
「はじめまして。妖ゲッの趙正大です。以後お見知りおきを」
「え？これは丁寧に、私達は白礼（はくれい）です。ようこそ御客人」
戸惑われたけど、普通に挨拶を返してくれたよ。
もしかしたら良い人達で、話し合いに期待を持って良いですか？
しかし、息がぴったりだった。
双子だと思ったら二人とも同じ名前なんですね。
名付け人が手抜きしました？
待て、余計な事を考えてないで、この状況を打開する手を考えねば。
でも、何も思いつかない現実は無情だ。
とりあえず、ヨイショしておこう。
「良い店ですね。料理の腕も兄様が褒めてましたよ」
「兄様？あなたは、もしかして噂に名高い趙公明の弟ですか」
「ええ、まあ、そんな感じで」
「じゃあ、あなたもあの手紙を読んでここへ？」
男の方に、そう言われたが手紙なんて心当たりがない。
ここは正直に言うべきか、知ったかぶりをするべきか悩む。
えーと、どっちが正解？

「その様子だと知らないみたいだね」
「そうね。何も知らずにここに来たのなら可哀想だし教えてあげて」
あ、考えてる間に時間切れですか。
答えないが正解だったとは。
しかし、何を教えてくれるのだろうか？
「だいぶ前に、趙公明から手紙が来たのだけれども、その内容が金鰲島に下るか、ここから立ち退けって内容でね」
ちょっと兄様。
なんて上からな手紙送ってるんですか。
まるでヤクザか地上げ屋みたいじゃない。
しかし、その郵便屋さんは手紙の内容知らなかっただろうな。
知ってたら普通渡せないし。
「あまりにも腹が立ったから、金鰲島の使者を殺してやろうと思ったのだけど」
あ、やっぱりな反応ですね。
金鰲島の郵便屋さんって危険なお仕事だったのか。
とりあえず、自立しても郵便局への就職は止めておこうと心に誓った。
「こんな小物を殺しても意味ないと思ってね。料理でもてなして、金鰲島に下りたいけど立場や待遇について話し合いたから来てほしい。足を運んで貰うから精いっぱい御馳走でおもてなしするって感じの下手（したて）な手紙を届けて貰った」
あ、兄様の自信はこれだったのか。
もう、相手は傘下に入るものだと思っていたし、事前におもてなしがあると分かっていたから御馳走が食べたいと言い出した俺をここに連れてきた訳だね。
うん。実に有難迷惑です。
もしかしたら、普通に竜狩に行ってた方が楽だった気がする。
「そしたら、あなた達が来たと言う訳です。つまりお分かりですか？」
「えーと、俺は帰っても良かったりします？」
「あんな舐めた手紙を送っておいて、この白礼の領域にノコノコと

やって来る者など生きて帰す訳がない。さあ、何も知らず無に回帰するのを憐れんで教えてあげたのです。心残りはないでしょう？」
いえいえ、普通に心残りしかないのですが。
やっぱり戦うしかないのね。
しかし、冥土の土産に時間をくれるなら後百年くらいサービスしてくれませんかね？
話してる途中で、炎が消えて兄様が出てきてくれないか期待してたけど無理だったか。
「術は正常に作動してるのに炎上してない理由が分かった」
「実は、コイツが趙公明で私達の術を跳ね除けたのかと警戒していたのだが杞憂に終わったな」
「ええ、だってコイツ土足だもの。きっと指示を全部無視したからカウントがゼロなだけ。しかし、指示に従わないと進めないようになってた思うのだけど」
「恐らく炎上している方が全ての指示に従ったからだろう。まあ、この領域の改良は後で考えるとしよう」
そして俺の一挙一動を警戒するよな目つきに変わった。
俺も相手の動きに注意を向ける。
それにしても、張紹さんの講義で相手の領域に入った場合の注意点を聞いた事があって良かった。
相手に指定の行動をさせたり、条件を満たすと発動する術があるって話を。
まあ、逆にルールを破ったり、その領域にいるだけで発動するのもあると聞いてたけど領域の難易度としては、こっちの方が難しいから俺は兄様と話し合って指示を無視する事にした。
たぶん、あの炎の具合から俺なら即死だったので、その選択は正解だったと思う。
だけど、本当の正解は領域外から金蛟剪で破壊する事だと思ったけど、相手が事前に帰順する意思を示す手紙を送っていたから兄様にその選択肢は無かったのだろう。
気まぐれなんだろうけど、相手は使者を殺さない事で本当に良い手

を打ってきた。
最初から敵対してたなら、兄様だってもう少しは警戒してただろうし、俺も安全だったと思う。
「おや？来ないのですか？」
「では、こちらから行きますよ」
「「燃えたまえ！」」
二人が手をかざすと、そこから火球が飛び出してきた。
やっぱり炎系の術者ですか。
俺とは相性が悪いです。
帰りたいと思いながら、全力で避ける。
そして着弾点が燃え上がるが、兄様を燃やしている炎程の威力は無さそうだ。
やはり、条件を満たしてないとあの火力は出せないみたいで少し安心。
でも、自分の家に平気で火を放ったりして頭大丈夫かと訴えかけたかったが、この領域自体が火に強いらしく焦げ目も付かず、火も建物自体に燃え広がる事もなく、その場所だけが燃えていた。
俺が避けまくる事で、家が炎上して相手が火を使うのをためらう状況になって欲しかったが、無理そうである。
こうなったら倒すしか無さそうだが、俺が得意とする植物での拘束は無意味だろう。
相手は、この建物と同じく火に耐性がありそうだし、すぐに燃やされてしまうのが目に見えている。
ここは、姚斌さんに見本として貰った札に頼ることにしよう。
「くらえ。破壊の呪符よ」
俺は、相手に全力で札を投げつけた。
「「愚かな。自ら何をするか教えるとは」」
すると白礼は、放射状に炎を出した。
満遍なく放たれた炎は威力も距離も火球より無かったが札が効果を発動する間も与えずに焼き払う。
「まあ、そうなるよね。でも、本命はこっちだ」

さっき話している時に壁に貼り付けた呪符を爆発させた。
燃やされるのが分かっているのに貴重な呪符を相手に投げるやつがいるものか。
それは俺が量産している何の効果も無い呪符だ。
まあ、自身のエネルギーを使っているので、普通の紙よりは思ったように飛ばせるのでブラフ用に持っていて良かった。
「「貴様。何百年もかけて築いた私達の領域を！絶対に許さん」」
「じゃあ、俺は逃げさせて貰おう」
そう言って俺は、開けた穴から隣の部屋へと駆け出した。
この領域内にいたら、俺もいつカウントが貯まってもおかしくないので脱出を優先する事にした。
兄様？へいきへいき。
あの人ならきっと無事だから。
俺は自分の事だけで、精いっぱいなのです。
きっと涙ながらに謝れば許してくれるよね？
そして俺が駆けこんだ部屋は、兄様が料理を食べていた部屋だった。
となると、あっちがドリンクバーがある待たされた部屋で、その次がコインロッカーの部屋だな。
ん？そうだ。
縛竜索と金蛟剪を回収して来よう。
俺に扱えるかは謎だが、この状況を打破できるかもしれない希望が見えた気がする。

目に見える落とし穴にはまるヤツってどう思う？

あの怒り具合だと、すぐにでも追いかけてくると思ったのだが、そんな気配もなくコインロッカーの前に無事に到着。

しかし、いつまでもノンビリとしていられないので、兄様の宝貝を急いで回収しなければ。

今回は、属性的にも相性が悪いし兄様も、何やらピンチみたいですし、緊急事態なのでウッカリ宝貝を使ってしまう事は不可抗力なのですよ。

前々から使ってみたかったから、丁度良いとか全然思ってませんから。

いえ、ほんの少しだけ、本当に少しだけど、楽しみにしてる自分がいますとも。

ほら、強力な兵器を使って無双するとか憧れたりとかしません？

まあ、そんな事はその辺に置くとしてコインロッカーを開きたいんだけど、鍵が無いんだ。

もう一回言うと、鍵が無いんだ。

重要な事だから繰り返したけど、鍵は兄様が持ってるんだ。

試しに、壊せないか殴ってみたけど痛かったし無理だった。

目の前にお宝があるのに手に入らないって状況って、今日はそんなのばかりだよ。

さっきも御馳走があるのに食べられなくてお預け状態だったし、苦労して狩りに出かけたら成果ゼロだし、災難にも程がるよ。

まあ、料理に関しては、俺の分は兄様にタッパーに詰めて貰ったから、後で食べられるけど……まって、そのタッパー兄様ごと燃えてるよね？

白礼だったかな？

マジで許さん。

このまま宝貝は諦めて逃げようかと思ったけど、ここは意地でも一矢報いる事にした。

俺が持っている最後の呪符をここで使う。

確実に使えるアイテムだから、もしもの為に温存しておきたかったけど、これは使うしかないね。
俺は、恐らく鍵が掛かっている部分に呪符を貼り付けた。
破壊の範囲は最小に威力は高めで、いや最大にしようか。
中途半端に中身を気遣って使った呪符を無駄にするとか泣けてきますし、もし中身が逝っちゃっても「おのれ白礼め。なんて仕打ちを！」って言って誤魔化そう。
よし、そう考えると全力で最大威力にプッシュだ。
失敗した時のことは、失敗してから考えれば良いのだから。
そう決心すると早くも、札が破壊音を立てて弾けた。
範囲を小さくしていただけに、上手く鍵部分だけが破壊できたみたいで一安心。
いつもなら楽観的に決行したら失敗率が高く、今回も破壊できないか中身諸共のどちらかだと思ってけど成功して本当に良かった。
特に後者だった場合、冷静に考えてみたらシャレにならなかったよね。
まあ、成功したからなにも問題ないはず。
ではでは、宝貝とご対面。
俺は、扉を開くと同時に炎に包まれた。
ちくしょう。
うかつだった。
変な模様は相変わらず俺をロックオンしていたけど、まさかコインロッカーの扉を開いただけでカウントが貯まるとは思わなかった。
コインロッカーは、あくまでも武装解除が目的だと思っていたけど、もしかして一部屋で一つカウントが貯まる仕組みがあるのかもしれない。
しかし、兄様からバリアの術を習っていて良かった。
これが無ければ大ダメージでしたよ。
でも、これ長く持ちそうに無い。
カウント一でこの火力だと、カウント六だとさすがの兄様もバリア張るのに集中する為に身動きできないよね。

やはり、この状況を打破する為には、宝貝に頼るしかないか。
この火力でも二つの宝貝は無事だったので、俺は金蛟剪を手に取った。
うん。失敗でした。
力が抜ける。
バリアが解けて、本格的に炎に包まれた俺は悶え転がった。
それでも、模様は俺を追いかけて執拗に焼きを入れてくる。
金蛟剪を手放した事で、少し力が戻った俺は再度バリアを張り直して、なんとか持ち直した。
なぜ縛竜索の方にしなかったのかと凄く後悔するが、転がった為にその縛竜索から遠ざかってしまい手が届かない距離に。
あれ？これもしかして詰んだ？
そんな事が少し頭によぎったが、バリアで耐えるしかないと気合を入れ直す。
これは、俺とこの炎の持久戦になると、そう思っていたら突然炎が消えた。
勿論困惑する俺だが、そんな余裕はすぐになくなった。
天井が崩れて、そのガレキが圧倒的な質量でもって押しつぶそうと迫ってるからだ。
おのれ白礼め。
いくら俺に怒ってるからって、自分の住処であるこの建物ごと俺を潰そうとするのはどうかと思います。

ｓｉｄｅ???
一方その頃。
白礼は、領域の一部を破壊された事により激高していた。
「「許さんぞ。すぐに追いかけて燃やし尽くしてくれる」」
しかし、趙正大を追いかけようとしたが動きが止まってしまう。
「待ちたまえ」
急に声をかけられたからだ。
自慢の炎は、相変わらずの火力を放っており、これに包まれている

なら無事で済むはずが無い。
しかし、ある事に思い当たる。
対象が消滅したのなら、この炎は収まってもおかしくないはず。
なのに、炎はその力を変える事なく燃え続けている。
つまり、趙公明はまだ生きているのだ。
「この僕を放って、どこに行くつもりだい？」
今度は、はっきりと炎の中から声が聞こえた。
噂に名高い趙公明なら術から逃れてこの部屋に潜んでいる可能性も思い浮かべたが、とんだ杞憂である。
彼は確かに生きているかもしれないが、今はカウント六の歴代から見ても最大火力に捕らわれて身動きが出来ていないと再確認できたからだ。
「どこへ行くもなにも、あの無礼者を燃やしに行くだけですよ。生きているのには驚きましたが、さすがにこの火力では身動きも取れない様子。ならばアナタの相手は後でゆっくりとさせて貰いますよ」
領域によって生み出される炎の威力に絶対の自信があり、その言葉には余裕が感じられた。
しかし、彼らは噂でしか知らない趙公明を見くびり過ぎていたかもしれない。
「さっき正大が領域を爆破しただろう？その影響も有って術の精度が甘くなっているよ。これなら、あと少しエネルギーが落ちれば破ることなど容易い」
「何を言い出すかと思えば、私達の自慢の術を破るだと？それに、地脈を用いているのだ簡単にエネルギーが落ちる訳がない」
「地脈のエネルギーと言えど無限ではないよ。この火力を出すのにどれだけエネルギーを使っているのかな？このまま耐えていても破れそうだが、もし別の場所でこの術が発動したらどうかな？」
「ありえない。ヤツは、こちらの術にかからないように警戒もしていたし、あの火力を見てわざわざ術にかかる愚か者はいないだろう。早急にヤツを始末したら次はアナタの番です。そこで指をくわえて待っているがいい」

「正大は絶対に何かやらかしてくれる事を僕は信じているよ」
「「戯言を……」」
その言葉を発するかしないかの内に、別の場所で術が発動された。
白礼は自身の領域である為に、その事を察知したのだ。
そして、術を破るなどありえないと目の前の炎に注視した。
しかし、目の前の炎は変わる事なく燃え続け白礼の心に安堵の思いが満ちる。
「「やはり、ただの戯言。強がりでしたか」」
その言葉を待っていたかのように、炎がひときわ大きく揺らいでガラスが割れるように散っていく。
「ほらね。正大なら、必ず何かやらかすって言っただろう」
その言い方は自慢げだが、内容的には趙正大は抗議しても良い案件である。
敗訴は確実だが。
「「しかし、先ほどのアナタの弟を見るに、アナタも植物系のはず。頼りの武装や宝貝もここまで来た事を見るに置いてきたのでしょう？ならば炎系である私達に何が出来る？」」
そんな白礼の強がりを趙公明は鼻で笑う。
「舐めないでもらいたい。この僕が炎系の相手と戦った事がないとでも？そうだ。君達の術には、なかなか驚かされたからね。少しばかり本気を見せてあげよう」
そう言った趙公明の背後から、太い根のような枝のような物が出てきてうごめき出した。
ｓｉｄｅ　ｃｌｏｓｅ

はたしてこれは収穫と言えるのだろうか？

あたり一面にガレキが山のように散乱している。
その光景が、戦闘の激しさを物語るかのように、かつて建物で有った物は見る影もなく倒壊していた。
その周辺は、うっそうとした森なのだが野生の動物達の気配もなく、ただ静寂と木々のさざめく音が交互に訪れ一層の不気味さを感じさせる。
そんな雰囲気を破るかのように声が聞こえてきた。
「あー、死ぬかと思った」
思ったより間抜けた台詞しか出ない自分に脱力しそうになったが、すぐに気合を入れ直した。
なぜならば、まだ俺はガレキの山に埋もれているからだ。
炎が突然消えてくれたおかげで、植物の防壁が間に合ってガレキに潰される事は避けられたのだが、けっこう消耗しているらしくガレキの雨が降り終わった後も脱出できないでいた。
いわゆる救助待ちの状態だな。
俺としては、兄様が無事なのは疑ってはいないのだが、あの火力を見るとちょっとだけ心配になってくる。
なぜ疑ってないかと言うと、そうじゃないと俺が詰むから。
兄様になんとかして貰わないと、今この場所を白礼に放火されたら逃げようがないからね。
あ、思ったより不味い？
救助待ちとか消極的な事言ってないで、少しでも回復したら力を振り絞ってここから脱出しよう。
そう決心すると、外から声が聞こえてきた。
兄様か、白礼か判断する為に、俺は声をひそめて耳を澄ました。
「ふう。少しばかり本気を出したから、お腹がすいてしまった。しかし、手元の食料はこのタッパーに入った物だけか。まあ、正大には悪いが姿が見えないから頂いてしまおう」
ちょっと待って！

それ俺の分だよ！
兄様は、さっき食べてましたよね？
などと声を出すが、兄様には聞こえていない様子だ。
うがった目で見ると、聞こえていないフリの可能性も有るけど。
これはもう、回復待ちだとか救助待ちだとか言ってられない。
持てる力を振り絞り、このガレキを払い除けねば。
俺は、軽く瞑想して周囲からエネルギーを集めて、植物が成長するように力を入れた。
するとガレキの重さよりも、植物の成長による押し上げる力が勝り、ガレキの山が崩れる音を辺りに響かせた。
「やあ、正大。遅かったね」
ええ、本当に遅かった。
見事にタッパーは空であり、俺は両手を地に付けてへたり込む。
そして、抗議の声を上げようと兄様を睨んだが、言葉が出る事はなかった。
なぜならいつもなら、優雅さに気を遣っている兄様の服装が所々に焦げが目立ち、相手の攻撃を受けたのか複数の穴が開いたり破れてる場所が目立つ。
そして、極め付けは、いつもセットしている髪型が見事にチリチリになっていた。
ここまで色々と台無しと言うか、こんなにダメージを受けている兄様を初めて見るため驚く。
「相手はそんなに強敵だったのですか？」
「ああ、少しばかり油断していて最初の術を防ぐのが間に合わなかったからね。そして何か失礼な事を考えてるみたいだけど、チリチリになっているのは君も同じだよ」
その言葉に、俺は髪を触ると見事にダメージヘアーの手触りを感じる。
おのれ白礼。
御馳走を食べ損なったのも、ガレキに潰されそうになったのも、チリチリになってしまったのも、全部お前のせいだ！

そう思うと、彼らの所在が気になってくる。
「そして彼らは、どうしました？」
「ああ、眠っているよ。とりあえず、なかなか有望だから金鰲島に連れ帰る予定だよ。実力の差も見せつけたし、複数の仙人を相手取ってまで逆らう事はないと思う」
少しばかり倒してくれてないかと期待したけど、やっぱり兄様の実力だと生け捕りは余裕でしたか。
うーん、こうなってくると俺に手出し可能な案件では無いんだよね。
仕方ない、こうなったら過労者続出の宝貝部門にでも推しておくか。
「そうなってくると、金鰲島の為に働かせるんですよね？とりあえず、人手が足りてない宝貝部門に回しては？」
「うーん。僕としては、今回の領域と言うか陣地と言うか結界と言うか、その辺りが興味深かったから、まずはそっちの尋問が先かもしれないね。そして彼らは調理班に回したい所だね。まあ、人事に関しては通天教主様とゆっくり話し合ってみるよ」
そうか！
そういえば、料理ができるんだった。
うん。普通に適材適所で良いんじゃないかな？
金光さんには悪いけど、食べ物の質が上がるのは大事だからね。
まだまだ激務をこなして貰おう。
「さてと、ここで話してもしょうがないね。正大も見つかったし、さっさと帰ろうか。僕としては、急いで身だしなみを整えたいから帰りの修行は無しだ」
それは普通に嬉しいです。
ここまで散々だったからね。
帰りくらいは、ゆっくりしたいものだ。
そして無事に金鰲島にたどり着く。
何か有るかもしれないと、少し身構えていたのが馬鹿だった。
普通に休んでおけば良かったよ。

そして、白礼も途中で起きたのだが、空の上だと知ると大人しかった。
やっぱり、ここから落ちたらひとたまりも無いから仕方ないよね。
後日聞いた話だけど、白礼は宝貝部門の補助要員に据えられる事になったらしい。
金光さんは喜んでいたけど、食事の質が上がらない事から素直に祝えなかった。
また、謎肉の日々が続くと思うと少し憂鬱である。
兄様も、また仕事が忙しいらしく、狩りに行く機会もお預けだ。
つまり、俺の御馳走は、まだまだ先の話になりそうで泣ける。
次の行先は、空だろうか？
海だろうか？
できれば山が良いのだけど、またとんでもない相手が出てくる可能性も有って悩ましい。
え？どれを選んでもハズレなら行かなかければ良いじゃないかって？
たぶん、その時は、その選択がハズレになるのだろうと考えて憂鬱になった。
張紹さんに運を向上させる術とかないかと真剣に相談する事にしよう。
もしくは、宝貝を作るなら、そういう方向の物を作ると心に決めるのだった。

閑話　出番が有ってもアンニュイ

ｓｉｄｅ　趙公明

机に積まれた山のような書類を前にため息をつく。

実にアンニュイだ。

これは罰(バチ)が当たったのかもしれない。

ああ、アンニュイなのは目の前の書類の山が原因では無いよ。

これくらいは、いつもの事だからね。

一般の業務はある程度レベルの高い仙人に任せる事ができるのだが、実質的に金鰲島の組織運営やら執務・事務作業や外交に関しては、僕と通天教主様くらいしか行える者がいないのが現状だ。

将来的には、幹部候補の育成にかからなければならないのだが、なかなかに理性的な仙人が少なく、そういった者も日々の業務や自身の修行で忙しかったりして時間が無かったりする。

まあ、今修行中の者達が成長して指導する側に回れば、そういった理性的な仙人を上に引き上げる事ができるのだが、そうなるまでには後数百年はかかりそうだと通天教主様との共通認識だね。

話がそれてしまったね。

罰が当たったと言ったのは、あんな出番しかない通天教主様を羨んだ発言をしたからかな？

その所為(せい)か、この僕にも出番が有ったのだけど、あれではタダの雑魚じゃないか。

何か僕に恨みでもあるのだろうか？

僕が欲した出番とは、主人公の前に立ちはだかる強大な壁であり、華麗なる戦いを演出する者であって、インパクトが強いからと単なる出落ちで使われる存在では断じてないのだよ。

並行世界の僕も、よくあんな仕事を引き受ける気になったものだと、ため息を禁じ得ない。

思えば、主人公の活躍も大幅にカットされてたり、無かった事にされている陳桐や魔家四将や雷震子など多くの存在に対する悪意を感じてしまうのは気のせいだろうか？

それを考えると僕だけにじゃなく封神演義に恨みを持つ者が背後に……おや、誰か来たようだ。
僕は、席を立ち扉を開いて、その存在を確認するとすぐに扉を閉じて元居た席についた。
すると扉の向こうから声が。
「兄様、いきなりな塩対応はなんですか？」
「なんとなく、こうした方がお約束かなと思ってね。鍵は開いてるから入ってきたまえ」
扉を開いて弟である趙正大が不満げな顔をしながら入ってきた。
「お約束っていったい何のことです？こんな対応は、初めてなのですが？」
「ああ、正大は気にしなくて良いことさ。それよりも、僕の所に訪ねてくるなんて珍しいじゃないか。いったい何の用かな？」
その言葉と共に重要な事を思い出したのか正大は真剣な顔になり熱く語り始めた。
「なになに？正大は御馳走が食べたいのかい？」
それが正解であるかのように、首を縦に振りまくる。
熱意は伝わったし、どれだけ御馳走を望んでいるか分かるが、そんな彼には酷な現実を言わなければならない。
「残念だけど、今は材料を切らしていてね。他の仙道達もその謎肉で我慢しているんだ。次の大規模な調達があるまでは、御馳走は無いよ」
最初はボーっとしてたので、聞こえなかったと思い同じ言葉を繰り返しそうとしたら、この世の終わりが来たような顔をして崩れ落ちた。
こんなにショックを受けているのは、初めてじゃないかな？
可哀想だとは思うのだけれども、完璧に人化した碧霄が思った以上に食べるので金鰲島の食料事情は正直に言ってピンチだ。
だからか他からも食に関しての要望が多い。
そのうちに大規模な調達隊が組まれるかもしれないけど、たぶん時間がかかると思う。

そうだ、僕は遠征に行く予定がいくつかあるので、その時にサクッと狩り行かないかと誘ってみよう。
僕の提案に正大は、一も二もなく立ち直る。
いつもの様にすがすがしい変わり身だが、今回はテンションの落差もあり僕も少し驚いた。
しかし、行く場所は山か。
竜とか食べられそうな大物はいないけど、訪問予定の場所は確か手紙によると御馳走でもてなすみたいな事が書いてあったね。
その事を教えて、狩りに対するモチベーションが下がっても困るので黙っておこう。
そして、大量に手に入った素材は、調達隊の士気を上げる為にそっちに大半回して貰えば、一石二鳥じゃないか。
ついでに、行きながら正大の修行もすれば三鳥なお得なプランだ。
これはもう今行くしかない、すぐに支度をせねば。
何、帰ってきたら書類が増えている事なんて些細な問題さ。
修行に関しては、思った以上に成長していたけど、ちょっとコンディション崩すと言うかメンタル攻めたら簡単にグラついてしまった。
これからは、ただ能力を上げるだけじゃなくて精神的な修行も追加していかないといけないかな。
しかし、回復力はだいぶ上がったかもしれない。
前なら動けるようになるには時間が、まだまだかかった気がするけど今は狩りに意欲が出せるくらいに元気なようだね。
しかし、この山はとても静かだ。
もしかしたら、この場所を狩りに選んだのは失敗だったかもしれないね。
なかなかにレベルの高い仙人が住んでるから、獲物は狩りつくしたか、恐れをなして逃げ果て近寄らなくなっているだけの可能性がある。
近寄るのは、鈍感な人間達とよそ者の妖怪くらいなものか。
そんな考察をしている僕を正大は、せかしながら山の奥へと向かっ

ていく。
まあ、頑張れば小物くらいは取れるかもしれないから、あまり落胆させるような事は言わないでおこう。
結果は分かり切っていたけど、やはり成果無しはキツかったらしく、正大はもう帰りたい雰囲気を出していた。
まあ、とりあえず相手方のもてなしに期待するかな。
そこで何か良いものでも食べられれば、正大の事だからコロコロと態度が変わるだろう。
そして、しばらく探索を続けると建物が見つかった。
何かに引き付けられたような気もするけど、相手もそれなりの仙人なら誘導してきてもおかしくはないね。
建物は、思ったよりも質素な感じで御食事処と書かれた看板と、店先にあるメニューボードが特徴と言えば特徴だけど、普通の建物に見える。
そしてメニューボードにはメッセージが。
「ここは注文の多い御食事処です。どなたでも遠慮なく中へお入りください」
正大は、その文字を読むと苦虫を噛み潰したような嫌な顔をしていた。
おや？こんなメッセージを見たら喜びそうなはずなのだけど、何かおかしな点でも有ったのかな？
「正大。獲物が見つからなくて御馳走が食べられないと落ち込んでいたし、ここに入って何か食べて行こうか。いやー、獲物が取れなくて不運だと思ってたけど、こんな所に御食事所が有るなんてラッキーだったね」
まあ、ここで何か食べられることは知っていたのだけど、ここは偶然を装っておこう。
そんな感じで、中に入ろうと誘うとさらに嫌そうな顔をした。
本当に、どうしたんだい？
いつもなら喜んで入って行きそうと思ったのは僕だけかな？
そして、色々と話し合うと、これは罠だから行きたくないと。

いつもなら餌に飛びついてから考える節がある正大にしては珍しく慎重な意見だ。
しかし、店先にある看板やメニューボードからは罠だと見抜けるような物は、何もないのだけれども。
それに、ここの仙人は金鰲島での身の振り方を考えているのか、自身の待遇について話し合いたいと手紙に有ったから、心配し過ぎな気もするのだけれども。
どの道、僕は行かないといけないから、ここで待つかとたずねると、ここで一人待つのは嫌らしい。
そして行くことになったのだけど、正大は相手の陣地に入るのだから俺は指示には従わないと言ってきた。
なるほど、行動を半々にすれば何かしら罠が有っても、全滅する可能性は減りそうだね。
正大にしてはよく考えている。
いや、ここは弟の成長を喜ぶべきか。
まあ、罠だとしても正面から打ち破れば問題ないと思うけど、慎重さは大事だからね。
扉をくぐると、涼し気な鈴の音色が響き渡る。
うん。なかなかに良い音じゃないか。
風流を感じさせる。
そして、目につく場所に立て札が有った。
〔ここは土足厳禁となっております。靴をお脱ぎになって、右手側に見える靴箱にお入れください。また、足が汚れている方は近くにあるタオルを使って汚れを落としてください。それが終われば正面の扉へお進みください。色々と注文が多く煩わしい思いをさせてしまいますが、どうか最後までお付き合い願います〕
なるほどね。
奥の扉から微弱だけど結界のような物を感じる。
恐らく指示に従わないと進めない仕組みになっているのだろう。
ここの主は、かなりの慎重派かマナーにうるさいと見た。
とりあえず、靴を靴箱へ収納すると、扉の結界が消えた。

思った通りだったので、先に進むことにする。
正大は、土足だったから進めるか心配だったけど、一人だけでも条件を満たせば問題ないようだ。
セキュリティとしては、どうかと思うけど、今は進もうか。
〔まずは手をそこの水道で洗いましょう。清潔さに自信のない方はシャワールームも用意してあるので遠慮なくご利用ください〕
おっと、次の立て札は、手を洗うか清潔にせよとある。
まあ、食事するなら手を洗って清潔にするのは当然だよね。
しかし、シャワールームまで準備するのは、いささかサービスが過ぎるような気もするが、スルーしよう。
〔武器をお持ちの方に食事を御出しする事はできません。右手側に見えるコインロッカーにしまってください。鍵は無くさないようお願いします〕
次の立て札は、話し合うのだから武器はしまおうって事かな。
まあ、後ろで正大が、絶対に罠だと言っているが、この指示に従わないと進めないので、もっともな事でも言って従おう。
それに、もし武器を封じた程度で勝てるなんて思い上がりをしているなら、相手はその浅はかさで後悔して貰うとしよう。
〔料理が出来たらベルでお知らせします。しばらく、そこの椅子に座ってお待ちください。ベルが鳴ったら次の部屋へどうぞ。お待たせしている間に、ドリンクバーはいかがですか?どうぞ自由にお飲みになってください〕
次は、待つようにと指示が有った。
とりあえず、ドリンクバーを使い椅子に座って一息入れていると結界が外れて先に進めるようになっていた。
わざわざ待つ必要があるのか疑問だけど、料理を作っているのなら時間はかかるだろう。
正大は、相手の指示に従わないと決めていて立って待たされているからか、そわそわイライラしているようだ。
そして、思ったよりも早くベルが鳴ったので、先に進むことにした。
正大は、さっきまで進めない事に苛立ちを覚えていたのに、いざ進

むとなったら足が重たいのかゆっくりと、おっかなびっくりな感じで追いかけてきた。
〔どうぞ、ごゆっくりとお召し上がりください。次の部屋にデザートを準備中です。またベルが鳴ると準備完了の合図でございます。しかし、急がせる訳ではないので、御食事中ならば慌てて向かわなくても問題ありません〕
その立て札と共に、美味しそうな料理が並んでいた。
どうやら、正大の予想はハズレそうだ。
しかし、意地になっているのか、料理を食べようとはせずにタッパーに詰めるように言ってきた。
まあ、自分で言い出した事は、なかなか撤回しずらいよね。
正大の分をタッパーに詰めてから、僕は料理を堪能した。
そんな恨みのこもった目で見るくらいなら、素直に食べたら良いと思うよ。僕は。
そして、正大は退屈なのか会話を持ちかけてきたので、色々と話しているとベルがなった。
次の部屋には、デザートのアップルパイとお馴染の立て札が有った。
〔料理は満足して頂けましたか？次は、当店自慢のアップルパイをお召し上がりください。そして御代の方なのですが、お金なんて無粋な物は請求いたしません。次の部屋と、次の次の部屋で簡単なお願いを聞いて頂ければ、けっこうです。では、お待ちしております〕
これは、なんてブラボーなんだ。
思わず正大の分まで食べてしまった。
それを誤魔化す為に、足早に次の部屋へ向かうとしよう。
その思惑通りなんとか誤魔化せたようだ。
次の部屋に行くと、何かの液体が入った大きな容器と、白い粉が入った大きな容器と、いつもの立て札が有った。
〔まずは黄色い液体に浸かってから、白い粉にダイブして満遍なく粉を体に付けて次の部屋にお進みください〕
ふむ。それぞれを調べてみると、溶き卵とパン粉だった。

それと、奥の部屋から油の匂いがする。
これは、僕達でカツでも揚げるつもりかな？
どうやら、正大の言う通りここの主は、やる気満々だったよだ。
正大は、目に見えて取り乱している。
先の扉からは、結界を感じ先に進むには、指示に従うしかなさそうだ。
それに、さっきら先に進もうとしていたのに、この演出は後退を促そうとしているように感じる。
これは、おそらく引き返そうとする行為が、何かのトリガーになるに違いない。
そして、正大に決して振り返っていけない、ここは先に進もうと言おうとしたら、正大が後退を始めた。
すると、僕と正大の足元に何かの模様が浮かび上がる。
これはしまったと思う間もなく、僕は炎に包まれた。
僕とした事が本当に油断していたと思う。
バリアを張るのが遅れたら、けっこうな痛手を負う所だった。
とりあえず、少しの火傷と髪の毛がチリチリになった事を除けば問題無い。
しかし、術にしては凄い火力だ。
地の理が有ったにしても、僕を動きを封じる火力があるのだから。
しかし、正大の勘は、正しかったみたいだね。
おそらく、正大ならこの火力に耐えられなかっただろう。
さてと、普通にこの術から抜けるのは骨が折れそうだ。
正大にどうにかして欲しい所だけど、どうやらここの主に遭遇したみたいだね。
呑気に会話しようと試みてるよ。
まあ、格上が相手だから仕方ないとは言え、ここは漢を見せて欲しいものだ。
しかし、白礼はそんな事を考えていたのか。
自身の力と金鰲島の力を比べたら勝てる訳ないのにね。
手紙を見た時には思ったより賢そうだと思ったけど、僕の過大評価

だったかもしれない。
あ、やっぱり思った通り戦闘になったみたいだね。
そして、激しい爆音と怒り狂う白礼の声が聞こえた。
たぶん、いつもの正大なら格上なんか相手にしてられるかと逃げ出すだろう。
そして、僕の宝貝がしまってあるのを思い出して、それを取りに向かい自分から罠のスイッチを押しそうだ。
おっと、怒り狂う白礼が正大を追いかけようとしているね。
「待ちたまえ」
急いで声をかけてみたけど、聞こえたみたいで良かったよ。
「この僕を放って、どこに行くつもりだい？」
本当に、この程度で僕を倒せると思っているなら困ったものだ。
とりあえず、僕が声をかけた事で白礼がうろたえる気配を感じたが、すぐに気を取り直して強気な台詞を言ってきた。
「どこへ行くもなにも、あの無礼者を燃やしに行くだけですよ。生きているのには驚きましたが、さすがにこの火力では身動きも取れない様子。ならばアナタの相手は後でゆっくりとさせて貰いますよ」
さっきの爆発で術の精度が落ちたのも気付いてないのか。
これは、本当に過大評価をしていた可能性があるね。
「さっき正大が領域を爆破しただろう？その影響も有って術の精度が甘くなっているよ。これなら、あと少しエネルギーが落ちれば破ることなど容易い」
「何を言い出すかと思えば、私達の自慢の術を破るだと？それに、地脈を用いているのだ簡単にエネルギーが落ちる訳がない」
「地脈のエネルギーと言えど無限ではないよ。この火力を出すのにどれだけエネルギーを使っているのかな？このまま耐えていても破れそうだが、もし別の場所でこの術が発動したらどうかな？」
「ありえない。ヤツは、こちらの術にかからないように警戒もしていたし、あの火力を見てわざわざ術にかかる愚か者はいないだろう。早急にヤツを始末したら次はアナタの番です。そこで指をくわえて待っているがいい」

「正大は絶対に何かやらかしてくれる事を僕は信じているよ」
「「戯言を……」」
その言葉聞こえると同時に、術の火力やらエネルギーが弱まる気配を感じた。
通常なら、同時に焼き払うから、領域を破壊されることもなかったのだろうし、時間差で術が発動して力が弱まる事もなかっただろう。
だけど、今回は正大の慎重さとウカツさが良い感じに働いたおかげで、僕はこの術を楽に破る事ができる。
「「やはり、ただの戯言。強がりでしたか」」
お、この台詞に合わせて術を破った方が、演出に華がある気がする。
その言葉に合わせて術を破ると、炎はガラスが砕けるように散って消えていった。
「ほらね。正大なら、必ず何かやらかすって言っただろう」
これで、僕との実力差を理解できたと思うのだけれども。
しかし、白礼から出た言葉は違った。
「「しかし、先ほどのアナタの弟を見るに、アナタも植物系のはず。頼りの武装や宝貝もここまで来た事を見るに置いてきたのでしょう？ならば炎系である私達に何が出来る？」」
その言葉に落胆を覚え、思わず鼻で笑ってしまった。
君達の自慢の術でさえ僕を倒せなかったのに、逆に君達に何が出来るか見てみたいものだ。
「舐めないでもらいたい。この僕が炎系の相手と戦った事がないとでも？そうだ。君達の術には、なかなか驚かされたからね。少しばかり本気を見せてあげよう」
半妖態になるのは久しぶりだ。
とりあえず、君達にはシンプルな力と言うものを見せてあげよう。
「「何を見せるのかと思えば、ただの半妖態ですか。それでは燃えやすくなっただけですよ。塵となりなさい」」
そう言って白礼は、火球を飛ばしてきた。
やはり、先ほどの地脈を用いた術に比べたら大した事のない火力だ。

僕は、飛んできた火球を背後からはやした植物で握りつぶす。
「何？燃えるどころか消されただと？」
自身の炎が通用しなかった事から、白礼は目に見えてうろたえた。
「次は、この厄介な領域を破壊してみせよう」
「な？待て。止すんだ」
僕は、白礼の静止も聞かずに、枝や根を展開して建物突き破ると、建物が音を立てて倒壊し始める。
あ、しまった。
この建物内には、まだ正大が居るんだ。
うっかり忘れてた。
まあ、正大ならきっとたぶんなんとか無事だろう。
おそらく笑って謝れば誤魔化せるよね？
そんな中、自身の心の拠り所で有った領域を破壊された白礼は、信じられないものを見たかのように茫然自失としていた。
そして、僕が動きに反応して、おびえた様子を見せる。
「待て。来るな」
「これで力の差が分かっただろう？まあ、金鰲に連れて行くにしても煩かったり暴れらると困るから、君達には眠って貰おうか」
そう言って、僕は白礼の意識を刈り取った。
しかし、油断していたとは言え、思ったよりダメージを受けてしまったね。
僕もまだまだ修行が必要と言うことか。
そう、思いながら半妖態から人型へと戻る。
ふむ。せっかくの衣装が台無しじゃないか。
この借りは高く付くけど、別に恨んだりしないから安心して欲しい。
これも戦い中で有ったことなのだから。
しかし、思ったよりもガレキの山が出来てしまった。
正大は、こんなのに埋もれて無事なのだろうか？
それにしても、力を使ったからお腹がすいてしまった。
正大には悪いけど、このタッパーに入った料理を食べさせて貰お

う。
そんな感じの独り言をつぶやくと、どこからか正大の叫び声が聞こえてきた。
やっぱり無事だったと信じていたよ。
そうやって、弟の無事を喜ぶ僕だったが、料理を食べる為に手と口が止まる事は無かった。

原作開始１９００年前くらい　そろそろ一人前だと思いたい
妖怪はじめました

苦節百年。
ついに人化が完璧になり妖怪と名乗れるようになりました。
ちょっと御姉様達の変わりようを思い出すと、自分もああなるのではと恐怖に震えた時期も有ったけど、至って普通だったと言っておこう。
よく誰も似ていない兄弟姉妹とか言われるけど、キャラがかぶらないのは良い事だ。
しかし、妖怪になって今までを思い返すと苦しい修行の日々ばかりピックアップされる。
兄様、頼みますから漫画で見た修行を試してみようと思わないでください！
あと、修行だと嘯(うそぶ)き実際に見ないとリアリティある構図が作れないと本音をこぼしながら、自分の漫画に載せる予定の構図の再現や、思い付いた絵を実行すると実際にどう動いてどんな効果があるか試すのは勘弁して。
そして、先輩達が俺を見かけると合掌してた理由が分かった。
張紹さんに聞いたら、兄様のあれは持ち回りで誰かが被害に合ってたらしいのだけど、ここ百年は俺に集中砲火してるので皆感謝しているのだと。
そんな事実知りたく無かったよ。
感謝するくらいなら、負担を分担して欲しいと言ったら皆逃げ出して地味に切ない思いをした。
でも、その修行にかこつけて外に狩りに行ったりして美味しい物が食べられるリターンが有ったから、そこまで悪くは無かったと思っておこう。
それに狩りに関しては白礼宅に行った時以上の問題も起こらな

かったので、美味しい物が食べられる点だけを考えれば良い事じゃないかと思えてくる。
ただ、やっぱり黙認の代償として通天教主様や他の上位な仙人達にお土産として持って行かないとマズそうだったので、御馳走タイムは狩りに行ったその日だけだったのは少し不満が残ったが、日々謎肉だけで我慢している者達もいるので十分だと思うことにした。
そして術に関してだけど、まず白礼から得た領域系の術だけど兄様が聞き出し張紹さんが精査した結果、時間対効果が悪すぎる為資料に残すだけで採用にはならなかった。
後は作り手や使い手によって、完成する領域が違ったり効果も違ったりする可能性が有った為に普及させるには安定性が欠如していたのも問題らしい。
ハードルの高い術がさらに高くなったと言うべきか、苦労して完成させてもそよ風が吹く程度の効果しかなければ試しに作ってみようと思う人もマレかと。
まあ、自分も作る予定だけど、上位陣の仙人達もいずれ作る気は有るみたいだ。
それと、白礼の俺に対する態度が冷たい。
領域を少しばかり破壊したのは悪かったと思うけど、あの場合は俺を殺そうとしてたからお互い様だと思う。
ぶっちゃけると、領域を倒壊させたのは兄様なので抗議はそちらにお願いします。
え？無理だって？だから俺に当たっているだと、なんて理不尽な。
次に、金光さんから時間が有る時に、周囲を明るくする術と光の屈折を操作する術を習った。
明るくする術は少し難しいだけだったけど、屈折に関しては無理です。
あんな常に計算し続けて光に干渉する術とか、凡人には無理だ。
でも、それをマスターすれば透明に見えるらしいので、恐ろしい相手から逃げやすくなるし状況が悪い時は隠れるのにも便利そうだから是非ともマスターしたい。

簡単に出来ない事が分かっているし妖怪は寿命長いらしいから千年くらい修行続けたらいつかは出来たら良いなーって感じに留めておこう、過度の期待は絶望を助長するから。

それに透明に成れたら良かったと思う日なんてそう簡単に来るとも思えないので、焦らなくても大丈夫だろう。

でも、そんな高度な術を教えて貰った代償として明るくする術が楽に出来るようになる触媒の開発を頼まれたのは必要経費だよね。

張紹さんに頼まれていた触媒開発の実験としては悪くない対象だと思うし、仙人界は夜に火を灯さないと暗いから、その触媒が開発できればちょっと生活環境が良くなる気がする。

最後に、姚斌さんから習った破壊の呪符は一応週一くらいで安定して作れるようになった。

まあ、これは触媒を作る上でエネルギーの変換や作用を知る為にやっていたので、安定して作れるようになって調子に乗った俺は、どのような模様がどんな効果になるのか改造したり実験を繰り返しいたら呪符が爆発した。

ちょっと痛いでは済まないダメージだったので今は効果が確定している模様しか使っていない。

この爆発を姚斌さんに話すと、痛い目を見た経験があるから改造とかは自分でしたくなかったと言っていた。

いや、そんな重要な事聞いてないんですけど？

どうして教えてくれなかったのか問い詰めたら、言ったら改造しなかっただろうと返ってきた。

まったくその通りです。

だから、そのお礼と言ってはなんだけど、開発した自分の周囲では爆発しない呪符が他の人が使っても正常に作動するのかテストを行って貰う。

とっても渋っていたけど、強気で行ったら引き受けてくれた。

まあ、渋る気持ちも分かるし、引き受けてくれた姚斌さんの勇気と、俺を信じてくれた事も合わせて黙っていたのは許すことにするよ。

だって、この手榴弾は安全装置が付いていてピンを抜いて持ってい

ても落としても投げても使い手の近くでは絶対に爆発しませんとか言われても俺なら絶対に信じないね。
一応自信は有ったし無事に成功したから良かったけど、万が一って世の中にはたくさんあるから。
実験で得た結果は、他の人が使っても同様な効果が得られたし、使い手が違っても制作者の近くでは爆発しない事が分かったのは収穫だ。
あれ？いつの間にか、俺も体を張らされてる？
そんなこんなで、いまいち実感はないけどステータス面でも術に関しても成長は有ったと思う。
いや、あんなに時間かけて苦労したのだから、成長したと思わないとやってられない。
しかしながら、まだまだ兄様や御姉様達に追いつける気がしないのは気のせいだろうか？
上を見てたら自信ががが……。
うん。この事は深く考えると自己崩壊しそうなので明後日の方向に放り投げて、別の事を考えよう。
そういえば、俺にも後輩が出来ました。
金鰲島に入ってくるその他大勢とかじゃなくて、趙公明の弟子と言うか派閥と言うか預かりみたいな感じの奴らだ。
これで無茶振りが分散してくれると助かるのだけど、そんな高望みなどしないで道連れが出来た事を喜ぼう。
まあ、二人ともまだ妖精なので、実際に修行に連れ出されるのは先の事だろうけど。
片方は、包丁の妖精で、もう片方はまな板の妖精である。
そう、ビーナス姉様が五百年以上愛用していた調理器具が妖精になったのだ。
包丁の方は、呪われてるんじゃないかと思うほど見た目が禍々しい刀剣で、これを使うと血抜きが効率的だと兄様が持ちだしてる時点で普通の包丁では無いと思ってたけど、妖精になるとは思ってませんでした。

まな板の方は、大きすぎるし普通の板よりは丈夫だと思っていたけど、これが妖精になるとは驚いた。
双方とも、俺と同じく龍脈のエネルギーを吸っていたし、多くの幻獣・霊獣や竜の血肉を啜った事で、妖精になった可能性が高い。
ビーナス姉様は、愛用の器具が無くなったのは残念そうにしていたが、新しくできた仲間として歓迎していたし、名前も付けていた。
二人とも嫌そうにしていたのは、俺の目の錯覚だと思いたい。
包丁の方は余化(よか)で、まな板の方が江(こう)になった。
「私は包丁じゃなくて立派な武器で刀剣のつもりだったのだが」
「俺だって本来はまな板じゃねーよ」
そんな事をつぶやきながら、かつての扱いに黄昏(たそがれ)ていた。
まあ、ここで暮らしていたら、それ以上に悩む日々が続くので、適当に励ますことにする。
「きっと調理器具だった方がマシだと思う日が来るから頑張れ！」
「それは不吉な励まし」
「返って不安しか感じない」
うん。こいつらとは仲良くできる気がする。
「ああ、正大。こんな所にいたのかい。今日の修行は、危険な場所に行くことになるので準備したまえ」
「嫌だ。行きたくない」
「仕方ない。雲霄。いつものように拘束しておいてくれ」
「やめろ。はなせ」
俺は、もう声に出して抗議したが、皆慣れたものでいつものように準備が進んでいく。
そして、連れて行かれる俺の耳に後輩達の声が聞こえた。
「私は、しばらくは包丁のままで結構です」
「俺も、まな板の方が安全な気がする」

Q．これは宝貝（ぱおぺえ）ですか？　A．宝貝（のうぶるふぁんたずむ）では無い事は確かです

修行なんて無かった。
無いと言ったら無いんだ。
だから、あの場所が砂漠一歩手前に、いや、荒野に成る訳が無い。
むしろ、あんな危険地帯が無くなったのなら、それは正義の行いであり非難される言われはないはず。
世界が少しばかり安全になる、それは喜ばしいことだと思う。
でも、そんな事は無かったので、世界は変わらず、俺も称賛される事は無いし、これからもいつも通りの日常がやってくるだろう。
うん。正直言うとやっちまった感がある。
なので、俺と兄様はそれを無かった事として押し通すと決めた。
あ、そんな事よりも長い休暇を貰ったので、前から準備を進めていた術の触媒が無事に完成したよ。
エネルギーを込めると光るんだ。
それだけの効果しかないのに、作るのに意外と手間取ったけど。
まあ、手間の割に地味なアイテムに仕上がったと思うけど、手軽に明るく出来るのは便利だと思う。
でも、常に手で持っておかないといけない事と、持っている間はずっと光ってる事と、エネルギーを込め過ぎたら眩しいのは改善するべき課題かな？
とりあえずは完成したので、この試作品を張紹さんに評価して貰うべく、俺は移動する事にした。
「これは宝貝だね」
しかし、張紹さんからは意外な言葉が出てくる。
え？そんな事は無いはず。
エネルギーを込めると術が発動する触媒ですよ。
呪符の応用的な感じで。
「しかし、ここまで作り込むと、もはや宝貝としか言いようがない。呪

符のように使い捨てでもないし、術の発動を手助けするのではなく、もうほとんど自動で効果発動しているから」
行き過ぎた科学は魔法と変わらないって感じでしょうか？
この触媒は行き過ぎで、ほとんど宝貝と変わらない的な？
でも、もしこれが宝貝認定されると困るのですが。
兄様の方針では、俺は宝貝お預け状態ですし、勝手に自前で作ったとなると、なんと言われるか分かったもんじゃないね。
この事は秘密でお願いします。
「おや、正大。面白そうな物を持っているね。詳しく聞かせて欲しいかな」
突然後ろから、兄様の声が聞こえて肝が冷える。
とりあえず言い訳を聞いて欲しい。
「なるほど。あくまで術の触媒を作っただけで、僕の方針を破った訳ではないと言うのだね？」
俺が作った触媒を弄りながら兄様は、そう問いかける。
分かって頂けたなら幸いです。
しかし、その手元にある触媒を見ると、点滅したりシマシマ模様になったり色が変わったりと、明るくする事しかできない俺よりも上手く扱えているような気がする。
なんかショックだ。
「ふむ。これは、僕としても判断に困る所だ。仕方ない通天教主様に判断を仰いで貰うとしようか。正大も張紹も付いて来たまえ」
え？さすがに通天教主様の御手を煩わしせる事じゃない気がするのですが。
なんか、思った以上に大事になったりします？
兄様だって、けっこう約束破ったりしますし、ここは穏便にお願いできません？
「まあ、僕としても、そうしたいのだけど作った物に問題があると言えば良いのか。詳しくは、通天教主様の所で話そう」
そんな感じに言葉を濁す兄様の後に続く。
そして、ある部屋の前に到着すると、兄様は扉をノックして中に問

いかけた。
「通天教主様。趙公明です。少しお時間よろしいでしょうか？」
「ん？趙公明か？ああ、少し休憩していた所だ。構わんよ」
　扉を開き中へと、入っていく。
「通天教主様。見て頂きたい物が」
　そう言って、俺が作った触媒を通天教主様に手渡した。
「これは珍しいな。エネルギーの種類を要求しない無属性の宝貝か」
「はい。たまに発掘される誰にでも使える宝貝の一種なのですが、これは弟の趙正大が作った物でして」
「何？これを作っただと？」
「はい。術の発動を補佐する触媒を作ったつもりらしいのですが、完成したのがこの宝貝みたいなのです」
「ふむ？つまり、いままで無属性だと思っていた宝貝は、触媒の発展型もしくは通常の宝貝とは違う可能性が出てきたと？」
「詳しく調べてみないと何とも言えませんが、恐らくはそうかと」
　えーと、これは宝貝に分類されてた物だから宝貝って事ですかね？
　厳密には、宝貝じゃないかもしれないけど、結果的に見たら宝貝みたいな？
　もう、これは宝貝で確定な訳ですね。
　しかし、何で大げさに話しているのか理解できません。
「ああ、置いてきぼりにしてすまないね。要約すると、エネルギーを送るだけで発動する仙人が不要な宝貝があるのだけど、それを作るヒントが見つかったって事さ。例として、発掘品の中に、この金鰲島の動力炉からエネルギー供給する事で動く乗り物があるのだけれども、このヒントを足掛かりに量産できるようになれば凄い事じゃないかい？」
　確かに、それは凄そうだね。
　でも、これはシンプルな効果しかないから作れたけど、そんな複雑そうな物は簡単には作れない気がするな。
「ちなみに趙正大よ。この宝貝をまた作るのに何年かかるのだ？」
　えーと、今回作るのに一カ月かかったけど、もう作り方は把握して

るから頑張れば十日くらいで作れそうと正直に答えると、張紹さんが馬鹿を見る視線を向けてきた。
　この時は思いもしなかったが、あの時作成時間を年単位で答えておけば良かったと後悔する事に。
「なんと。では、百日後までにこれと同じ物を十個頼む。張紹も可能なら協力してやってくれ」
　え？さっそく作れと言われるとは思ってもみなかったよ。
　しかし、俺はまだまだ未熟者ですし、兄様の方針的に宝貝は作れませんし、そんな納期ギリギリな仕事なんてしたくないですと、逃げようとしたのだが兄様は通天教主様に忖度した。
「ふむ。それなら、これは卒業試験って事にしようか。無事に達成できたのなら、次の会議で正大の仙人への昇格を推し進めよう」
「そうだな。これが達成でるなら、もう弟子と言う立場ではなく一人前の仙人と言えよう。それなら文句を言える者もいないだろう」
　兄様と通天教主様は、飴をちらつかせて来たが、そんな事で進んでデスマーチに参加したいとは思えないので、どう断ろうと考えてると逃げ道をふさいできた。
「もし断ったり、失敗した場合は修行のやり直しだね。ついでに、金鰲島の底上げの為に他の道士達にも参加して貰おうかな」
「どういう修行をしていたのか気になっていたから悪くない提案だ。趙正大は無事に成長しているようだから、不可能な修行ではないのだろう？その趙正大が手本を見せれば他の者達に良い刺激になるかもしれない」
　こいつら、今度は鞭を取り出してきやがったよ。
　いくつかと言うか、ほとんどやりたくない修行の数々が頭をよぎった。
　そして、その修行は結果的に金鰲島の底上げに繋がると思うけど、恐らくは分母が減ってそう見えるだけってオチが容易く想像できる。
　オマケに、この場に張紹さんがいるって事は、この大規模な修行は俺が原因だと皆に伝わるのは確実。
　大多数に恨まれては、俺の妖怪生活に支障をきたすのは明白。

こうなっては選択肢が存在せず、渋々と引き受ける事になる。
「大丈夫。正大ならきっと出来る」
「引き受けてくれて助かる。これで金鰲島は、ますます発展するだろう」
「こうなっては仕方ない。他の者達の為にも可能な限り協力しよう」
張紹さん、妖怪だけどマジ良い人。
それと、俺のウカツさのせいで巻き込んでごめん。
あ、でも、なるべくなら変な噂を流さないようにしてくれると、もっと助かります。

もっと光を

時は、二千ＸＸＸ年。
世界は謎(じょか)の炎に包まれた。
これにより人類が築き上げた文明は抵抗すら許されず崩壊する。
炎が消えた後に残されたのは、荒れた大地と干上がった海。
空は、舞い上がった埃や水蒸気により厚い雲に覆われ、世はまさに暗黒の時代。
これで長きに渡る人類の歴史は終わりを迎えたのだろうか？
いや、人は死に絶える事はなく新たな時代を築き生き残ろうと足掻き続けていた。
そして、ここは暗黒の時代でも眩しい光が灯る場所。
文明の残滓がわずかに見える人類最後の楽園。
楽園？
そう、一部の力有る者達には楽園だが、その他大勢の弱者には苦痛が伴う生きているだけの場所。
ある者は、素手で荒地を耕し。
ある者は、重い石を運び。
ある者は、謎の歯車を回して発電をする。
まさに奴隷のように重労働を課せられ続けた。
そんな中、今日もある建物から野太い怒声と、革製の何かが地面を叩く炸裂音が響く。
「社長は、暗いのがお嫌いだ。さあ、今日も心を込めて作るのだ！」
あきらかに強面で筋肉質の巨体が鞭を地面に叩きつけて、その威圧感で作業を促す。
逆らえば、どのような目に合うか明白なだけに、俺は黙々と作業を続けた。
そして、就活(強制徴用)の時に肉体労働が嫌だったから、電球が作れると言った自分を呪う。
あ、やっぱ肉体労働の方が大変そうだから、マシな方かも？
そして、工場長は、今日も同じ事を繰り返し言っている。

たまに社長が来て幽霊みたいな声で、『暗い。暗い。もっと光を』って呟かれるよりは活が入る分だけマシだけど、なんかこうもっとバリエーションが欲しいと言うか。
そう、できたら美人さんにお願いしたい所だけど、返事の代わりに罵声と鞭が来そうなので止めておきます。
そんなこんなで現実逃避をしながら作業を続けている俺を絶望させる情報が入ってきた。
「朗報だ。契約を増やせば電球が沸いて出てくると思っている上層役員の糞野郎どもが、大口の契約受注を増やしやがった。ノルマがさらに追加されたぞ。ワシの帰りがまた遅くなる。さあ、めげずに心を込めて作るのだ！」
上層役員の糞野郎どもやめてー。
現場は、監視役の工場長と俺の二人だけなのですよ。
工場長は戦力外なので、実質一人だけで電球作ってるんだ。
追加の人員マジでお願いします。
そんなこんなで、頭を悩まされていると目眩と頭痛が襲ってきて、俺は地べたに倒れこむ。

「正大。おい。正大。しっかりしろ」
誰かの呼びかけにより、目が覚める。
頭がはっきりとしないが、先ほどの記憶を思い出し小声で呟く。
「そうだ。ノルマが追加されたんだった。頑張らないと」
「おい。正大よ。本当にしっかりしろ、ノルマはそれが終われば最後のはずだぞ？」
その声に視線を向けると、居たのは工場長ではなく張紹さんだった。
あれ？さっきのは何だったんだ？
「いきなりダウンしたので驚いたぞ。やはり、見栄をはったのか制作時間を少なく申請したのは失敗だったと思うのだが？」
さっきのは夢か？
それとも俺の記憶か？

しかし、俺はもっと平和な時代を生きていた気がするのだが、さっきの夢で見た場面以外の記憶も次から次へと溢れてくる事から、俺の記憶だと実感がわいてきた。
とりあえず、前の俺の記憶がデスマーチによって蘇ったって事で良いのかな？
しかし、前の俺はなんて職場に就職してたのだ。
まさに、無休・無給・無救の三Kな職場だったぞ。
でも、過去の事はまあ良い。
それよりも電球だ。
宝貝よりも簡単に作れて、しかも明るい。
良い情報が手に入ったものだと、さっそく作り方を思い出そうと頭をひねる。
うん。電球の作り方、まったく出てきません。
出てくるのは、過去のトラウマばかり。
知ってたけど、前の俺の情報まったく役に立たねえ！
微妙に色々と知ってるけど、肝心の作り方や概要は、まったく覚えてない。
今回の電球に関しては、トラウマのせいで意図的に封印されてる気がしないでもないけど、封印するなら電球の知識よりもトラウマの方だろうが！
危うく叫びそうな俺を気遣って張紹さんが声をかけてくる。
「まあ、明日の期限には間に合ったのだ。今日はもう休むべきだな。部屋まで帰れそうか？」
「ん？ああ、大丈夫ですよ。色々とありがとうございます」
「何。構わんさ。恐らく通天教主様が私に手伝うように言ったのは、次の準備を整えるだめだろうからな」
「え？何か意図が有ったんですか？」
「まあ、どうなるかは分からんが、明日に色々と決まるはずだ。ノルマも無事に達成できたのだ、そう悪い事でもなかろう」
「そうですね。これで今日は、久しぶりにぐっすりできそうですよ」
「気絶するほど頑張ったのだ。よく休むのだぞ？」

「分かってますよ。そちらの方こそ、お疲れ様です。良い眠りを」
そう言って、張紹さんと別れて部屋へと戻った。
少しばかり気になる事も有ったが、俺は疲れていたのかすぐに眠りに落ちた。
勿論、記憶の整理と言う過去の悪夢にうなされたのは言うまでもない。
そして、俺はタダ働きにならない職場環境を作る事を決心した。
具体的に何から手を出すかは、後でゆっくりと考えよう。
気がつくと朝だった。
スッキリとした目覚めとは言い難いが、たっぷりと睡眠が取れたのでそこそこ調子の良い俺は、ノルマから解放された為か軽い足取りで会議室へと向かった。
そして、今着いたのか扉の前に居た兄様に声をかける。
「兄様。おはようございます」
「ああ、正大か。おはよう。無事にノルマは達成できたんだって？」
「ええ、なんとか昨日終える事ができました。張紹さんの手伝いのおかげですね。見栄で少ない時間を言った事を後悔しましたよ」
「はは。それは災難だったね。とりあえず、完成品が十もあれば、次はそうそう急ぐこともないと思うよ。今回は、金鰲島の発展の為に早く研究を進めたいから、通天教主様も少し性急になり過ぎてた部分もあるからね」
「そうだと良いのですが」
「まあ、立ち話もなんだから、先に中で待っていようじゃないか」
そう言って、俺達は会議室の中に入って、他の者達が来るのを待った。
談笑していたせいか、少し待っただけで、次々と部屋に人が訪れる。
張紹さん、姚斌さん、金光さん、白礼、そして何人かの顔なじみの無い仙人達。
最後に通天教主様が来た所で、皆立ち上がり頭を下げる。
通天教主様は、議長席と言うか専用の場所に座ると声を出した。
「皆の者。楽にするが良い」

その言葉に合わせて皆頭を上げる。
「では、始めるとするか。今回は、人事および部門の統廃合の発表を行う」
統廃合と言う言葉に若干嫌な予感がしたが、今は何も言う時ではない。
「まずは、そこの趙正大が、ある宝貝を完成させて、それの量産も無事に達成した。その功績をもって仙人と認める事にしよう。これからも自身の鍛錬と金鰲島の発展に励むように」
通天教主様が軽く拍手をすると、皆祝うかのように拍手を続けた。
なんだか、やっと一人前になれたようで少し嬉しい。
「次の話に移ろう、今回の会議で成果が芳しくない術部門を廃止する事が決まった」
とても寝耳に水な発表だ。
これは、一波乱ありそうで、頭を抱えたくなった。

俺がトドメを刺したと思いたくない

突然の術部門の廃止に、会議室の空気が騒然となる。
このタイミングで、この発表って、もしかして俺が術部門にトドメを刺しちゃった感じですか？
いや、そんな事は無いはず。
これは、きっと偶然だし、張紹さん達は前から危機感を持ってたみたいだから、その廃止がたまたま今日になっただけだな、きっと、たぶん。
うん。俺は悪くないと思いたい。
「静まるように。術部門も色々と頑張っていたようだが、趙正大が作った宝貝により、我が金鰲島は術の開発・教育に割いていたリソースを宝貝開発に振り分ける事を決定した」
あ、これは俺がトドメを刺した事が確定しました。
後で張紹さんには謝っておこう。
まあ、でも、ここ百年での成果が俺一人だったなら仕方ないよね？
少しでも罪悪感を軽くする為に他にも言い訳を探す事にしよう。
「しかし、今回作られた無属性の宝貝が術の触媒を開発する過程で作られた事を踏まえて、無属性の宝貝の研究・開発および我々が新たに作り上げた宝貝がどうしてこのような効果を得たのかの調査などを重点におく第二宝貝部門を設立する」
おお？
新たな部門立ち上げですか？
「その部門を張紹に任せようと思う。やってくれるな？」
「拝命いたします」
ふう。順当に張紹さんに決まって良かった。
これで俺の名前とか出てきたら気まずいって所の話じゃないからね。
あとは、俺の罪悪感がかなり減ったのは嬉しいポイントです。
いやー、まさに万事塞翁が馬ですな。
「それと、術部門は廃止されたが、そこで研究された物を埋もれさせる

のは惜しい。そこで、趙公明よ。以前から要請が有った図書館に代わり図書室の建設を許可する。くれぐれも自身の描いた漫画で埋め尽くす事はないように」
「心得ました。埋め尽くすことは諦めましょう」
「うむ」
兄様ならあり得るだけに通天教主様は、さっそく釘を刺してきましたよ。
でも、あの言い方だと埋め尽くさなければ良いと思ってそうな気もしないでもない。
まあ、憶測だけで物を言うのはトラブルの元なので黙っていよう。
「これで、術を習得したい者が自習できる環境は充分だと思うが、肝心の術の習得に関する書物がない。張紹には悪いが、新たな部門の初仕事は術に関する書を編纂する作業をして貰う」
「了解しました」
「そうだ。うちの正大の宝貝作りに協力して大変だったと思うから、その編纂は正大にも協力させよう」
「そうだな。趙正大よ。張紹に協力して書の編纂を行うように」
「了解しました」
まあ、あの大変な作業を協力して貰ったから手伝うのはやぶさかではない。
それに今回は期限も無いから、そこまでデスマーチしなくて済みそうで良かった。
「任せたぞ。あとは金鰲島の仙道から可能な限り術に関する聞き取りも行って貰おう」
「それなら、実際に習得可能な物があるなら習得して貰って、その成功の経験談を記した物があれば後輩達の役に立ちそうじゃないかな？図書も増えて本棚の見栄えも良くなりそうだし」
「そうだな。他にも、書に編纂して欲しい物が出来たら追って連絡する」
待って。
デスマーチでは無いけど、想像したら恐ろしい仕事量なのですが？

もっと増援をお願いします。
そう思って回りの仙人に視線を送ると、目を逸らされた。
そして、張紹さんと目が合うと、その表情は諦めろと訴えてる。
「今回はここまでだ。では、解散」
通天教主様のその言葉に、他の仙人達は次々と会議室を後にして行った。
まあ、その中に親しい仙人は居なかったので協力を頼めるかは疑問だったが、少し薄情じゃないかね？
「張紹よ。新たな部門の長に就任おめでとう。術部門が廃止なのは悲しいが、これも時代の流れか」
「ありがとう。今までが暇だった分頑張ることにしよう。むしろ忙しくて感傷に浸る暇もないのは良さそうだ」
「そうか。お互いに頑張ろうじゃないか」
姚斌さんが、そう労うと次に金光さんが祝辞を述べた。
「私からもおめでとうと言っておこう。正直に言うと宝貝部門は手が足りてなかったので、作業を分担する部門が出来た事を喜んでいる。これからは、共に宝貝技術発展に力を尽くしていこうじゃないか」
「ありがとう。そちら側が大変だったのは知っている。過労気味じゃないかと心配していたのだが、これで少しは負担が減らせそうだな」
そんな感じで旧知の仲で歓談している。
俺は良い友情だと思いながら、自身の友達の数を指折り数えてみて、その少なさに絶望した。
これからは、もう少しだけコミュを広げる努力をせねばと心に誓った。
決して、これから待ち受けている仕事から現実逃避する為ではないと言っておこう。
「そうだ。正大。これを渡しておこう」
現実逃避をしようとしている俺に兄様は、複数枚の紙を渡してきた。
「僕が考えた術の習得方法を記しておいたよ。本当は仙人になる前に試そうと思っていたのだけど、今回の件が有るおかげでお蔵入りしな

くて済みそうだ」
仙人になれば兄様からの修行は卒業して、自主的に出来ると思っていたのに、この紙に書いてある分は続くと思うと憂鬱になった。
ぱっと見た感じ危険な目に合うことによって新たな力に目覚める系が多いのは気のせいだと思いたい。
「僕もいくつか試してみたのだけど、この程度じゃあ危機を感じなくてね。正大ならいくつか習得できると信じているよ」
え？兄様は、これくらい余裕なんですか？
そして、信じるとか言ってますけど、言葉の裏を取るとギリギリ命が危ないって受け取れるのですが？
とりあえず、この紙に書いて有る事は後回しにすると決める。
この紙を見た後だから出て来る不安なのだけど、これから他の仙道から聞き取る多数の習得方法が、あまり危険ではありませんようにと心から願った。

金鰲島七不思議

張紹さんが聞き取り調査をしてくれた術に関する修行を黙々と紙に書く作業を続けている。
書いていて分かった事なのだが、皆術を習得しようと色々と無茶をしていた。
マグマに入ったり、深海の圧力に挑戦したり、高所から落ちたりと色々だ。
そして身に着けた術も、その修行をやったからこそ身に着いた保証も効果が有るのかも分からない物ばかりだった。
そいった物は、【危険な術の習得法・未検証】に編纂する。
たぶんタイトルだけ見た人が、危険な術の本だと勘違いするかもしれないけど、危険なのは習得方法で有って術の方では無い。
危険な物が無いとは言い切れないけれども、ぶっちゃけるとリスクを負ってまで習得する価値はない術がほとんどだ。
まあ、いくら術が廃れてしまうと言っても自身の修練の結晶である奥義を簡単に教えてくれるはずもなく、ほとんどが入門的なものや切っ掛けを掴む程度の効果しか期待できない内容になってしまうのは仕方ない事だと思う。
それを踏まえた上で、最初に術部門から教えて貰った事は、そういった危険な修行を省いて結果だけ先取りする物なので安全ではあるが、才能に左右される結果になったのじゃないかと考えてしまう。
つまり、問題の意味は分からないけど、答だけ見せられてそれを習得しろと言われても、簡単には出来る訳がなかったのかもしれない。
でも、それを踏まえても危険な修行なんてしたくないので、黙っておこう。
何故なら検証させられるからだ。
もう術部門は取り潰されたのだから、俺が体を張る意味が分からない。
いや、術部門とは関係なくても、俺が体を張る意味が分からない。
大事なので二回言ってみた。

「正大よ。集中力が乱れているようだね。そろそろ休憩にしよう」
　その言葉を聞いて俺は、机に突き伏して大きなため息をこぼす。
「もう疲れました。どちらかと言うと飽きたってのが正解ですが」
「確かに聞いてみないと分からない事も有ったが、目新しい物は少ないからね」
「ええ、仕事に楽しさを求めるのはどうかと思いますが、先は長いのでそろそろ息抜きをしたい所ですよ」
「まあ、私は色々と聞き取るついでに雑談をしているから、問題ないが正大は編纂作業を中心にしているから、流石に飽きは出てくるか。なら先に趙公明様が書いた修行でもして」
「却下です。何か面白い話とかないですか？」
「即答か。なら面白いかは分からないが、金鰲島七不思議を知っているか？」
「七不思議ですか？七怪じゃなくて？」
「奴らは、梅山の七怪だろ。金鰲島七不思議とは関係ない」
「じゃあ知らないですね。どんな話なんですか？」
「まあ、金鰲島で最近出回っている怪談みたいな物だ。聞き取りのついでにいくつか仕入れた」
「え？金鰲島の住人自体が怪談みたいな物なのに、そいつらに怪談扱いされるとかどんだけですか。気になってきましたよ」
「じゃあ、話すとしようか」
　そう言って張紹さんは語りだした。
　ある一人の男が、夜風に当たろうと金鰲島に最近作られた庭園へと向かっている。
　そこは月光を浴びるには丁度良い場所で、妖怪仙人である男もそれなりに気に入った場所で有った。
　なので外の空気を吸うならそこに向かうのは当然になり始めている。
　しかし、もう少しで庭園に着く道の途中に大きな看板が立てられていたのだ。
『この先は、しばらく危険につき立ち入り禁止』

今は庭園でくつろぎたいのに水をさすような看板に苛立ちを覚えたが、すぐに鼻で笑った。
自分は金鰲島で修行している仙道であり強い力を持つ妖怪なのだ、危険など有るはずがなかろう。
むしろ、そんな自分を危険たらしめる物があるのなら見てみたいものだと歩を進めるが、何事もなく庭園にたどり着いた。
そこはいつもと変わらない風景が有るだけで危険そうな物は何もない。
いや、どこか違和感がある。
いつもなら、心地よい風が吹き月明かりが優しく降り注ぐはずなのに、今は風を感じられず月明かりも何かに遮られているのか闇が一段と濃い。
ふと空を見上げたが暗いだけで、いや、何かが動いている。
そう思うと同時に巨大な何かがこの庭園を覆っている事に気付く。
これは看板にある通り危険なのかもしれない。
背中に冷たい物を感じながらも、この庭園を去る決意をすると地中から触手みたいな物が固い地面を破り飛び出す。
不味いと思った時には、すでに触手のような物に絡め取られて身動きが取れないまま、ゆっくりと地中に引きずり込まれる。
その恐怖に耐える事が出来ず男の意識は暗転したのだった。
そして、気がつくと男は自室にいた。
あれは夢だったのだろうか？
しかし、悪夢の影響なのか体がだるい。
まったく酷い夢を見たものだと、袖で額の汗をぬぐうと服が土で汚れている事に気がついた。
まさか、あれは悪夢ではなく現実だったのだろうか？
男は、それを確かめる為に恐怖にすくむ足を騙しながら庭園へと向かった。
その途中には看板も何もなく、庭園も太陽の光が降り注ぐ普段の場所。
その平穏な光景に心底安堵し、あれは夢だったと結論付ける事にし

た。
　そして、夢だとあの場所に引きずり込まれたんだよなと視線を向けた先には、何かが這い出たような穴があり、あそこに自分が埋まっていたのではと思わせる恐怖を感じたが、気のせいだと頭を振りかぶる。
　男は、夜にここを訪れる事はもう無いだろう。
　そして、知り合いに数日は行方不明だった事を教えられて、その決意を固くするのであった。
「みたいな感じの経験談が複数あるらしい。これを金鰲島七不思議・闇の庭園と言うみたいだね。今回話したのは夜だったけど、昼間でも同じ事が有ったそうだ」
「へぇー。そんな話が有ったんだ」
　冷静を装いながら、そう軽い返事をしたが内心は凄く焦っていた。
　何故なら、それ犯人は俺だから。
　ダメージを受け過ぎると回復する為に庭園を独占してたし、その上で龍脈みたいなエネルギーを得られる場所がないから近づく者からエネルギーを絞り取る存在になっていたのだ。
　だから兄様に、危険立ち入り禁止な看板を立てるようにお願いしていたのだが、たまにそれを無視した者達が被害に合っていたせいで、そんな怪談が出来上がったのだろう。
　とりあえず、被害者達は掘り起こして自室に送り届けていたのだけど、いつ苦情が来るのか冷や冷やしていたが、皆現実逃避していたとは意外だった。
　自分が怪談にされるのは、はなはな遺憾だが訴えられると困るので、そのまま七不思議として永遠にアンタッチャブルになって欲しいものだ。
　そして、俺は話題をそらす為に、次を要求する事にした。
「七不思議って言うからには、他にもあるんだよね？他はどんな話だったりするのかな？」
「ああ、迫り来る壁とか、見返り美人とか、食べられる御菓子とか、怪人Ｃとか、存在しない部屋とかだね」

「なかなか気になるタイトルだけど、闇の庭園を含めて六つしかないのだけど？」
「ああ、七つ目は、六つの不思議の真相を知ると不幸になるとか願いが叶うだとか、そういった話らしい。全部の真相を知る者がいないって事だね」
「へぇー、不幸になるか願いが叶うかはっきりして欲しいかな」
とりあえず、一つだけでも真相を知っている俺はもう不幸なのですが？
もう全部の真相を確かめて願いを叶えるしかないかな。
いや、なんか藪蛇な気がして話を聞くのが怖い。
けど、やっぱり好奇心的には、どんな話か知りたくもある。
まあ、もう不幸なのだから聞いても、別に問題ないよね？
「迫り来る壁ってのは？」
「ああ、夜に見回りの者達から広がっている話なのだけど、通路が突然柔らかい壁に塞がれるそうだ。そして何かの叫び声がしたと思ったら、その壁に押しつぶされる者達が続出しているみたいだね」
あれ？なんか似たような経験をしたような？
何だったかな？
ああ、あれだ。
夜に食料を求めて彷徨っているマドンナ姉様が道につっかえて動けなくなっている事が有った。
そこから抜け出そうとしている姉様に潰されかけた思い出が……。
いや、マドンナ姉様が犯人だと決めつけるのは早いはず。
「そういえば、経験談は食糧庫周辺の担当ばかりだったはず」
「え？えーと、次の見返り美人って何なのかな？怪談って感じはしないのだけど」
俺は、慌てて次の話題を振った。
「何でも美しい仙女を見かけて、お近づきになろうと追いかけて声をかけた結果。振り返るのが恐ろしい顔をしたオッサンになっているそうだ。その落差のショックから気絶する者が多数出てるとか。間違いなく美人を追いかけていたはずなのに、振り返る顔が別人になっ

ている。勘違いだとか、見間違いとかじゃなくて、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったと体験者は語っていたね」
これは、もしかしてビーナス姉様が？
そういえば嘘だと思っていたけど、よく殿方に声をかけられると自慢していたような？
そして、私の美しさのあまりに殿方が気絶しますわよと言っていたような。
うん。次に行こう、次に。
流石に、食べられる御菓子は、俺達に関係ないはず。
「ちなみに、食べられる御菓子ってのは？普通の御菓子じゃないの？」
「ああ、何でも巨大な御菓子に襲われてた者達がいるみたいでね」
「え？つまり御菓子に食べられるって事？」
「そうなる」
やっぱり、これは関係なかった。
危険な御菓子が金鰲島にいるってのは脅威だけど、安心だ。
いや、待てよ。
クイーン姉様が、また御菓子に逃げられただわさと言ってるのを何度か聞いたような？
あの時は、マドンナ姉様に食べられたんだと思っていたけれど、本当に逃げられていたとしたら。
そして呟くように、誰か食べられてないと良いんだけど言っていたのは、聞き間違いで誰かに食べられてないか心配しているんだなと思っていたけど、聞き間違いじゃなくて本当に誰かが食べられてないか心配していた可能性が。
深く考えるのは止そう。
何も証拠は無いんだ。
そして怪人Cは、聞くまでも無いよね。
「怪人Cについては聞かないのだな？」
「あ、いや、なんとなく想像がつくと言うか」
「私も被害に有ってね。大事な物を人質に取られて勝負を挑まれるのだよ。最近までは大人しかったそうなのだけど、また活性化している

らしくてね」
「え？俺に言われても困るとしか、それよりも、最後の存在しない部屋ってのは何ですか？」
やっぱり兄様でしたよ。
そればっかりは、俺に言われてもしょうがないので、次の話題を全力でプッシュです。
「いや、まあ頼むとだけ言っておこう。それと、存在しない部屋なのだけど、この金鰲島には、普段は存在しない部屋があるのだそうだ。なんでも恐ろしい物が見れるそうなのだが、私がくまなく探しても見つける事は出来なかった」
「最後の一つは、デマなんですかね？」
「それは分からない。しかし、話が出回っている以上、デマと切り捨てるのも難しくてね」
「うーん。話の流れからして、兄様が何かとんでもない物を隠してそうな予感がするのですが」
「私も、その線を疑っているのだが、見つからない以上は本当に存在しないだけで、噂が独り歩きしている可能性もある。まあ、怪談とは本来こういう物なのだろうが」
「それもそうですね」
「ああ、もし見つけたら教えて欲しい。長年分からなくて気になっていてね」
「まあ、期待はしないでくださいよ」
一つだけで止めておけば良かった。
誰だ、これ以上は不幸になりようがないとか言ったヤツは？
真相を知る度に不幸度が上がったのですが、発言者は責任を取ってください！
あ、俺だった。
しかし、六つ中、五つも自身を含めて身内が犯人だったなんて。
最後の部屋とか、絶対に兄様が不味い物を隠してると俺は確信してるね。
これは張紹さんには悪いけど、見つけたら秘密裏に処分しておかな

いと俺の立場が悪くなるはず。
そう思って、俺も金鰲島をくまなく調べたけど、隠された部屋や、不味い物が置かれている部屋は見つける事が出来なかった。
やっぱり、ただの噂だったかと、俺はこの話題を忘れていく。

そんなある日、こんな所に道なんて有ったかな？
そう思って、好奇心からその道を進んだ。
しかし、その先に有ったのは袋小路で行き止まりだった。
俺は、存在しない部屋の事を思い出して少しばかり期待していたのだが、やっぱり存在しないから、存在しない部屋なのだろうと結論付ける。
まあ、でもせっかくだからと、行き止まりの壁を押してみたのだけど、やはり壁だった。
そういえば、前の俺の記憶だと、こういった隠し部屋への扉は引き戸だったなと、壁をスライドさせてみようとしたが無駄だった。
こうなったら、自棄だとシャッターを持ち上げるみたいに壁に手をかけると持ちあがる。
そして壁を持ち上げると、中にいた人物と目が合う。
俺は、静かに壁を下して見なかった事にした。
何を見てしまったのかは、とてもじゃないけど俺の口からは言えない。
「待て。趙正大。これは誤解だ」
壁の向こうから声がする。
俺は、通天教主様なんて見ていない。
存在しない部屋なんて存在しないのさ。
「通天教主様。俺は、何も見てませんし、この事は張紹さんには絶対に話しませんから」
「いや、待て。張紹に知られるのは困る。この事が金鰲島中に広がってしまうからな。それに誤解だと言っておる」
「分かっています。分かっていますから。俺は、何も見ていません」
「いや、分かってない。そうだ。いったい何が望みだ？」

え？何が望みだと急に言われても。
しいて言うなら、給料が欲しいです。
タダ働き反対！
しかしながら、貨幣を貰っても金鰲島でも、ましや文化全然発展していない人間界でも使い物にならない。
うーん。そうか使い物にならないなら、使えるようにすれば良いんだ。
「えーと、金鰲島に採用して欲しい制度があるのですけど」
「それは、難しいかもしれんが、金鰲島の為になるのなら叶えられるかもしれん」
「分かりました。では、今の仕事が一段落したら兄様経由で企画書を提出するのでお願いします」
「うむ。可能なら叶えよう。だから分かっておるな？」
「了解しました。絶対に他言しませんし、忘れますし、誤解ですね」
これは願いが叶ったって事なのだろうか？
しかし、やっぱり不幸だとしか言いようがない。

閑話　アンニュイは終わらない

ｓｉｄｅ趙公明

アンニュイは終わったのだ。

外伝を読み終わった時に、僕はそう思った。

外伝での暴れっぷりを見ると、アニメで受けた暗く重いガッカリした思いをぬぐいさるには十分な満足感を与えてくれる。

あんな大勢の強敵と乱戦できるなんて、外伝が少し羨ましく感じたりはするけれど。

本音を言えば、そこ代わってよ。

まあ、そうやって心の整理を付けたはずだったのに。

外伝が終わっても続いていたアニメを最終回まで見た結果。

外伝が与えてくれた満足感を覆すには十分な酷さだった。

つまりアニメは終わったけど、内容が内容なだけにアンニュイを解消する手段を失った。

まさに、アンニュイは終わらない状態に突入である。

これなら途中で、僕がアニメを打ち切って国立アンニュイ学園を放送しても別に問題なかったと思うのだけど？

たぶん何人かは期待してくれてたんじゃないかな？

ふう。過ぎ去ってしまった事は諦めよう。

次のアニメ化に期待するとして、気持ちを切り替えるべきだね。

とりあえず、気持ちを上向きにする為に最近有った良い事を思い出そう。

弟の趙正大が人化を完成させて妖怪になったのだ。

パーティでも開こうかと思ったけれども、僕が貰って嬉しいプレゼントを贈る事にした。

そう、強い敵や危険と隣り合わせで自身の力を思う存分に振るえる修行や任務を準備したのだ。

まあ、そのせいでダメージを受け過ぎてしばらく修行を付けられなくて、退屈な日々が続いたのは反省しないといけないね。

他には、雲霄が愛用していた調理器具が妖精になった事だろうか。

なかなかに見所がありそうだったので力が付いたら、僕が直々に修行を付ける事にしよう。
本人達には、月光を浴びたり瞑想したりと力を蓄えるようにと指示を出しておいたから、将来が楽しみだ。
そういえば、正大が前の修行で受けたダメージも、そろそろ癒えている頃だろう。
そして、何か作ってるくらいだし余裕も出て来たと思うから、修行を再開しても問題ないよね。
しかし、前の修行の場所は大変良かったのだけど、実に惜しい結果になってしまった。
なぜなら危険の解除が任務だった為に、その場所が永遠に失われてしまった事だろうか。
正大が限界を超えてしまって、ウッカリ砂漠化してしまったなんて事は無いのだ。
無事に無力化に成功したと明言しておこう。
そんな言い訳を誰かにしながら歩いていると、正大の自室に着いた。
しかし、留守のようだね。
たぶん、例の作っていた物が完成したのだろう。
きっと、親しくしている張紹あたりに評価して貰いに行っている可能性が高そうだ。
良し、その品評会には僕も参加させて貰うとしよう。
どんな面白い物を作ったのだろうかと、好奇心の期待を膨らませながら術部門の場所へと向かったのであった。
術部門にたどり着くと、丁度作った物の検分をしている所だ。
後ろから様子を眺めていると、何かが光っているのが見えた。
これは、僕の方針を破って宝貝でも作っていたのかな？
そう見当をつけて、正大に声をかける。
すると言い訳と取れなくもないけど、宝貝を作ったつもりは無いけれど、完成した物が宝貝かもしれないとの事だ。
僕も実際に使ってみるが、エネルギーを込める事により奇跡に類す

る効果が起こる。
うん。これは宝貝だね。
しかも、エネルギーの種類を要求しない無属性の宝貝と来たか。
色々と、送るエネルギーや力加減を変えたりすると、点滅したりシマシマ模様になったり色が変わったりと意外と楽しい。
思わず遊んでしまったけれども、発掘品の中でも珍しい部類に入る無属性の宝貝を作ったとなると、通天教主様に報告しない訳にはいかないな。
もしかすると、正大への修行は、もう出来ないかもしれない。
そんな予感を感じながら、正大達を引き連れて通天教主様の所に向かう。
ちょっとだけアンニュイだ。

まあ、大方予想通りになったとだけ言っておこう。
通天教主様は、これにより宝貝技術の発展に力を入れるおつもりのようなので、正大に仙人の地位を与える事で、作った宝貝の量産を命じる事ができた。
これで、やはり正大は僕から卒業と言う訳だね。
まさかこんなにも雛鳥が巣立つのが早いとは思わなかったよ。
さてと、感涙に浸るのはここまでとして、仙人になったからには本格的に仕事をして貰おうとしよう。
今の指令が終わるまでに、通天教主様との会議でどのような仕事を割り振るか話し合う必要が出てきた。
金鰲島は修行中の道士は多数在籍しているけど、組織運営ができる仙人の数が不足しており仕事は山のようにあるから、正大の仙人昇格は本当に喜ばしい。
とりあえず、色々と仕事をさせた後に僕の補佐になって貰おうかな。
たぶん、しばらくは色々な手が足りてない部門や機関に助っ人として動員されると思う。
まあ、経験を積むのは大事だけど、その分自身の修行がおろそかに

なっては困るので仕事と銘打たれた修行の指示書を書いておくとするかな。
そして、通天教主様と会議を重ねた結果、術部門の廃止が決定し、新たに第二宝貝部門が立ち上がる事が決まった。
まあ、宝貝技術の発展を推進するなら妥当な判断だと思う。
しかし、術をそのまま放棄するのは勿体無くもあるので、独自で修行や研究を出来るようにする環境を整える方向に話が進んだ。
僕は、図書館を推したのだけど、そんな大規模には作れないそうなので、図書室に落ち着く事になった。
そこにいつか僕の漫画が所狭しと並べられている事を想像すると、まさに背景に華が咲く思いだ。
まあ、埋め尽くすなと釘を刺されてしまったけど、目立つ場所に置くには問題ないよね？
あとは、せっかくの図書室なのに蔵書が少ないのは、なんとも寂しさを感じるので、僕が発掘したコレクションをいくつか寄贈する事にしよう。
そんな訳で、色々と手付かずだった自身のコレクションを整理しているのだけど、意外と読んでなかった物が多い。
なんとなく手に取った、皆が無価値や無駄だと言う過去の文化や行事が記された書物も読んでみるとなかなかに面白い。
今度何か試してみるとしよう。
しかし、本ばかり読んでいると体が鈍ってしまうな。
どれ、正大の修行が忙しくて最近やっていなかったけど、久しぶりに金鰲島に所属する仙道の実力を測る抜き打ちテストみたいな物を実施してみるか。
本気を出して貰う為に、まずは大事な物を差し押さえないとね。
しばらく、金鰲島内で怪人Ｃの被害が続出したらしい。

星に願いを
それは星に願ったらアカンやつ

俺は、金鰲島の頂上に向かっている。
何故なら、兄様が金鰲島の頂上で怪しげな儀式の準備をしているとの通報を受けたからだ。
まあ、危険なら止めるのもやぶさかではないのだけれども、どうして俺に言うのかね？
え？兄様に、まともにものが言えるのは通天教主様くらいだって？
そして、通天教主様の手を煩わせる訳にはいかないし、気安くお願いする事も出来ないので、とりあえず人柱に……じゃなくて、身内にお願いする事にしたらしい。
あれ？俺って、もの凄く侮られてる？
せっかく仙人になったのだから、今度時間があれば兄様みたいに稽古でも付けるべきなのだろうか？
兄様経由で、これの企画書も提出しておこう。
いや、やっぱり暇がないから止めておくべきか？
自分の提案で忙しくなるのは困るし自分の首を絞めてしまう予感がする。
そんなこんなで目的地に進んでいると、大きなものが見えてきた。
どこから持ってきたか謎だけど、巨大な竹が見える。
いや、たぶん笹かな？
だって、折り鶴やパーティで使われる色紙の輪を繋げたチェーン状のもので飾り付けられている。
それだけなら、俺も七夕の笹かと思ったのだけれども、一番上に星が飾られていて、おそらく白い部分は雪に見立てた綿だろうし、ベルやリボンや靴下や紅白の杖も所々に飾られている。
そして、トドメに最近また俺が量産させられた光る宝貝が電飾よろしくとばかりに点滅していた。
絶対に七夕の笹とクリスマスツリーが混ざってますよね？

これは知らない人が見たら怪しげな儀式の準備をしていると絶対に勘違いしますわ。
まあ、でも正体を知っている自分としては危険がないと分かりホッと胸を撫で下ろす。
「兄様。この七夕とクリスマスが混ざったような笹は何ですか？」
「いきなり質問とはぶしつけだね。ちょっと古代文明の文化を記した書を読んだのだけど、なかなか面白そうな行事が有ってね。少し再現してみたんだ。そして、説明を求められても設計図通りに作っただけだからね」
「え？設計図通り？何が有った古代文明」
「まあ、そんな細かい事は気にしない。短冊に欲望を書けば叶うかもしれないし、根元にプレゼントが届くかもしれない行事となれば一度はやってみたいと思わないかい？」
「いやいや、短冊に書くのは目標とかで自分で達成するのが主だし、プレゼントは親が子供を喜ばせる為に準備したものだからね」
「卑劣漢！そういった事は知っていても言わないのがお約束と言うものだろう」
「いや、正論だけど、そこまで非難される事？」
「まったくもって、正大は情緒が欠けていて困る。これでは立派な紳士には成れないよ。あ、せっかくだから短冊に書いておこう」
「え？ちょっと待って」
〔立派な紳士に成れますように　　趙正大〕
兄様は手早く短冊にそう書くと、笹に吊るした。
待って、その書き方だと、まるで俺が願ったようじゃないか！
「なんだい？正大も書きたいのかな？それなら素直に言えば良いじゃないか」
「どちらかと言えば、せっかくだから書いてみたくはあるけれど、俺が言いたいのは」
「ノンノン。皆まで言わなくても分かっているよ」
そう言って、兄様は短冊を差し出してきた。
分かってないじゃないですか！

そして、言えなのか言うななのか、どっちなんですか?!
まあ、一通り叫んだ後に、短冊に願いを書いてみる。
とりあえず、〔平穏無事〕にしておくかな。
ええ、多くは望みませんが、これくらい良いじゃないですか。
まあ、たぶん叶わない気がするけども。
そういえば、兄様はどんな願いを書いたのかな?
こんな大掛かりな準備をしたのだから、とても気になる。
「そういえば、兄様はどんな事を書いたんですか?」
「ん?気になるのかい?あの短冊だよ」
そう言って、兄様が指示した方を見るとひときわ大きい短冊に目が行った。
〔アルマゲドン〕
「それは星に願ったらアカンやつ!」
俺の言葉が空に響く。

一年後。
また、兄様が怪しげな儀式の準備をしていると通報があり、俺は金鰲島の頂上に向かった。
そしたら、やはり去年も見た巨大な笹が有った。
しかも、もうすでにけっこうな量の短冊が飾られている。
俺も、去年は平穏無事に過ごせたので、また短冊に書いてみても良いかなとか思ったり。
たぶん、微妙に願いが叶った人達の口コミで短冊を飾る人が増えたのだろう。
「兄様。今年は短冊が、もうたくさん飾られてますね」
「ああ、正大も来たのかい?そうなんだ。なかなかに盛況だね。そして、色々な欲望が書かれていて見ていて楽しいよ」
「兄様。そんな事は思っていても心に仕舞っていてください」
そう兄様をたしなめつつも、他人の願望が少し気になるので短冊に視線が行く。
〔素敵な出会いがありますように〕

〔兄と弟と姉と妹がもう少し常識を身に着けますように〕
〔食べ放題〕
〔あの事は黙っているように〕
うん。普通の願いもあれば、聞き捨てならない心外な願いと、スルーしたい匿名の願いが混ざってる。
「ちなみに兄様の今回は？」
「あれだよ」
〔ディープインパクト〕
ああ、あの有名な競走馬だね。
あれなら願いたくなる気持ちも分かる。
そうですよね？
馬ですよね？
「一応聞いてみるだけですが、今回の言葉はどこで知ったんですか？」
「あれは笹の設計図に書いてあったんだ。なんだか面白そうだったから書いてみたのだけど、正大は意味が分かるのかい？」
「ええ、まあニュアンス的にって感じですが。しかし、古代文明の行事にそんな物騒な言葉が載ってたんですか？」
「行事の書と、設計図は別だよ」
そう言って、兄様が設計図の書かれた物を渡してくれた。
それに目を通すと、確かにあの巨大な笹の絵とアルマゲドンとディープインパクトの文字があった。
『ヤツが次々と各国を滅ぼしている。次は我々の番であろう。そうなる前に、あれが完成できて幸運だ。さすがのヤツもこの星を破壊されては困るだろう。我々を滅ぼすつもりなら、この星を破壊すると脅して交渉を試みるつもりだ。願わくば、これが使われない事を祈る』
そして、設計図の裏に誰かの独白が書かれていた。
うん。たぶん、あの笹は何かの起動スイッチなのだろう。
高い場所にあの笹を準備してアルマゲドンと記すと何かが起動するらしい。
そして、ディープインパクトは予備を起動させるキーワードのようだ。

まあ、古代文明の設計図だから、きっと大丈夫だよね。
笑えないけど誰かのジョーク作品かも？
そんな事よりも、短冊に何を書こうかな。
俺は知らんぷりをする事に決めた。

一カ月後。
会議室に主だった仙人達が集められた。
そして、通天教主様が集めた仙人達に声をかける。
「皆の者。緊急の招集に応じてくれて感謝する。今回皆を呼んだのは崑崙山から重大な情報が入ったからだ。では、使者どのもう一度詳しく説明をお願いしたい」
「かしこまりました」
そう言って、見慣れない人が礼をする。
通天教主様の言う通りなら崑崙山からの使者なのだろう。
俺としては妖怪になってから人を見るのは初めてなので、興味深く観察してみる。
うん。これくらいの相手なら勝てそうな気が……まてまて、思考が兄様に汚染されてバトル寄りになっているな。
真剣な顔をしているし、ここは真面目に耳を傾けよう。
「我らが教主・元始天尊様の千里眼がたまたま捕捉したらしいのだが、空の彼方から巨大な星が我々の住んでいる場所に向かっているそうだ。このままいくと一カ月もしない内に衝突する可能性が浮上した。この苦難を共に乗り越える為に崑崙山は、金鰲島に協力をお願いしたい」
そう言って使者は、再び頭を大きく下げる。
俺は偶然って怖いと他人事のように思った。
そして、あれとの因果関係を頭の中で否定しながら現実逃避をするべく、今日の晩御飯に思いをはせる。
近付く星より、今日のご飯だね。

お遣いを頼む感じに言われても困る

会議室は異様な静けさに包まれていた。
そして、使者は頭を下げ続けている。
星が落ちてくるから協力して欲しいと言われても困るし、他の面々はどんな事態なのかイマイチピンと来ていないようだ。
そんな静寂を破る声がした。
「使者殿。顔を上げるが良い。方針は決まっている。今回は緊急事態ゆえに我の独断で決めさせてもらった。元始には承諾したと伝えてくれ」
その言葉に使者は顔を上げる。
その表情は、どこか安堵しているようだ。
「ありがとうございます。では、お願いしたい事を詳しく説明させて頂きます」
「それには及ばない。先ほど読んだ元始からの手紙に詳しく書かれていたし、その時にはもう協力する事は決めていた。ここから先は我が説明しよう」
使者は、せっかく徹夜でプレゼンの準備したのに『おたくの社長から来たメールで、すでに話が通ってるからＯＫだよ』と言われ、あの努力と準備は何だったのかとむなしさを感じている社員みたいな顔をしていた。
「一応は、使者殿に仕事はさせてくれと書かれていたので、これで問題もないだろう」
いや、通天教主様そんな余計な情報を言って死体蹴りをしないでください。
ほら、使者が俺って本当に必要なのか存在意義に疑問を抱いだいて目が死んだ魚のようになっている。
俺なら、仕事が上手く行ったし、負担も減ってラッキーと思うけど使者は真面目系なのかもしれない。
「これから我々がどのように動くのか会議を行う。使者殿は、この会議で得た情報を元始に伝えて欲しい。協力はするが、おそらく連携は

無理であろうから、しっかりと聞いて欲しい」
使者の目に光が戻ってきた。
そんなに仕事が欲しいものなのかね？
俺には、ちょっと理解出来ないかも。
「まずは、この件に関して崑崙に協力するのは決定である」
まあ、通天教主様がお決めになられた事なら反対する者はいないだろう。
この場にいる者達から反対の意思を感じられないので、協力に異議を申し立てる者もおらず静かな肯定が会議室を包む。
「次に現在、どのような状況なのかイマイチ把握できておらぬ者もいるので簡潔に説明しよう。星が降ると巨大な宝貝合金で頭をカチ割られるのと同じくらいのダメージがある」
それスケールが下がっているけど、控えめに言って死んでしまいます。
しかし、身近な例えが出て理解できたのか焦りと恐怖で会議室が騒然とし始める。
「静まるように。話を続ける。元始の手紙によると、一年ほど前に趣味の天文をしていたら、偶然怪しい動きをする星が現れたそうだ。そして、それと同時期にこの大陸の複数か所から巨大な術が行使されている反応が出ていたらしい。それは、我々も把握していたが反応があるが無害だった為に放置および優先順位の低い案件となっていた」
一年前って言うと、兄様が七夕を始めた頃ですよね。
たぶん関係ない。
きっと関係ない。
「元始も下手に手出しして問題が発生しても対応できないし、どのような術なのかも分からない事から静観を決めていたようだ。それでも、星が怪しい動きを見せているし大きくなっているので凶事ではないかと警戒を続けていたそうなのだが、二カ月前くらいにその星が我々の住む場所に向かっている事が千里眼をたまたま使って気付いたらしい」
けっこう前に気付いたんだね。

恐らく、その術の反応がある場所が怪しいと分かっているのなら、崑崙単独で解決できそうな気もするのだけれども。
「なので、とりあえず、術の反応が有る場所を調査した結果。五つの発動点を結ぶと五芒星（ペンタグラム）の形を描き、それが星を呼びよせている事が分かったらしい。しかし、それぞれに防衛機能が設置されており、うかつに突撃できないでいたようだ」
かなり慎重だね。
味方の犠牲が出るのをためらったのかな？
そして、せっぱ詰まったから金鰲に協力を要請したって事か。
今更協力を要請されても困ってしまうよ。
まったく仙人界の双璧を自負するのなら、もっと頑張って欲しいものだ。
兄様が原因かもしれない事から、目をそらしつつそう思った。
「しかし、一カ月前に、同様な術の反応が新たに発生し、星の進行速度が上昇したらしい。もはや、猶予は少ないと見た元始が、金鰲島に使者を派遣し、自らは太上老君に協力を請いに向かったそうだ」
一カ月前？
偶然って怖いね。
俺は、何も知らないし関係ないし悪くない。
嫌な汗をかきながら、横目で兄様の様子を見ると涼しい笑みを浮かべていた。
むしろ、これからの展開にワクワクしているようにも見える。
その余裕を少しで良いから分けて欲しいです。
「まあ、太上老君の協力を簡単に得られぬだろうが、それは元始に任せるとしよう。そして、我々に頼まれたのは先に発動した術の破壊及び無効化だそうだ。詳しい場所は調査済だったようで手紙に記されていた。後に発動された術に関しては崑崙が攻略に向かうそうだ」
なるほど、お願いするのだから、ある程度調査済の場所を頼んで来たのか。
まあ、それなら一応こちらに配慮をしたって事になるのかな？
「そして、これより術の発動点に向かう者を発表する」

あ、考え事をしてて重要な事を聞き逃したら困る所だった。
「金鰲島でも実力の有る、張紹、姚斌、金光、白礼そして趙正大にそれぞれ術の発動点に向かって貰う」
え？張紹さん達なら話は分かるけど、俺まで単独ですか？
ここで異議を唱えるのは空気読めてない人になります？
それよりも、俺よりも明らかに強い兄様は？
そんな俺の疑問に答えたのか通天教主様の言葉が続く。
「万が一、あれが落ちてきた場合。我と趙公明が元始と協力して破壊する。残った者達は、結界の強化や生存率を上げる宝貝の開発に勤しむように。以上だ」
星を破壊するだなんてカッコイイ。
これなら、俺がサボっても問題ないよね？
え？ダメだって？
リスクを考えると、ああ大見得を切ってるけど、巨大な星って破壊できるものなの？
それよりも、星を呼び寄せている術を破壊した方が、リスクは少ないと思うべきじゃないかな？
まあ、破壊した場合に不足な事態が起こるかもしれないから最大戦力の通天教主様と兄様を温存するのは、良い選択なのかも。
でも、俺よりも強いやつなんていくらでも居るような。
そう、例えば姉様達とか。
いや、冷静に考えると巨大な乗り物とか準備しないと姉様達は遠征には向かない気がしてきた。
どちらかと言えば、防衛や迎撃が得意な気がする。
決して、マドンナ姉様がネックになってるとか思ってませんから。
その事だけは間違えないように。
あとは、他の仙道だけど……あれ？
下手したら俺より弱い？
そんな彼らに、攻略を任せて俺はぐっすりと眠れるのだろうか、いや眠れる訳がない。
仕方ない。

気が進まないが、未曾有の危機を乗り越える為に頑張ってみますか。
そんな決意をするも、現実逃避をする材料を探す為に回りを見ている俺がいる。
そして、なんとなく視線を向けた先で、通天教主様が使者にけっこう厚めの手紙を渡している。
たぶん、元始天尊様が通天教主様に書いた手紙レベルに、今回の会議について詳しく書いてそうな雰囲気の有る手紙だ。
そして、使者もそう思ったのか目が死んでいた。
使者さんガンバ。
俺も頑張るから。
うん。きっといつか活躍できる日や出番があるだろうから。
たぶん（無責任）

兄様なにか道具を出してよ「まったく正大は、しようがないな」

俺は全力で兄様に泣きついている。

「兄様、何か宝貝を出してよ」

「まったく欲しいからって、頼めば出して貰えると思うのは考えが甘いと言わざるを得ないね」

「いや、マジで命の危機なんだって。今回の任務は初めての単独遠征に選ばれて良いレベルじゃないから。ほら、今回はどうせ縛竜索は使わないでしょう?それで良いから貸してください」

「正大だって、いくつか宝貝を作っていただろ?それで頑張ってくれたまえ」

「いやいや、確かにいくつか作ったけど、光るだけとか消臭や消音が出来るだけの貧弱な宝貝で、どう戦えと?」

「言っておくが、スタンド……じゃなかった。宝貝に強い弱いの概念はない。ようは使い方次第さ。ぶっちゃけると最終的には宝貝なんて使わないで素手で殴った方が」

「そんな身も蓋もない。宝貝の能力バトルが売りなのにアニメ化したら戦闘がほとんどカットで回想や独白や会話がマシマシになってたくらい酷い」

「正大。それ以上はいけない。(この二次に)ブーメランが刺さっている」

「はっ!冷静じゃなかったとは言え、俺は何を言っているんだ」

こんな感じで、兄様に泣きついている。

何故泣きついているかと言うと、使者が帰った後に開かれた本当の会議が原因だ。

「ふむ。使者殿は無事に金鰲島を発ったようだな。では、改めて会議を開く。崑崙との関係を保つ為にも使者殿に聞かせられない話も有る」

えーと、何かきな臭い話でしょうか？
「まあ、これは崑崙側も行うだろうが、今回の目標から技術や情報を得たいので可能な限り回収できるモノは回収するように。元始からの手紙によると千里眼を妨げられて術の発動点の情報収集に苦労したらしいからな」
まあ、相手より良い位置に付く為には、これくらいはやらないとね。
こんな俗な話は、確かに使者がいる時にはしにくい。
「そしてこれが本題なのだが、情報収集の為に派遣した仙道が戻らなかった場所が一か所あるそうなのだが、もし生存しているようなら保護して欲しいらしい。その場所に誰が向かうかが問題だ」
「私は遠慮したい。同胞でもない人間を助けるのは」
「同じく」
「その考えに同意する」
「「答えるまでもない」」
皆なかなかに冷たいです。
とりあえず、人間と妖怪の溝が深い事が分かる答えだね。
これは本当に使者に聞かせられない話になる。
まあ、俺自身は他の皆と違って人間に隔意は無いけど、積極的に行きたくないな。
むしろ、遠征に行きたくない。
「では、その場所に趙正大に行って貰おう。もし生存しているようなら保護も頼むぞ」
「何故に?!」
「肯定も否定もしないのであれば、答を出さなかった者が選ばれるのが道理であろう。それに反応を見るに人間に対して他の者達と違い思う事も無いのであろう？」
あ、失敗。
明確に否定すると、ちょっと可哀想かなと思った俺が馬鹿でした。
そうか、肯定も否定もしないと押しつけられるのか。
なあなあで済ませようと思う性格が裏目に出た。
まあ、でも保護くらいならしても良いかな？

崑崙について少し興味があるし、もし生きているなら話をするのも悪くないかもしれない。
「ちなみに、先ほども言ったが、千里眼ですら妨害に有った為に確認は出来なかったらしいのだが、他の四か所から戻った仙道からの情報が類似する事から、戻らなかった場所も同様な可能性が高いと推測したらしい。しかし、仙道が戻らなかったからには、それなりに危険な可能性も有るとのことだ」
いや、それは絶対に危険なフラグですから。
やっぱり、その場所に行く人はクジ引きで決めませんか？
無理ですか？
そうですか。
「それでは、崑崙側が持ち帰った情報を改めて、共有する」
俺の思いをスルーして会議は続いた。
そして冒頭に戻る。
「とにかく、何でも良いので戦力アップを要望します」
「しょうがないな。余化と江を連れて行くと良い」
「よし、メイン武器とメイン盾ゲットだ。これで勝つる……ってな訳ないでしょう！」
「何でも良いと言ったじゃないか」
「まだ、妖ゲツにもなってない二人を連れて行くとか、足手まといでしょう。むしろ守る事を考えると戦力ダウン？」
「二人とも、なかなか才能はあると思うんだ。きっと何かの役に立つはず」
兄様は、明後日の方角を見ながらそう言った。
ちょっと目を見てお話しましょうか？
たぶん荷物になるとか思ったのでしょう？
「僕も遠征に行きたかったんだけどね。通天教主様が言うように万が一もあるから、ああ悩ましい」
「いや、実際は星を破壊できるかもしれない事にワクワクしているのでしょう？」
「おや、バレてしまってはしょうがない。誰か失敗しないかと期待し

ている」
「俺が失敗しそうだと思ってる顔だ！兄様、宝貝貸してください。マジで」
兄様は、ため息を吐きヤレヤレとポーズを取ると言った。
「かわいい弟に、ここまで頼まれたのなら仕方ない。縛竜索を持って行くが良い」
え？ダメ元で無理と思いつつも泣きついてたけど、今貸してくれるって言った？
俺は歓喜しながら、兄様の気が変わらない内にと縛竜索を持って急いで旅立つ。
だから、兄様が放った小さな一言を聞き逃していた。
「楽に攻略したいなら、それに頼るのは間違いだと思うけどね。僕ぁ」

たまには活躍したいと願うのは間違っていますか？

金鰲島から旅立って、もう九日目。
目的地まで徒歩で向かっているのだけど、いつも兄様の気球で一っ飛びで行けたから遠征を甘く見ていた。
あの気球便利過ぎだし、移動速度速過ぎない？
普通こんなに移動に時間がかかるなら、崑崙からの連絡が遅れたのは仕方ない事かも。
そんな考察をしながら、俺は貰ったコンパスの指す方向に真っすぐ進んでいる。
この先に目的地があるのだけど、コンパスのナビは川が有ろうが森が有ろうが山が有ろうが谷が有ろうが、真っすぐ進むように指示を出す。
ちょっとこれは過酷な旅じゃないでしょうか？
そしてさらに途中で空気読めない妖怪とか獣とかが襲ってくるから余計に時間がかかった。
今回は同時に攻略する予定なので、明日までには目的地に着かないといけない。
あれ？もしかして、このまま行くと俺が最後？
遅刻したら何か問題が発生するのだろうか？
まあ、ちょっとくらいは大丈夫だよね？
そう思いながら夜空を見上げると、月とは別に大きな星が見える。
あれが落ちてくると思うと、身震いせずにはいられない。
遅刻ダメ絶対。
俺は眠るのを諦めて、コンパスの指し示す場所に向かう歩を速めた。
十日目の朝に、俺は目的地の近くまで着けたようだ。
さっきからコンパスの針がクルクルと回っている。
一瞬壊れたのかと思ったのだけど、たぶんゴールに違いない。
何故なら、不可思議な光景が目に入ったからだ。
崑崙の前情報によると、防衛機能は何者かが近づくと石の雨が降り

注ぐ操作系だと聞いていた。
だけど俺に見えるのは、草も木も土も色々な物が石化している光景だ。
そして、なんか人型の石像が見えるのだけど、アレが崑崙から保護を頼まれた仙道なのかな？
正直な感想、手遅れな気がする。
そんな悠長に考え事をしている俺に光線が向かってきた。
俺は、とっさに金光さんから教えて貰った術で光線の軌道を逸らす。
すると、その光線を浴びた樹木が石化を始めたのだ。
危ない、この術を習得していなければ即死だった。
そして、光線が飛んで来た先に視線を向けると、半球状の皿みたいな物を三つの石碑が支えるストーンヘンジのような物体が有る。
そして、その物体は俺に向かって、再び光線を放ったのだった。
しかし、先ほどの不意打ちなら当たったかもしれないが、今回は来ると分かっていたので術で簡単に逸らす。
それでも、俺に向かって執拗に光線を放つが、俺に当たる事はない。
もしかして、今回のミッションは楽勝？
たぶん、アレを無力化して術の制御を止めれば良いんだよね？
ついでにアレを持って帰れば、通天教主様の指示も完遂して、俺の評価もうなぎ登り？
ふふふ、まったく笑いが止まらない。
そんな余裕をこいていると、謎の物体が浮かび上がる。
そして、勢い良く三つの石碑で地面を砕き、そして出来上がった巨大な岩を空に舞い上げた。
そんな巨大な岩が空に昇ったのなら、何が起きるか答えは明白だ。
俺は、急いで飛びのくと、さっきまで自分がいた場所に巨大な岩が落ちてきた。
その衝撃は、ちょっとした脅威です。
そんな俺の内心を知ってか知らずか、謎の物体は地面を砕き次々と岩を空に打ち上げる。

え？ちょっと勘弁して欲しい。
前情報だと、石の雨でしたよね？
これは控えめに言っても岩の雨ですよ？
俺は、文句を言いながら岩に潰されないように回避に専念した。
しかし、このまま行けば岩に囲まれて圧死するのは目に見えている。
ここで受け身に回るのはまずいと思った俺は、兄様から借りた縛竜索を構えて、降り注ぐ岩を打ち据えた。
すると縛竜索の方が威力が上だったのだろう、簡単に岩を砕く。
まったくもって、借りてて良かった縛竜索。
だが、俺は前情報をすっかりと失念していた。
砕かれた破片は、操作されているかのように俺に向かって鋭く降り注ぎダメージを与えたる。
痛い痛い。
でも、突破できないほどのダメージじゃない。
俺は、降り続ける巨大な岩を縛竜索で破壊し続けた。
そして、降り注ぐ破片を無視して突き進み、ついには謎の物体に肉薄できる距離まで近づく。
謎の物体は、俺がここまで接近できると思っていなかったのか、戸惑い動きが止まる。
そのチャンスを逃すはずもなく、俺は縛竜索を振るう。
その攻撃は見事に当たり、その衝撃で謎の物体は倒れ伏した。
「作戦は中止だ。◇☆■○△」
何故か俺の口から、謎の言葉が出てきた。
え？何を言ってるの俺？
その言葉を謎の物体が聞いたのだろうか、辺りに展開されていた術が解けていくのが分かる。
よく分からないが、これで遠征は完了したのだろう。
あれ？俺、コイツの事知ってる気がする？
確か、秦完一（しんかん）番機だったような。
そうなると……前の俺がこの術の開発に携わっていた可能性が。

いやいや、今の俺は知らない。
まったく無関係です。
この事は、墓まで持っていくべきだね。
そんなこんなで事実を否定していると、倒れていた秦完が起き上がった。
今のコイツからは、戦う意思を感じられない。
とりあえず、通天教主様から可能なら何か持って帰れと言われていたので、勧誘してみますか。
うん。色々と語りかけたけど、全部無反応です。
試しに、崑崙の仙道を治せるか聞いてみたら、戻してくれたから敵対はしてないと思いたい。
まあ、金鰲島に来るか聞いてみたら、うなずいたように見えたので連れて帰る事にしました。
拒否されても、縛竜索でグルグル巻きにして引きずって帰る予定だったので、自発的についてくるならラッキーと思っておこう。
その後、崑崙の仙道が無事に目覚めたので、この場所の攻略は完了したと伝える。
その仙道は、攻略と救助に対して感謝の言葉を述べ崑崙には自力で帰れると言うので、俺は金鰲島にそのまま帰ることにした。
保護を頼まれてたから、連れて帰るか崑崙に送るか迷っていた俺としては、どちらも面倒だったのでラッキーだ。
ちなみに、余談だが、お腹がすいてるだろうと、保存の効く謎の干し肉をすすめたら、崑崙は食事に制限があるらしく断られた。
食事に制限があるだなんて、崑崙じゃなくて金鰲島で良かったと心から思う。
代わりにドライフルーツをあげたら喜んで食べていた。
こんなに歓喜するなんて崑崙の食事情は、きっと泣ける現状なのだろうと失礼な事を思ったのは内緒だ。
そんなこんなで、十日後に無事に秦完と金鰲島に帰ってくる事ができた。
ちなみに、張紹さん達は、もう帰ってきていて、会議室にいるらし

い。
おっと、俺が最後か。
急いで会議室に向かうが、秦完の事をどう説明しようか？
まあ、なるようになるだろうと思い会議室に入る。
皆無事に帰って来たようだ。
ボロボロな格好なのは俺だけだったので泣ける。
全員揃ったのを通天教主様が確認すると、話を始めた。
「始めに術の解除はご苦労。崑崙も無事に攻略を済ませ、この大陸に有った巨大な術は解除された」
兄様は、誰か失敗しないか期待してたけど、そんな事はなくて本当に良かった。
「しかし、依然として巨大な星はこちらに向かっている。恐らくは術を解除するのが遅くこの地に星が落ちて来るのは避けられないだろう」
通りで、帰ってくるまでに星が大きくなってる気がした訳だよ！
気のせいで有って欲しいと思っていた俺の願いは容易く砕かれた。
これは、兄様マジで頼みますよ？
フリじゃないですからね。

晴ときどき隕石。ところによっては、虹や雷やブラックホールや蠢く闇が見れるでしょう

カップに注がれたロイヤルミルクティーを軽く口に含む。
その香りと味を楽しみながら、ビーナス姉様が作ってくれたクッキーを頬張る。
実に、ノンビリとした空気が流れ、雲一つ無い空は天気も良く野外においても、最高のお茶日和だ。
まるで先日までの殺伐とした遠征を癒してくれるかのようなくつろぎの空間が、そこには有った。
そして、見える範囲で遠征組がアンティーク感のある机や椅子で、お茶を味わうなど思い思いにくつろいでいる。
それらが有る意味遠征の御褒美とも言える休暇の中、誰かが言い出したのか、皆どうやって攻略したのかが話題に上がった。
自分の武勇伝を語りたいのか、他のメンツがどのように攻略したのかが気になるのだろう。
「正大が作った砂漠が近くに有ったので、砂の津波で全て押しつぶした」
「近くに活火山が有ったので、そのマグマを利用した」
「こちらは趙正大が作った光の宝貝を応用して、新しい宝貝のテストをついでに行った。領域には入らず遠くから光線で無差別に焼き払ったぞ」
「私も趙正大の宝貝を役立たせて貰った。全ての影ある者達は、その影と共に滅びる。所詮は知恵無き者ゆえに、平気で自身を傷つけあっていたわ」
えーと、環境依存の大規模破壊が二つに、新作宝貝を用いた無差別破壊が二つな訳ですね。
これは酷い。
俺も人の事は言えないけど、悪評待ったなしの所業である。
それに、技術や何かしらの物を回収するように通天教主様に言われ

たのに、その指示を聞く気ゼロな行動です。
「通天教主様は可能ならと言っていた。結果として不可能になったそれだけの話だ。それにこれだけの事が出来るのだと悪評どころか他の妖怪達に一目置かれるだろう」
え？そういった解釈で受け取って良かったの？
あと、悪評に関しては、けっこうやらかしてた自分も普通に評価されていたり、他の奴らから凄いと称えられていたりしてたのは、皮肉じゃなくて本当に褒めていたのか？
あれ？じゃあ、アレとかアレとかアレも隠蔽しなくて良かった感じ？
さすが妖怪達で作りあげた一大勢力は違いますね。
人間が主だって作りあげた崑崙での評判は怖くて聞けません。
助けた崑崙の仙道に名乗ったら、距離を置かれたのは気のせいだと思いたい。
「そもそも危険な場所をわざわざ真っ正面から攻略しようとするのは趙公明様くらいだと思っていたのだが。さすが兄弟と言うべきか同類と言うべきか」
あ、なんか話題が俺の事に切り替わったようだ。
そして、兄様と同類扱いとは失礼な。
とてもじゃないが、思考も実力も後数百年修行しても追いつける気がしない規格外ですから、同列に並べられるなんてとてもとても遠慮したい。
まあでも、兄様に同行して攻略したり、修行して危険地帯に行くと真っ向から攻略してたから、今回も普通にそうしようと思ってしまった自分が怖い。
思った以上に汚染されている？
「私の領域では、逃げの一手だったのに、ずいぶんと成長したみたいですね。少し見直しましたよ」
あれから、いったい何十年が過ぎたと思ってるんですか。
さらに妖怪にも仙人にもなって成長してないとか、自分の才能の無さに憤死するね。

むしろ成長してなかったら、途中で物理的に死んでもおかしくない日々がフラッシュバックする。
いけない、この事は深く考えてはいけない。
「私は趙正大が一番楽に攻略できると思っていたのだけど、まさか正攻法で行くとは思っていなかった」
「そうですね。地脈を破壊するのは大得意だと聞き及んでいるので、まずはエネルギーの供給源を絶つだけで終わりそうな感じも」
その手が有ったか。
じゃなくて、地球環境や地脈を破壊するのが大得意とか誰が言って回ってるんですか？アスタ〇ス？知らない植物ですね。
なんか俺が想像以上に悪評が流れてる気がするのだけれども。
いや、金鰲島では、名声だったり活躍だったりなのか？
まあ村八分とかにされてないし、妖怪達からの評判も悪くないなら気にしなくも良いかもしれない。
人間達からは、どうだって？あー、あー、聞こえない。
そんなことよりも、なぜその方法を思い付かなかったのか気にしようぜ。
次も、あんな危険な仕事をさせられた時に思考が狭まって同じことをしないように自分を省みないと。
とりあえず、原因は兄様から縛竜索を借りたからかもしれない。
いきなり外部のせいにするのはどうかと思うけど、それが真っ先に浮かんだ。
貸して貰えなかったら、その方法も考慮する余地も有ったけど、なまじ強力な宝貝を手に入れたから脳筋一直線に走った可能性が。
あれ？兄様は、もしかして安易な方向に走らないように宝貝を貸した可能性も？
まさか考え過ぎだよね。
俺は、そんな思考を振り払うように天を仰いだ。
空は変わらず晴れわたっていた。
それは良いことだが、そのせいで空を覆うような巨大な隕石まで、はっきりと見える。

ぬおぉぉ。
思わず四つん這いになって、地に伏せてしまう。
せっかく意識の外に追いやっていたのに、うっかり見てしまった。
そんな中、他の者達はまたかと呆れている。
「まだ割り切れてなかったのか？」
「いやいや、普通にあんなのが頭上に有ったら落ち着かないから。皆もよく平気でいられるな」
「通天教主様達でも無理なら、運命は決まったような物。ここは、我らのトップ達を信用してはどうです？」
「それは、そうだけど」
言葉を言いよどみ、またチラッと空を見ると変わらずそこには巨大な質量が見えた。
心なしか、大きくなっている気がする。
これは、もうタイムリミットも近いはず。
皆の落ち着きを見ると、さすが教主とその右腕の信頼たるや凄いの一言に尽きる。
たぶん、俺が担当していたら誰かしらが『もうダメだー。おしまいだー』とか言ってそうな場面を想像して、少し落ち込んだ。
俺としても、信用したい所だけど、こればっかりは、どうにかできるイメージがわかない。
そんな風に頭を抱えていると、兄様や通天教主様がいるであろう場所から虹が隕石へと伸びて行った。
いよいよ始まったか。
俺は、その光景を祈るように見守る事にした。

ｓｉｄｅ???
金鰲島と崑崙山の中間にある浮島に三人の男がいた。
そこは緊急の会談の為に作られただけの殺風景な浮島だったが、空に浮かんでいると言うだけで、仙人達のとんでもなさが伺える。
そんな中、吸血鬼のような恰好をした男が声を出した。
「元始よ。太上老君は説得できたのか？」

「すまぬ。説得は無理じゃった。あの方は、どうにもやる気がなくて困る」
その質問に、禿げてるだけでなく頭が異様に長い老人が答えた。
いかにも仙人といった風格をした老人で有ったが、その顔は申し訳なさそうな表情を浮かべている。
「あの方も困ったものだ。仕方ない。どうせ太上老君の説得は無理だと思っていた。ここは我らだけで事に当たろう」
酷い言われようだが、口を開けば『働きたくないでござる』や『だるい。寝ていたい』や『脳を働かせるだけでカロリーが』と発言し、それだけを聞くとダメ人間に感じられるから仕方ない。
実力は確かなのだが、そんな者に期待するだけ無駄、お互いにダメ元で説得に向かったのは合意の上だった。
「もう残された時間は少ない。趙公明よ。一番槍は任せた。期待に応えよ」
「巨大隕石に立ち向かう勇士。何て素晴らしいシチュエーションなのだろうか。僕は、この時を。金蛟剪を全力で振るえる機会を僕は待っていたのだから」
いかにも、おフランスな恰好をした男が喜びを表現するかのように両手を広げて笑顔を湛えていた。
その相溶は、気のせいか異様にキラキラとしており、空耳だろうがラーラーと豪華な音楽が聞こえる気がする。
「通天よ。おぬしの部下は大丈夫なのか？」
「あれで、金鰲島で、群を抜いて優秀な者だ。心配はない……はず」
「いや、わしは頭を心配しておる」
その切り返しに、通天と呼ばれた男はノーコメントを貫いた。
本当に優秀な部下であるなら、もっと擁護しても良いと思うのだが、普段の言動が言動なので、何とも言えない状況に。
金鰲島には、基本的に頭がパッパラパーな妖怪が多数在籍しており、その中でも趙公明は合理的で理性的な思考ができ、なおかつ色々な分野で如才なく実力を発揮しており重宝できる存在である。
だが、出来るからと言って合理的で理性的な行動をするかと言え

ば、それは間違いだった。
下手をすると頭の弱い妖怪よりも、とんでもない事をする場合が非常に多い。
どうせ負けるなら議論するまでもないと、男は咳払いをして露骨に話題をそらした。
「趙公明よ。そろそろ始めて貰っても良いか？」
「ああ、もうショーが開幕する時間かな？僕の方は、準備は万全さ」
そう言って、巨大な鋏を趙公明が掲げた。
その鋏から虹色の光が隕石に向かって伸びて行ったと思うと、それは七色の龍に変わり天へと昇っていく。
「僕の最強華麗技……レインボードラゴン！」
その輝く龍は、巨大隕石に食らい付いた。
その攻撃は、表面をわずかに砕いただけだが、質量の有る隕石を徐々に押し上げているようにも見える。
「趙公明よ。このまま破壊。もしくは、押し返す事は可能か？」
「少し不味いかな。おそらく僕の方が先に力尽きる」
「あの隕石は想像以上に頑丈で有ったか。このまま我らが加勢したとして破壊できるか怪しくなってきたぞ」
そんなやり取りをしながら趙公明は、ちらりと視線を元始と呼ばれた老人に向けた。
「フッ……必要な場面で出し惜しみだなんて、僕らしくもない。これが僕のフルパワーだ」
そう言って、鋏を再び天高く掲げたと思うとジョキジョキと開け閉めを繰り返した。
すると隕石に喰らいついていた七色の龍達が一斉に離れて、こちらへとユーターンを決める。
残りの二人は趙公明が乱心したのかと一瞬焦ったが、そうでない事がすぐに理解できた。
何故なら、七色の龍が一つにまとまり先ほどとは比較にもならないエネルギーを放つ黄金の龍へと変貌を遂げたのだから。
「これほどまで出力が上がるとは」

「むぅ。これならいけるかもしれん」
二人の期待に応えるかのように黄金の龍は隕石を貫く。
その結果を見た趙公明は、一人つぶやく。
「ちょっと勢いを付け過ぎたみたいだ」
隕石を貫く事に成功したのだが、勢いが強すぎたのか隕石は破壊されることなく見事に真っ二つになっていた。
それでも、まだまだ十分な質量を保ったままの隕石が二つになっただけで、地上に落ちた場合の脅威度はさほど変わっていない。
それでも、趙公明は落ち着いた態度で、キンコウセンを開閉した。
「急速転回。まずは右側のを破壊する」
その指示を受けて、黄金の龍は転回し右側の隕石に喰らい付く。
右側の隕石は、今度こそ粉々に砕け散った。
まだまだ、地上に降り注げば惨事を引き起こしそうな大小様々な破片が残っているが、そんな物に構っている暇は無い。
そんな物とは比べ物にならない大きさの隕石が残っているのだから。
「次は左か……くっ」
突然、趙公明が膝をつくと、黄金の龍は空気に溶けるように消えていった。
「まだ残っているのに限界とは。華麗に決めてエンディングのスタッフロール流してドヤ顔で閉めたかった」
まだまだ余裕が有りそうな発言をしているが、見るからに限界だと分かった通天は、その発言をスルーして労いの言葉をかける。
「おぬしは十分な活躍をした。御苦労である。後は我らに任せるが良い」
「しかし、通天よ。恐らく、あの残されたデカブツはワシら二人でなんとか破壊出来るか出来ないかギリギリじゃぞ。そして、破壊出来たとしても、残された破片はどうする？」
「仕方なかろう。大事の前の小事である。今は、被害を抑える選択をするべきであろう？」
「確かに、あれくらいの破片であれば仙人界は無事じゃろうが、降り注

いだ地上はタダでは済まん」
「可哀想ではあるが諦めてくれ。我らに選択の余地など無い」
「しかしじゃなぁ……」
そう問答を繰り返す二人だが、選択の時は刻一刻と迫っている。
「もう時間がない。行くぞ。覚悟を決めよ元始」
「待て通天。あそこで、何か光っておらぬか？」
そこに視線を向けると眩しいくらいの光が轟音をたてながらくすぶっていた。
「あの光はまさか？」
「太上老君？」
そう問いかけるかけない内に、光は凄まじい音を鳴らし隕石へと向かって行く。
そして、光が収まると巨大な隕石が粉砕されていた。
だが、こちらも完全に塵と化した訳ではなく、地上に降り注げば十分に災害になるだろう大小の破片が数多く残されている。
「この破壊力は……おそらく太上老君だろう。まさか手を貸してくれるとは」
「それは後じゃ。残された破片だけでも、十分に驚異となる。ここは分担して処理にあたるぞ」
「うむ。久しぶりに本気を出すとしよう」
そう掛け合うと、元始と呼ばれた老人は黒い球状の物体を取り出した。
それにエネルギーを注ぎ込むと、その球は少し膨らんだかと思うと不気味な音を立てて分裂する。
それがしばらく続き、最初に取り出した球がかなりの大きさに膨れ上がる頃には、老人の周囲には無数の黒い球が取り囲む。
かたや、通天と呼ばれた男は、口にマスクをあてると全身を覆っているマントの色が黒く変色する。
すると、そのマントがまるで意思を持っているかのように波打ち、闇が広がるかのように黒い布の面積を広げながら男の周りで渦巻いていた。

「盤古幡最大出力。重力千倍！」
「六魂幡よ。隕石の破片を収束せよ」
その二人の掛け声に合わせて事態が大きく動く。
まずは、空に黒い点が現れたかと思うと次第に大きな球状になった。
すると大小様々な隕石が、そこをめがけて飛んで行く。
いや、吸い寄せられて粉微塵に粉砕されていた。
次いで、漆黒の布が獲物を求めるかの如く破片にまとわりつき、その対象を包んだかと思うと、どこに消し去ったのだろうか破片が消滅して行く。
そして、そのまま勢いを衰えさせる事なく空に広がり次々に破片を呑み込んだ。
もう、あの巨大な隕石はどこにも見当たらず、大量に有ったその破片も地上に降り注ぐ事はないだろう。
そんな中、趙公明は食い入るように二人の男が宝貝を使う様を見つめている。
そして、あの雷を放った太上老君へと思いをはせていた。

一方、その頃とある場所。
「久しぶりにアナタが働いている所を見ました。実に良い催し物でしたね」
男が語りかけるが、気だるげな男は反応を示さず眠る体勢に入ろうとしていた。
「おっと、お待ちなさい。久しぶりに弟子が語らいに来たのに無視はいけませんね」
「何？来てたの？私は疲れている」
「こんな楽しそうなものを私が見逃すはずが有りません。それと気になる事が有れば聞きに行かないと済まないたちでしてね。そして、アナタの疲労など私は知った事では有りません」
その答えに、気だるげな男は心底嫌そうな顔をして、あくびをした。
そして、ぞんざいにある物を男に投げつける。

男は危うげなくそれをキャッチした。
「それあげるから、帰ってくれる？キミの話は長くて疲れる」
「おや？よろしいのですか？これは先ほど、アナタが使っていた雷公鞭ではないですか。これほどの物をホイホイあげるとは」
「強大な道具を持っているから頼られる。今回は手を貸したけど、次は無いと言う意思の現れだと思ってくれて構わない」
「相変わらずイってしまってますね。まあ、そんな事をしてもアナタを求める声に変わりはないと思いますが」
「そんな事を言いに来たの？早く本題に入らないと、もう眠るよ？」
「おっと、そうでした。私が気になったのは、何故アナタは手を貸したのか、です。おそらくギリギリにはなるでしょうが、あの三名で対処できた気もしますし」
その問いかけに、気だるげな男は考えこむように目をつぶって、寝息をたてはじめた。
その反応に、男は声を荒立てたのは仕方ない事だと思う。
「起きなさい。まだ話の途中ですよ！」
「何？答えないと帰らないの？口を動かすのも面倒くさい」
「帰りませんよ。なるべく手短に済ませるので、お願いします」
「確かにギリギリ対処できたかもしれないけど、あの場合だと万が一も有った。あんな星が落ちてくるなんてイレギュラーが有れば、彼女が動く可能性が有ったから」
「ふむ。あの隕石は、本来予定になく、それによって何者かは分かりませんがその彼女が動く可能性を排除したかった訳ですね」
「そう。答えたから寝て良い？」
「ええ、構いません」
男は勝手に解釈して、ある程度スッキリしたのか、そう返事をして帰ろうとした。
「おっと、そういえば、珍しくアナタが宝貝の解析を行って何かを作っているそうじゃないですか？面倒くさがりなアナタを動かすだなんて、いったいどんな宝貝なのです？これは推測なのですが、今アナタが解析を行っている宝貝を報酬にイレギュラーに対応せよと何者か

に頼まれたとか？先ほどの答えだけだと理由としては少し弱いのではないかと思ったもので」

しかし、その問いに答える者はなく。

気だるげな男は、もう深い眠りに入っていた。

これは、早急に許可を出してしまった男の失敗である。

「まあ良いでしょう。この事は、次の機会まで取っておきましょう。一度に何でも知ろうとするのは、先の楽しみを失うと言うことですから」

ｓｉｄｅ　ｃｌｏｓｅ

これで今夜から安眠出来る……訳がない

無事に隕石が迎撃された。
俺の心配は何だったのだろうか？
さてと、風呂入って寝るかな。
いや～、これで今夜から安眠できるぞ！
はい。解散。
待て。そんな訳あるか！
あまりの衝撃に思考がフリーズしてたけど、あんなヤバい兵器が四つも有るとかキケンが危ない。
あんな兵器を扱える者が地上に少なくとも四名いるとか、恐怖で眠れぬ夜の日々ががが。
隕石の脅威が去ったと言うのに、この地上からは脅威が減ってないってオカシイ！
兄様の金蛟剪は何度か見た事があるけど、レインボードラゴンの上が有ったのには驚愕した。
レインボードラゴンに関しても、今まで見てた感じだと環境に配慮して手加減してたのは分かっていたけど、あの威力は怖い。
特に、黄金の龍は、たぶんだけど本気で地上に撃てば地球が割れるんじゃないかな？
そして、次に放たれた雷だけど、下手したら兄様の金蛟剪を超える破壊力を有しているように見えた。
今回は、単発だったけど、まさか連射できるとか、その状態のまま持続できるとか、そんなふざけた使い方とか出来ないですよね？
誰か出来ないと言ってよ！
そして、締めに見た二つの闇は、よく分からなかったけど、ヤバい物だと思う。
数多のそこそこ巨大な破片を何の問題も無く、全て処理しているのを見てるだけでも、近づきたくないと思ったね。
一つは全てを吸い込む感じの闇で、もう一つは全てを呑み込む感じの闇だった。

あんなに有った破片はどこに行ったのでしょう？
考えると深淵に落ちそうな気がしたので、深く考えるのはやめておこう。
いや、考えるのを止めても、俺の眠れる日々は帰っては来ない。
ここはリスクマネジメントを講ずる為にも、考察する必要があるはず。
まずは、兄様からだ。
身内だし、きっと大丈夫だと思う。
さすがに、全力の兄様を止めるイベントとか発生する訳無いよね。
ウン。キット、ナイヨー。
シンパイナイサー。
よし、問題が一つ片付いた。
次に行こう。
さてと我らがトップの通天教主様はどうだろうか？
関係は良好ですし、兄様がコネを持っているので、完全なる味方です。
敵対勢力には容赦はないですけど、傘下に加わった者達に対して粛清を行ったとか聞いた事がないので、この方も問題ないでしょう。
うん。あの件はしっかりと忘れたので、通天教主様に関しては一番心配がない。
次は、崑崙のトップである元始天尊か。
うーん。とくに接点がないから何とも言えないね。
とりあえず、崑崙とは協力関係にあるし、関係もすこぶる良好だから問題は無いんじゃないかな？
何か問題が有ったとしても、通天教主様の管轄でしょうし、俺が心配するのもお門違いかと。
お、いよいよ最後か。
よくよく考えてみたら、三人は全然心配なかったね。
すぐ隣に爆弾が埋まっている事が分かって焦ったけど、そんなに心配する必要がなくてホッとしたよ。
しかし、四人目は誰だろう？

そういえば、崑崙の使者が太上老君を説得すると言っていたような？

そうだとしたら、三大仙人がそろい踏みだったのか。

豪華キャストなので、個人的にはその場所を見てみたかった。

さてと太上老君に関してなんだけど、元始天尊以上に接点がない。

何と言うか、どういう人物なのかも情報が皆無。

通天教主様達とひとくくりに三大仙人と呼ばれている事しか分からない。

そんな人物に対してリスクマネジメントなんて取りようがないし、俺が聞く範囲で世俗の関わる噂や何かを行っているとかの情報を聞いた事はないし、噂好きの張紹さんの話題に上がる事すら無かった。

それどころか、あれだけの力がありながら、何かの勢力を築いてる訳でもなく、何かを掲げている訳でもない。

だから、たぶんだけど限りなく関わり合いになる可能性が低そうなので心配はないと思う。

だけど、太上老君の話をどこかで聞いたような？

あれは、まだ俺が植物だった頃だったと思うんだけど。

えーと、確か物は大した事無かったけど、どこか危険な場所から兄様がお土産を持って来た事が有ったような？

あ、思い出した。

確か、兄様が太上老君の池で、魚を釣り上げたと言って……うん。

この事は忘れよう。

俺は悪くない。

とりあえず、確執が有りそうな太上老君が、あの雷使いではない事を切に願う。

あの火力は洒落にならないからね。

でも冷静に考えてみよう。

あれからかなり時間が経ってるに文句や苦情や報復が無い事から、たぶん太上老君にとっては大した事では無かった可能性もあるし、兄様が犯人だと分からないまま事件が迷宮入りした可能性も十分にあり得る。

うん。これなら、もしかしたら心配ないかもしれない。
この考察で、俺の安眠が少しばかり帰って来た気がする。
まあ、次は、あのふざけた宝貝対策を考えたい。
俺の素晴らしい頭脳は、もう四つも思い付いたぞ。
まずは最初に敵対しない。
根本的な解決にはならないが、今の俺ではどう有っても相対した時点で悲惨な未来しか見えない。
とりあえず、まだ誰とも敵対してないので、現状維持が一番の対策と言える。
二つめは、あの攻撃に耐えらえるタフネスを身に付けるか、もしくは防御用か相殺できる宝貝や術の開発。
修行しただけで、あの攻撃に耐えられるようになれる気がしないし、あんな攻撃を防げたり相殺できる物を作れる気がしない。
これは現実的では無いけれど、やらないよりはマシと思われる。
三つめは、殺られる前に殺れ。
まさに暗殺。
ははは。返り討ちにあう未来しか見えません。
そして、下手したら世界全てを敵に回す可能性があるので、この案は却下されました。
そして、最後だけど、逃げる隠れる遠ざかるかな。
とりあえず、逃走や隠れる技能を上げておこう。
あとは、色々な環境でも生活できるようになる宝貝の開発や、隠れ家の建設も視野に入れておこう。
まあ、地球割りをされた時は、諦める方向で。
さすがに宇宙空間で生活できる気はしないから。
一応、これからの方針は決まった。
そして、一通り悩んで冷静になった俺は、ある名案が浮かんだ。
よくよく思い出してみれば、通天教主様と兄様は完全な味方な訳で、そんなヤバい宝貝や危険物は今回のように丸投げすれば良くない？
勿論、修行して自分で対処できるに超した事はないけれど、そんな

に焦る状況でも無いはず。
まだまだ、モラトリアムは有るのだから、頑張るのは来年からにしよう、そうしよう。
もう今年は、お腹いっぱいでやる気が出ません。
さてと、疲れてるし、もう休むかな？
あ、一応、通天教主様や兄様の御機嫌取りをしておく必要はあるよね。
この積み重ねが、きっと俺を救うはず。
そう決めると、呆けている他のメンツを覚醒させる為に柏手（かしわで）を打つ。
「みんな聞いて欲しい。通天教主様や兄様が見事に隕石を迎撃した。だから感謝や祝う気持ちを伝える為に、宴を開きたいのだがどうだろうか？幸い、この場にいる仙人は金鰲島に残されたメンツでは上位陣なので、準備や手配を行っても問題無いはず」
少しばかり時が経ち、俺が言いたい事が伝わると賛同の声が聞こえた。
「そうですね。我々が手配しないと、他の者達ではどうしようもないでしょう」
「ああ、あれでけの事をしたのだ。何もしない方が問題かもしれない」
とりあえず、みんなが協力的で良かった。
うん。ここは言い出しっぺが具体的な指示を出しておこう。
「まず姚斌さんは、歓迎や祝いの横断幕作成を。張紹は、会場の手配を。金光さんは、協力してくれる人員を集めた後に、張紹と合流して宴会の場を整えてください」
俺の指示に、三人が頷くと、それぞれの準備に向かった。
「私は料理が得意だが」
白礼が出来る事を自己アピールした。
あまり仲良くない相手なので、自分から申し出てくれて助かる。
「では、調理場に向かってください。俺は、食料庫の使用許可を出して、材料を運ぶ手はずを進めるので」
そう告げると、お互いに目的の場所に歩き出す。

少しして、食料庫が見えてくるが、いつもは閉じられているその扉が開いており、何人もの仙道達が食材を運んでいた。
この世の終わりだから最後の晩餐的な？
勝手に持ち出し？
金鰲島治安悪すぎ。
でも、傍からみたら、泥棒してるような後ろめたい空気や、強盗などの剣呑殺伐な気配を感じないし、俺を見ても慌てる様子もないので、運んでいる道士に訪ねてみた。
「えーと、これって許可は下りてるのかな？」
「はい。雲霄様からの指示です。ちゃんと通天教主様からの許可証も有りました」
「それなら良いのだが、とりあえず、どれだけ運ぶか聞いているか？俺も運ぶのを手伝おう」
「ありがとうございます。雲霄様から、全部。限界いっぱいと伺ってます」
「ぜ、全部？分かった」
「はい。場所は、調理場となります。では、自分はこれで」
これは嫌な予感がする。
ちょっと姉様に確認を急いだ方が良い気がしてきた。
俺は、持てる分だけ持って調理場に急いだ。
そして、たどり着いた調理場は戦場だった。
忙しく料理をするビーナス姉様とクイーン姉様。
鎖に縛られて、他の妖怪に抑えられているマドンナ姉様。
一歩バランスが崩れれば大惨事になりかねない世界がそこに有った。
そして、立ち入る隙がなく所在なさげにしている白礼。
俺は、それを無視して、ビーナス姉様が一息付くタイミングを見て話しかけた。
「ビーナス姉様。忙しい所すみません。この事は許可を取ってあるのは本当ですか？」
「あら正大。本当ですわ。お兄様が、あらかじめ許可を取ってらした

のよ。食料庫をからにするぐらい思いっきり豪華な御馳走を準備するように言われてますの。これが許可証ですわ」
俺は、許可証を受け取り軽く目を通す。
それはまさしく、通天教主様の押印がされた正規の物だった。
でも、書かれている文を見て少し心配になる。
【食料庫の使用を許可する。ただし限度を考えるように】
などと書かれている。
だが、兄様や姉様の指示は限度を考えていないような気がする？
「あの限度を考えるようにと書かれてるのですが？」
「大丈夫ですわ。限界を超えないようにするので問題なくってよ。ぴったりと作り切ってみせますわ」
「いや、たぶん通天教主様が伝えたいのは、そんな事じゃなくて」
「ああ、そういえば正大。会場の準備は、もう済んでおりまして？お兄様は、正大なら勝手に準備するはずだから問題ない。してなくても、後でやるように伝えて欲しいと言われてますの」
「ああ、はい。とりあえず、他の方に準備するようにお願いしてます」
「それは、結構。あら、そういえば、お兄様から手紙を預かってましたわ」
そう言って手紙を渡された。
【親愛なる弟。趙正大へ。キミがこの手紙を読んでいる頃には、隕石の迎撃が成功していようが、失敗していようが、食料庫は空になっているであろう。この未曾有の食糧難から金鰲島を救う男はキミだと、僕は思う。さあっ！頑張って食料を調達して来てくれ！未来の僕らは、お腹をすかせて待っている……はず。麗しの兄。趙公明より】
ああ！やっぱり、問題を丸投げして来た！
丸投げは良くないと思います。
そう考えると、ブーメランが俺に刺さるが問題無い。
自分は良くても、相手にされると困るのが世の常だから。
食料の調達は面倒な仕事だよ。
まずは、探す事からだし、目的の食料が戦闘力を持っている事がほとんどだし、最後に大量にあると運搬が死ねる。

これを単独でしろってのは、ちょっと無茶が過ぎると思います。
そう、頭を抱えていると、二枚目の手紙が有る事に気がつく。
【許可証。これより、趙正大を隊長に、小規模な食料の調達隊の編成を許可する。各員、暇が有る者は協力するように】
通天教主様から許可証が入っていた。
兄様。さっきは文句を言ってすみません。
微妙に弟思いの兄で、微妙に助かりました。
それと通天教主様、許可ありがとうございます！
だけど、冷静に考えると兄様の無茶振りが原因だからプラマイゼロだよね？
むしろマイナス？
でも、兄様との関係は良好で居たいので、これは必要経費？
俺は苦悶の表情を浮かべた。
「「趙正大。食料の調達なら手伝おう」」
「何故そのことを？」
「普通にしゃべっていた」
「それも、かなり大きな声で」
うわ。心の声がダダ漏れだった？
俺、何て言ってたか凄く気になる。
とりあえず、深く考えるのは止めておこう。
ここは仕事に専念するんだ。
決して現実逃避じゃないから。
そう、手間を減らすには迷っている暇はない。
即決即断即採用。
「ああ、お願いしたい。あと、何人か狩りが得意そうな者に声をかけてみて欲しい。俺は運搬が得意な者を探してくるから」
白礼は返事をして、狩りのメンバー集めに向かった。
しかし、アイツなんで急に協力的に？
その思惑がつかめない。
結局、何を企んでいるのか分からない白礼と数日食料調達を共にする事になり、俺は無駄に不安と警戒心が煽られて、けっきょく眠れぬ

日々送った。

アンニュイ不足だからアンニュイ

ｓｉｄｅ趙公明

ここは金鰲島の会議室。

何やら崑崙からの使者が来ているようだ。

さあ。もうお約束になっていると思うが言わせて貰おう。

実にアンニュイだ。

僕としても実に困った状態だと言える。

何故ならば、アニメが終わった為に純粋なアンニュイ不足に陥ってしまったのだ！

簡単に説明すると、毎週アニメを見てアンニュイな状態に陥り、しばらくしたらアンニュイ学園の素晴らしい原稿が僕の頭に降りて来ていたのだが……アニメが終わった為に純粋なアンニュイに成れない日々が続いている。

無駄に世界大会を開いてしまったせいで、これよりも上の舞台を考えなければと思うと、さらに僕の筆は鈍りだした。

まったく持ってアンニュイだ。

そして、アンニュイなのに描けないから、さらにアンニュイになる。

もう何が何だかアンニュイ。

おっと、哲学していたら使者が言っていた事を聞き逃してしまった。

まあ良い。

どうせ大した事は言ってないよね？

きっと通天教主様がまとめて説明するだろうし、最終的に通天教主様の指示に従えば問題ないだろう。

うん。通天教主様の話を聞くとなかなか大事そうだ。

しかし、術を破壊しても、星の衝突は避けられない気がするね。

何故なら、あの遠い星が、一年やそこらで来るなんて、正直に言ってヤバい速度が出ているだろう。

この世界には、慣性と言うモノが有って、一度付いた勢いは何らかの等価交換が無い限り減速はしない。

つまり、あの術が加速させるモノだとしたら、正直に言って厳しい可能性がある。
しかし、それだけの速度を出していながら自壊していない所を見ると単純に加速している訳ではなさそうだ。
そう例えば、あの星だけ時間の流れが違うとか？
これなら、星が自壊する事もなく、異常な速度で接近しているのに説明が付く。
術を破壊して、明らかに減速したならば、こちらの可能性が高そうだ。
もし時間を操る術の場合、とても興味があるね。
まあ、加速にしても時間にしても、凄い術なので、きっと何か有れば情報が漏れないように自滅プログラムでも組まれてそうな気がするので、情報を持ち帰る期待はできそうにないか。
まあ、どちらにしても、速くて崩壊しないぐらいの硬さの物体だった場合が最悪だが、その時はその時さ。
通天教主様と星の破壊で一花咲かせるだけだ。
しかし、星か。
そうだ。次のアンニュイ学園の舞台は宇宙と行こうじゃないか！
今なら良いネームが描けそうな気がする。
思い立ったら、そく行動だ。
急いで描き上げるぞと意気込んだのは良いが、困ったことに正大に泣きつかれてしまった。
ああ、僕は急いでるんだ。
話なら後にしてくれ！
え？今じゃなきゃ困る？
何か良い物を貸してくれるまでごねる気かい？
面倒な……仕方ない縛竜索を貸そうじゃないか。
しかし正大よ。
今回の術の傾向を考えると、力や宝貝に頼るよりも、もっと良い方法があるんだ。
まだまだ未熟だね。

失敗しても、成功しても、後で何らかの理由を付けて稽古をする必要がありそうだ。

さてと、時は進んで、今日は待ちに待った星砕きの日だ！
正大？
ああ、彼は無事にミッションを成功させたよ。
しかも、妖怪化した遺物を持ち帰えってきた。
その功績に免じて、稽古の実行には猶予を与えようと思う。
しかし、秦完だったかな？
通天教主様に頼めば、解剖とか解析の許可は下りるだろうか？
いや無いな。
通天教主様は、なかなかに身内や仲間に甘い面があるからね。
仕方ない諦めよう。
でも、今は、そんな事は重要じゃない！
そう星が迫っているんだ。
それに明らかに減速している。
術の力で加速していたのか、時間の流れが変わっていたのか気になる所だけど、もう確認のしようが無い事が残念だ。
若干難易度は下がったが、燃えるシチュエーションには違いない。
そうやって興奮していたら、通天教主様からＧＯサインが出た。
なんと一番槍をくれるようだ。
ここは期待に応えるべきだろう。
別に僕一人で、アレを破壊しても問題無いって事だよね？
そう思っていた時期もありました。
僕の最強華麗技のレインボードラゴンでも押しとどめるだけとは。
正直に言おう舐めていたと。
傍らで、通天教主様と元始天尊くんが加勢するかどうかで揉めている。
二人の宝貝には興味があるけれど、この独壇場を譲るには、いささか惜しい。
ふっ、迷うまでもない。

レインボードラゴンより更に上の力を御見せしようじゃないか！
全ての龍をまとめた金蛟剪は、僕の想像を上回る出力だった。
この黄金の龍ならば壊せない物はないと思えるぐらいに。
そして見事に隕石を分断して見せて、その片方を瞬く間に砕く。
だが想像以上だったのは出力だけでなく、龍を操作する精密性や、
それを維持する為に必要なエネルギーもまた桁違いだったのだ。
僕は、途中でその龍を維持する事が出来なくなってしまった。
これは、龍を自由自在に操り、楽々と維持できるようになる為に僕自身も修行が必要だね。
悪いとは思わないけれど、正大に付きあって貰おう。
しかしながら、三大仙人の力には驚かされる。
通天教主様は呑み込まれるような闇を、元始天尊くんは吸い込まれるような闇を扱って見せたのだから。
傍から見れば別物に見えるが、僕には両方とも尋常じゃないくらい圧縮の力が働いていると見たね。
まあ、どちらにしても尋常じゃない宝貝だ！
やっぱり強大な力は振るってこそ意味がある。
この光景を見れば、それが間違いじゃないと皆思うに決まっているね。
ああ、これからの仙人界が楽しみだ！
それでもやっぱり格別なのは太上老君だったか。
おそらく、あれは軽く宝貝を振るっただけなのだろう。
そう。それだけで、僕の金蛟剪と同等の出力を放って見せた。
ああ、アレが全力を放ったらと思うと、楽しみで仕方ない。
さて、無事に星を砕く事も出来たし、この事を肴に宴としゃれこもうじゃないか。
妹や弟達に準備するように指示を出しておいたから、今夜は宴会だね！

原作開始１８００年前くらい　タダ働きしない為にタダ働きする　休みの為ならサビ残早勤ドンと来い
無ければ作れば良いと気がついた

あの隕石の件以来、俺の抱負は来年から頑張るになった。
これだけ聞くとダメ人間なのだけど言い訳をさせて欲しい。
別に俺が頑張ってない訳じゃいと心から抗議させて貰う。
金鰲島の運営や仕事が、上層部に集中し過ぎて自分の時間が取れないでいるのだ。
ぶっちゃけると妖怪の九割近くは仕事が出来ないか仕事をしないし仕事をしようとも思わない。
なので修行や宝貝や隠れ家の建設などは、来年こそは頑張ると思いつつ、今年が毎回終わるのである。
それでは、かなりの年月が過ぎたのに成長してないねと言われると痛い。
いや、新しい術とかいくつか覚えたのだけど、正直言って実戦で使えるか甚だ疑問だからだ。
ちなみに覚えた術は、なぜか白礼が協力してくれて炎系を覚える事ができた。
それは感謝するのだけど、そのせいで終わりかけてた術に関する書の編纂が増えたのは文句を言っても良いだろうか？え？ダメ？そんな理不尽な。
まあ、術を覚えたとだけ聞くと、あれ？意外と成長してると思えるだろう？
でも、どんな術を覚えたのか聞いてから判断して欲しい。
バーニング身パン拳チ！
熱くて痛い（おもに俺が）
バーニング身キック脚！
熱くて痛い（おもに俺が）
カミカゼ特バー攻焼ニング身！

熱くて痛くて大ダメージ（おもに俺が）
本来は火纏いと言って攻撃に炎ダメージを付与する術らしのだが、普通に熱いし痛いし術者に被害が及ぶから気軽に使えねぇよ！
しかも兄様や姚斌さんに評価して貰った所同じような言葉を頂いた。
「炎は大した事はないけど、煙が厄介。目に入ると異常に沁みて涙が止まらず、吸い込むと喉に激痛が走り、呼吸も困難になる。もう何かの毒レベル」
などなどと、もう炎系の評価じゃないねこれは。
まるでキャンプファイアーに丸ごと生木を使ったぐらいの勢いで煙が出るから仕方ない気もしないでもないけれど。
痛いのと煙が嫌ならば、自分を燃やす火纏いじゃなくて普通に炎を出せば良くないかと思うだろう？
それを行うと、もうマッチレベルの火が一瞬付くだけですよ。
これは、もうライター以下ですわ。
俺って炎系の才能無さ過ぎと言ったら、才能が無かったら覚えることすら出来ないよと明後日の方角を向きながらフォローされた。
オイ。コッチヲミロ！
うん。まあ、仕方ないから炎系に関しては、もう宝貝を自作しようと心に決めた。
そして、そんな時間なんて無いがな！
うん。このままではダメだね。
自分から働きかけないと、休みも給料も永遠に無しだ。
なら何故、今までは行動しなかったのかと言うと、いきなり休みや給料くださいとか言っても、何言ってるのコイツで終わってしまうからだ。
そこで考えた。
まず休みが欲しいなら、シャレにならない仕事量を減らすべき。
自分の仕事を減らすには、他の皆にやって貰うのが一番。
なら皆が仕事したくなるようにすれば良い。
皆が仕事をしたくなる為には、仕事をすると良い物が貰えるように

すれば、仕事がしたくなるはず。
しかし、皆が欲しがる良い物など無い。
欲しい物は個人それぞれである。
なら、どうすれば良いか。
欲しい物と、ある程度交換できる物を作れば良い。
そして、それと引き換えに欲しい物を提供する施設を作り、それが有れば欲しい物が手に入ると思えるようになれば欲しくなるはず。
そうなれば、もうそれ自体が価値あるものと認識されるようになり、逆にそれ自体が欲しい物になる事が理想的。
そうなれば、それさえ有れば休みなんて思うがままさ！
決めた。俺は金鰲島に通貨制度を導入して店を運営するぞ。
これで休みも給料も貰える時代が来るのだ！
あれ？仕事が増えた気がするが気にしない。
そう一時的に増えただけで、未来にはきっと減っているはず。
そして、よくよく考えてみたら店を運営したら給料を払うのは俺な気がする。
いや、きっと通貨制度が根付いた頃には、働いた分だけ給料が貰えるようになるはず。
何も問題ないと、頭によぎる不安をかき消す。
まあ、そんな心配は、兄様と通天教主様を説得してから考えれば良いか。
あの二人を動かせなければ、俺の目論見はご破算だし、まさに杞憂と皮算用なだけだ。
さてと、まずは手始めに兄様の説得をしたいのだけど、どうすれば良いだろうか？
まあ、色々と寝る間を惜しんで夜寝ながら考えたけど、結局は当たって砕けろと結論が出た。
はい。まったくノープランです。
結局早起きして書いた企画書を取り出して思う。
とりあえず、テキトーに兄様が喰いつきそうな話をしてみるかな。
「チョット。兄様うまい話アルヨ。今だけ。アナタだけに特別にお話

ししましょう。この機を逃すなんて大損確定。まさにバスに乗り遅れるようなものだ。さあ何も聞かずにこの書類にサインして、次はこちらの企画書を通天教主様に提出お願いします」
「藪から棒に何だい？今時は詐欺師でも、そんなに胡散臭くはない。しかも雑だ」
「いや、これだけ言えば掴みはバッチリかなと思って」
「うん。バッチリ警戒心がウナギ昇りだね」
「兄様が欲する劇場やカラオケ施設の建設が可能になるかもしれないし、妖怪達が進んで劇団を作ったりミュージカルも積極的に行ってくれる可能性が出てくるかもしれない話だとしても？」
「詳しく聞こうじゃないか」
　簡単に喰いついたよ！
　警戒心はウナギ昇りで、どこ行ったんだよ！
　などとツッコミたいが、兄様が乗り気な内に話を進めてしまおう。
「ちなみに兄様の提案が何故却下されているか理由が分かりますか？
ああ、兄様の私的な道楽目的であるって事を除いて」
「ふむ。ディスカッション形式かい？それを除いてしまうと、金鰲島においては作業に従事する者達。つまりリソースが圧倒的に足りてない事ぐらいしか大きな理由は思い付かないかな」
「さすが兄様。いきなり核心を突くとは」
「まあ、これは上にいる者達が皆思っていることだね」
「なので今回の提案はリソースの向上もしくは、俺達が個人的に使えるリソースを確保するのが目的となる」
「なるほど。余裕があれば僕の提案が通る可能性も上がるし、通らなくてもリソースさえ確保してしまえば自分で作ってしまえば良いと……この話、俄然興味が沸いてきたよ」
　いや、最初から興味津々でしたよね？
　まだ抽象的な話しかしてないのに、かなり乗り気になってますよ。
　これは、かなり雑な計画だけど、意外と思ったより協力が得られそうだ。
「そしてリソースを増やす方法なのですが、今も頑張っている人に更

に頑張ってもらうか、今まで働いてない人を使うかのどちらかになります」
「なるほど。妥当だねと言いたい所だけど前者は鬼畜過ぎないかい？今でも余裕は少ないと思うのだけど。それに働かない者を働かせるのはなかなかに骨が折れるよ。なにせ妖怪は自由なヤツが多いからね」
　自由代表みたいなアナタが言いますかとツッコミたいけど、兄様はけっこう働いている。
　うん。だけど嫌々じゃなくて自分自身の自由意思で働いてる感じが……むしろ、なぜ働いてるのか疑問に思える俺は間違っているのだろうか？
「なので働いている人に褒美を与えます。働いた分だけ貰えるならやる気が出ると言うもの」
「悪くないと思うが、皆がやる気が出る褒美なんてあるのかい？」
「無ければ作れば良いですよ。そう例えば、その褒美が自分の欲しい物と交換できる引換券みたいな物だとどうです？それと引き換えに物やサービスを受け取る事が出来る。まあ、仮に引換券をお金と呼称しておきましょう」
「確かにそれなら欲しがるかもしれない。しかし、物やサービスはどこから持ってくる気だい？」
　そう、そこが問題なのだ。
　最初ばかりは、自らが開拓する必要がある。
「そこは、俺や兄様が始めるしかないですね。しかし、物やサービスを提供すると、お金が集まりますよね？もしお金が欲しい者達が増えたなら、勝手に真似を始めるでしょう」
「上手くいけば物やサービスを進んで提供してくる者達も出てくるかもしれないね。なるほど。そうなれば劇場の建設やミュージカルの人員を買って出る者が出てくる訳か。これは一考の余地がある」
　説得出来た手ごたえを感じる。
　兄様には、是非とも働いて貰いたいし商品を提供して貰いたいのだ。

ほら、『立ってる者は兄でも使え』とか『兄の脛をかじる』とか『兄の威を借る弟』とか言うじゃない？

そう思いながら、先ほど見せた書類を渡した。

「それで、これが提供して欲しい物と売り上げの配分ですね。サインお願いします」

「どれどれ。正大は店を開く予定か。まあ、物は構わないけど、手数料が三割とは取り過ぎじゃないかな？」

「いやいや、それぐらいは取らないと店なんて運営できないから。むしろ折半しないだけ良心的だよ。まずは様子見として百年くらいは、これで試してみない？」

「ノンノンノン。様子見と言って、永続的に続ける気だね？そうか契約期間にも注意が必要なのか」

この後、今後の販売計画について、色々と兄様と詰めた。

今ならよく分かってないだろう兄様から有利な条件を引き出せるかと思ったけど、そんな事は無かった。

警戒心は行方不明だと思っていたのに！

もしや、あの掴みが不味かったのだろうか？

俺は、密かに後悔した。